

大学院教育学研究科
専門職学位課程（教職大学院）
授業科目のシラバス

令和6年度（2024年度）



宮 城 教 育 大 学

もくじ

1. 専門高度化基盤科目

(1) 共通5領域科目

教育課程	1
教科指導	7
教育相談	13
学級・学校経営	25
学校教育・教職研究	29

(2) 学校における実習（基礎実践）

33

2. 専門高度化探究科目

(1) 教科探究科目

37

(2) 特別支援・子ども支援科目

93

(3) 学校課題解決マネジメント科目

107

3. 専門高度化深化科目

(1) 学校における実習（臨床実践）

119

(2) 実践的指導力融合科目

127

専門高度化基盤科目（共通5領域科目）

授業科目名	学びの地図と資質・能力			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	◎平真木夫 金田裕子 齋藤百合				
授業の目的	教育課程における評価の健全なPDCAサイクルを確立させるためにどのような評価課題が必要で、どのように見取るのか、実際にパフォーマンス課題を作成し検証していく。そのために、あるべき知識構造とはどのようなものなのか、深い学びとはどのような状態なのかを考察したい。				
授業の概要	教育課程における評価の健全なPDCAサイクルを確立させるために必要な評価課題の設定について、学習者に実現すべき知識構造や深い学びについておさえつつ、実際にパフォーマンス課題を作成し検証する。				
学習の到達目標	各自の研究テーマに即したパフォーマンス課題とそのルーブリックを作成できること。				
授業の内容	1	オリエンテーション（教科や研究テーマによるグループ分け）（担当：平・金田・齋藤）			
	2	教育評価概論1：教育評価の鳥瞰図（担当：平）			
	3	教育評価概論2：絶対評価と到達度評価（担当：平）			
	4	教育評価概論3：ルーブリック作成の実際（担当：平）			
	5	教育評価概論4：認知心理学からみた記憶理論（担当：平）			
	6	教育評価概論5：深い学びの定義（担当：平）			
	7	教育評価概論6：自己評価と一枚ポートフォリオ（担当：平）			
	8	テスト課題作成準備（担当：平・金田・齋藤）			
	9	テスト実施とルーブリック発表：算数・数学（担当：平・金田・齋藤）			
	10	テスト実施とルーブリック発表：国語（担当：平・金田・齋藤）			
	11	テスト実施とルーブリック発表：総合的な学習の時間（担当：平・金田・齋藤）			
	12	テスト実施とルーブリック発表：外国語活動・英語（担当：平・金田・齋藤）			
	13	テスト実施とルーブリック発表：道徳（担当：平・金田・齋藤）			
	14	テスト実施とルーブリック発表：理科（担当：平・金田・齋藤）			
	15	テスト実施とルーブリック発表：社会科（担当：平・金田・齋藤）			
教科書・参考書等	各自の研究課題にあわせて学習指導要領と国立教育政策研究所が編集している「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」の購入を推奨する。				
評価の観点・方法	【観点】指導案に見られるように授業は何らかの意図に基づいて行われる。その意図を具現化したものとして授業において使われるパフォーマンス課題とそのルーブリックがあるが、それらの完成度を評価する。 【方法】毎時間の振り返り50%、グループディスカッションの内容20%、レポート課題30%。レポート課題は講義で作成したパフォーマンス課題とルーブリック以外に、新たに別の単元のパフォーマンス課題とルーブリックを作成することを予定している。				

成績評価	
標準的な到達水準	<ul style="list-style-type: none"> ・ 基準（評価B） <p>パフォーマンス課題とそのルーブリックを作成できること。</p>
S	各自の研究課題と関連したパフォーマンス課題を作成でき、実用に耐えるルーブリックが作成できる。
A	パフォーマンス課題と完成度の高いルーブリックを作成できる。
B	パフォーマンス課題と簡単なルーブリックを作成できる。
C	パフォーマンス課題しか作成できない。
D	パフォーマンス課題を作成できない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	120分

専門高度化基盤科目（共通5領域科目）

授業科目名	カリキュラムマネジメントと教師の役割			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	◎吉村敏之 本田伊克 猪股亮文 深澤 祐司				
授業の目的	カリキュラムマネジメントの理論と実際について学び、学校現場において授業づくりや教育課程編成を行うための基礎的知見を身につける。				
授業の概要	学習指導におけるPDCAサイクルについて理解し、地域と子どもの教育課題を把握・分析するとともに、その結果に基づいてカリキュラムと授業を計画・実施・検証・改善していくための基礎的な知見を身に付ける。				
学習の到達目標	カリキュラムマネジメントの理論的・実践的知見を、学校教育の課題と子どもの実態に即して理解できる。				
授業の内容	1	なぜカリキュラムマネジメントが求められるのか（吉村・猪股）			
	2	学校におけるカリキュラムマネジメント（1）経験の再構成（吉村）			
	3	学校におけるカリキュラムマネジメント（2）「環境」の整理（吉村）			
	4	学校におけるカリキュラムマネジメント（3）「生活」の発展（吉村）			
	5	カリキュラム（教育課程）に関する理論（本田）			
	6	教育課程の基準としての学習指導要領—その変遷（本田）			
	7	学校組織マネジメントとカリキュラムマネジメントの一体化（猪股）			
	8	ランドデザインとカリキュラムデザインとの連関（猪股）			
	9	カリキュラムマネジメントを実現する校内研修（猪股）			
	10	どのように授業を創るか（1）総合的な学習の時間（深澤）			
	11	どのように授業を創るか（2）各教科での探究学習（深澤）			
	12	子どもを起点にするカリキュラムマネジメント（猪股・深澤・吉村）			
	13	カリキュラムマネジメントの事例と知見の交流（猪股・深澤・吉村）			
	14	カリキュラムマネジメントの事例と知見の省察（猪股・深澤・吉村）			
	15	教師に求められるカリキュラムマネジメントの力とは（吉村・猪股）			
教科書・参考書等	教科書は特に指定せず、毎回、資料を用意する。参考書は、適宜紹介する。				
評価の観点・方法	【観点】①カリキュラムマネジメントに関する理論的・実践的な知見を獲得しているか。②獲得した知見を学校教育の課題や子どもの実態と関連付けることができるか【方法】講義時に出題する課題の出来栄え、話し合い活動における寄与度を総合的に評価する。				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B）</p> <p>カリキュラムマネジメントの理論的・実践的知見を，学校教育の課題と子どもの実態に即して理解している。</p>
S	カリキュラムマネジメントの理論的・実践的知見を，学校教育の課題と子どもの実態に即して十分に理解しているうえ，発展的な考察を行っている。
A	カリキュラムマネジメントの理論的・実践的知見を，学校教育の課題と子どもの実態に即して十分に理解している。
B	カリキュラムマネジメントの理論的・実践的知見を，学校教育の課題と子どもの実態に即して理解している。
C	カリキュラムマネジメントの理論的・実践的知見を理解している。
D	カリキュラムマネジメントの理論的・実践的知見について，求められる理解の水準に到達していない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	120分

専門高度化基盤科目（共通5領域科目）

授業科目名	社会に開かれた教育課程と授業開発			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	◎本田伊克・金田裕子・深澤祐司				
授業の目的	教育課程編成と授業開発を行うための基礎的な知識を獲得する。				
授業の概要	学校と社会との関係がダイナミックに変化する現代日本の教育において、国民や地域社会が求める要求に応答しながら、学校と社会の協同を軸にした教育課程編成と授業開発を行うための知見を身に付ける。				
学習の到達目標	現代日本における学校と社会との関係を教育課程の編成の観点から捉えることができる。社会的な要求と子どもの求めの実現を教育課程の編成に生かし、単元及び授業開発を行うことができる。				
授業の内容	1	オリエンテーション：教育課程編成と社会の要求（担当：本田）			
	2	社会に開かれた教育課程が要請される背景（担当：本田）			
	3	教育課程を社会に開くことの課題に関する理論的アプローチ（担当：本田）			
	4	教育課程を社会に開く際にもとめられる連携・共同の課題（担当：本田）			
	5	地域と学校の協同のヴァリエーション（担当：金田）			
	6	地域と学校の協同：学習参加（担当：金田）			
	7	地域と学校の協同：地域素材（担当：金田）			
	8	地域と学校の協同：表現と創造性（担当：金田）			
	9	学校と社会の協同：実践事例に基づく討論（担当：深澤）			
	10	学校と社会の協同：実践事例に基づく分析と考察（担当：深澤）			
	11	社会との協同を意図した単元づくり：題材の発見（担当：深澤）			
	12	社会との協同を意図した単元づくり：授業計画づくり（担当：深澤）			
	13	社会との協同を意図した単元づくり：模擬授業の実践（担当：本田・金田・深澤）			
	14	社会との協同を意図した単元づくり：模擬授業の振り返りと省察（担当：本田・金田・深澤）			
	15	社会との協同を意図した教育課程と授業をどうつくるか（担当：本田・金田・深澤）			
教科書・参考書等	田村学『深い学び』（東洋館出版社、2018年）（参考書は講義時に適宜紹介する）				
評価の観点・方法	【観点】教育課程をいかに編成するかについて、次の観点から考えることができる。①学校と社会の関係の在りようが教育課程にどう影響しているか、②踏まえるべき社会と子どもの学校教育に対する要求がどのようなものであるか。 【方法】講義時に出題する課題の出来栄え、話し合い活動における寄与度、および最終レポート課題の出来栄えを総合的に評価する。				

成績評価	
標準的な到達基準	<ul style="list-style-type: none"> ・ 基準（評価B） <p>現代日本における学校と社会との関係を教育課程の編成の観点からの確に捉えることができる。社会的な要求と子どもの求めの実現を教育課程の編成に生かす志向性がみられる。</p>
S	現代日本における学校と社会との関係を教育課程の編成の観点からの確に捉えることができる。社会的な要求と子どもの求めの実現を教育課程の編成に生かし、単元及び授業開発を実際に行う準備ができています。
A	現代日本における学校と社会との関係を教育課程の編成の観点からの確に捉えることができる。社会的な要求と子どもの求めの実現を教育課程の編成に生かし、単元及び授業開発に結びつけて考えることができる。
B	現代日本における学校と社会との関係を教育課程の編成の観点からの確に捉えることができる。社会的な要求と子どもの求めの実現を教育課程の編成に生かす志向性がみられる。
C	現代日本における学校と社会との関係を教育課程の編成の観点から捉えることができる。社会的な要求と子どもの求めの実現を教育課程の編成に生かす志向性がみられる。
D	現代日本における学校と社会との関係を教育課程の編成の観点から捉えること、社会的な要求と子どもの求めの実現という観点から教育課程を捉えることができていない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	120分

専門高度化基盤科目（共通5領域科目）

授業科目名	授業設計・教科内容構成論（基礎）		講義・演習		
科目区分	選択必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	◎吉村敏之・児玉忠・市川啓・木下和彦・齋藤百合				
授業の目的	教科の指導内容・方法と授業展開がこれまでどのようにつくられたか、新たな課題はどこにあるか、教科指導の実践上の工夫と課題について学ぶ。				
授業の概要	教科の授業展開・指導方法に関する学術的な専門知識と、当該教科内容の背景となる学問に関する学術的な専門知識との関連性に基づきながら、授業を組織する原理と方法について理論的に考察する力を身に付ける。				
学習の到達目標	<p>（１）教科指導の原理と教科指導の歴史的歩みについて理解する。</p> <p>（２）いくつかの具体的な教科の事例に即して学習指導および評価の歴史的歩みと課題について理解する。</p>				
授業の内容	1	授業の根底をなす学問・芸術（吉村）			
	2	教科指導の原理（１）子どもが主体となる授業（吉村）			
	3	教科指導の原理（２）「深い学び」を促す教材研究（吉村）			
	4	教科各論Ⅰ—国語科の目標（児玉）			
	5	教科各論Ⅰ—国語科の指導法（児玉）			
	6	教科各論Ⅰ—国語科の評価法（児玉）			
	7	教科各論Ⅱ—算数・数学の目標（市川）			
	8	教科各論Ⅱ—算数・数学の指導法（市川）			
	9	教科各論Ⅱ—算数・数学の評価法（市川）			
	10	教科各論Ⅲ—音楽科の目標（木下）			
	11	教科各論Ⅲ—音楽科の指導法（木下）			
	12	教科各論Ⅲ—音楽科の評価法（木下）			
	13	教科指導の授業実践上の課題（齋藤）			
	14	教科指導の授業実践上の工夫（齋藤）			
	15	「深い学び」を生み出す教科指導のあり方（齋藤・吉村）			
教科書・参考書等	教科書：特になし、参考書：『林竹二著作集7 授業の成立』（筑摩書房，1983年）				
評価の観点・方法	<p>【観点】①教科指導の原理と教科指導の歴史的歩みについて理解できるか。②いくつかの具体的な教科の事例に即して学習指導および評価の歴史的歩みと課題について理解できるか。【方法】講義時に出題する課題、話し合い活動の取り組み、および最終レポート課題によって総合的に評価する。</p>				

成績評価	
標準的な到達水準	<ul style="list-style-type: none"> ・ 基準（評価B） <p>教科指導の原理と教科指導の歴史的歩みについて理解し、いくつかの具体的な教科の事例に即して学習指導および評価の歴史的歩みと課題について理解できている。</p>
S	教科指導の原理と教科指導の歴史的歩みについて実践に応用できる水準まで深く理解し、いくつかの具体的な教科の事例に即して学習指導および評価の歴史的歩みと課題について深く理解できている。
A	教科指導の原理と教科指導の歴史的歩みについて十分に理解し、いくつかの具体的な教科の事例に即して学習指導および評価の歴史的歩みと課題について十分に理解できている。
B	教科指導の原理と教科指導の歴史的歩みについて理解し、いくつかの具体的な教科の事例に即して学習指導および評価の歴史的歩みと課題について理解できている。
C	教科指導の原理と教科指導の歴史的歩みの基本を理解し、学習指導および評価の歴史的歩みと課題について基本的な理解ができている。
D	教科指導の原理と教科指導の歴史的歩みについて理解できておらず、いくつかの具体的な教科の事例に即して学習指導および評価の歴史的歩みと課題について理解できていない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	120分

専門高度化基盤科目（共通5領域科目）

授業科目名	授業設計・教科内容構成論（応用）		講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（TT）	単位数 2単位
担当教員名	◎本田伊克・児玉忠・市川啓・鈴木渉・前田正・渡辺尚			
授業の目的	教科の指導内容・方法と授業展開がこれまでどのようにつくられたか、新たな課題はどこにあるかについて学び、教科指導の改善と工夫に生かす。			
授業の概要	教科の授業展開・指導方法に関する学術的な専門知識と、当該教科内容の背景となる学問に関する学術的な専門知識との関連性について、具体的な授業実践を把握する活動を通して考察する。考察を通して、教材研究の進め方、授業展開、授業分析の方法等の教科指導力に関する専門性の向上を図る。			
学習の到達目標	<p>（1）教科指導を通して獲得される学力・学習に関する調査結果を分析し、指導の改善に活用する方法を理解する。</p> <p>（2）教科学習における子どものつまずきを実際の授業を分析してとらえ、つまずきに応じた学習指導の方法を生み出す原則を理解する。</p>			
授業の内容	1	教科で培われる学力と学習の様子をどう捉えるか（本田）		
	2	学力調査結果を分析する際の視点（本田）		
	3	学力調査結果の分析と教科指導の課題（1）国語（児玉）		
	4	学力調査結果の分析と教科指導の課題（2）算数・数学（市川）		
	5	学力調査結果の分析と教科指導の課題（3）英語（鈴木）		
	6	学力調査結果の分析と教科指導の課題（4）理科（渡辺）		
	7	学力調査から子どものつまずきを把握する（本田・児玉・市川・鈴木・前田・渡辺）		
	8	学力調査結果から教科指導の課題を把握する（本田・児玉・市川・鈴木・前田・渡辺）		
	9	教科の授業実践におけるつまずき（1）国語（児玉・本田・前田）		
	10	教科の授業実践におけるつまずき（2）算数・数学（市川・本田・前田）		
	11	教科の授業実践におけるつまずき（3）外国語（鈴木・本田・前田）		
	12	教科の授業実践におけるつまずき（4）理科（渡辺・本田・前田）		
	13	教科学習の実際（1）見通しと振り返り（本田・前田・児玉・市川・鈴木・渡辺）		
	14	教科学習の実際（2）指導としての評価（本田・前田・児玉・市川・鈴木・渡辺）		
	15	これからの教科指導とは（まとめ）（本田）		
教科書・参考書等	（参考書）日本教材学会編『教材事典－教材研究の理論と実践』（東京堂出版、2013年）（他は講義時に適宜紹介する）			
評価の観点・方法	<p>【観点】学力・学習に関する調査データを適切に読み解くことができるか。子どもが教科学習においてつまずきやすい点について理解しているか。これらの知見を教科の授業実践に応用できる準備ができていないか。</p> <p>【方法】講義時に課題の出題の出来栄、話し合い活動における寄与度、および最終レポート課題の出来栄を総合的に評価する。</p>			

成績評価

<p>標準的な到達水準</p>	<p>・基準（評価B）</p> <p>教科指導を通して獲得される学力・学習に関する調査データを読みとり、分析することができ、教科学習における子どもがつまづく点についても十分に理解できている。</p>
<p>S</p>	<p>教科指導を通して獲得される学力・学習に関する調査結果を読みとり、分析し、指導の改善に活用する方法を考えることができ、教科学習において子どもがつまづく点を実際の授業を分析して十分に理解し、つまづきに応じた学習指導の方法を生み出す原理をつかんでいる。</p>
<p>A</p>	<p>教科指導を通して獲得される学力・学習に関する調査結果を読みとり、分析し、指導の改善に活用する方法を考えることができ、教科学習において子どもがつまづく点を実際の授業を分析して十分に理解できている。</p>
<p>B</p>	<p>教科指導を通して獲得される学力・学習に関する調査データを読みとり、分析することができ、教科学習における子どもがつまづく点についても十分に理解できている。</p>
<p>C</p>	<p>教科指導を通して獲得される学力・学習に関する調査データを読み取ることができ、教科学習において子どもがつまづく点について理解できる。</p>
<p>D</p>	<p>教科指導を通して獲得される学力・学習に関する調査データを読み取ることができておらず、教科学習において子どもがどこでつまづくかについても理解できていない。</p>
<p>講義時間外に必要な学修時間の目安</p>	<p>120分</p>

専門高度化基盤科目（共通5領域科目）

授業科目名	教育における臨床の学の創造			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	◎吉村敏之・金田裕子・深澤祐司				
授業の目的	子どもが学習の際に直面する課題に対し、教科専門、教科教育、教職専門のそれぞれの知見を総合し、課題の改善につながる方策を求める。				
授業の概要	本学で40年以上にわたって脈々と蓄積されてきた「教育における臨床の学」の財産をいかし、子どもの学習の道筋に即して学問・芸術の魅力を味わわせる教科指導のあり方をさぐる。				
学習の到達目標	子どもの課題をとらえる力、課題の改善にむけた対応の原理と手法を知る。眼前の子どもの抱える諸課題に対応できる力を培う。				
授業の内容	1	教育における臨床の学—林竹二の思想をふまえて（吉村）			
	2	宮城教育大学における「臨床の学」（1）林竹二の追求した「授業」（吉村）			
	3	宮城教育大学における「臨床の学」（2）高橋金三郎の教授学（吉村）			
	4	宮城教育大学における「臨床の学」（3）斎藤喜博の教授学（吉村）			
	5	「臨床の学」を生み出す「授業」（吉村）			
	6	「臨床の学」の探究（1）学校・教室の課題を把握する（深澤）			
	7	「臨床の学」の探究（2）課題への対応を試みる（深澤）			
	8	「臨床の学」の探究（3）課題への対応について省察する（深澤）			
	9	「臨床の学」の実践事例に学ぶ（1）子どもの発見（金田）			
	10	「臨床の学」の実践事例に学ぶ（2）教材の追求（金田）			
	11	「臨床の学」の実践事例に学ぶ（3）授業の可能性（金田）			
	12	子どもの学習の道筋（1）模擬授業の実践①（吉村・金田・深澤）			
	13	子どもの学習の道筋（2）模擬授業の実践②（金田・深澤・吉村）			
	14	子どもの学習の道筋（3）模擬授業の実践③（深澤・吉村・金田）			
	15	授業を「生きる」こと：模擬授業の実践の省察（吉村・金田・深澤）			
教科書・参考書等	参考書：林竹二『教育の再生を求めて』筑摩書房（他は適宜紹介する）				
評価の観点・方法	【観点】①宮城教育大学における「臨床の学」から子どもの学習の道筋に即した教科指導の在り方の要点を理解できたか。②文献および実践事例の検討を活用し、模擬授業の計画・実践・省察を行えたか。 【方法】講義時に出題する課題、話し合い活動における取り組み状況、および模擬授業の計画・実施・省察の状況を総合的に評価する。				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・ 基準（評価B）</p> <p>宮城教育大学における「臨床の学」から、子どもの学習の道筋に即した教科指導の在り方の要点を理解し、文献および実践事例の検討を活用して模擬授業の計画・実施・省察ができています。</p>
S	宮城教育大学における「臨床の学」から、子どもの学習の道筋に即した教科指導の在り方の要点を高い水準で実践に追うことができるまでに十分に理解し、文献および実践事例の検討を多面的に活用した模擬授業の計画・実施・省察から、眼前の子どもの課題解決の展望を得ることができる。
A	宮城教育大学における「臨床の学」から、子どもの学習の道筋に即した教科指導の在り方の要点を十分に理解し、文献および実践事例の検討を多面的に活用して模擬授業の計画・実施・省察ができています。
B	宮城教育大学における「臨床の学」から、子どもの学習の道筋に即した教科指導の在り方の要点を理解し、文献および実践事例の検討を活用して模擬授業の計画・実施・省察ができています。
C	宮城教育大学における「臨床の学」から、子どもの学習の道筋に即した教科指導の在り方の特徴を理解し、文献および実践事例の検討を踏まえた模擬授業の計画・実施・省察ができています。
D	宮城教育大学における「臨床の学」から、子どもの学習の道筋に即した教科指導の在り方の要点を理解しておらず、文献および実践事例の検討を活用した模擬授業の計画・実施・省察ができていない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	120分

専門高度化基盤科目（共通5領域科目）

授業科目名	子どもの生活と行動・実態把握論		講義・演習		
科目区分	選択必修	授業形態	複数（オムニバス）	単位数	2単位
担当教員名	◎熊谷亮、久保順也				
授業の目的	教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、学校現場における配慮や支援を必要とする児童生徒の実態を把握する。				
授業の概要	教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、学校現場における配慮や支援を必要とする児童生徒の実態を把握するために、カウンセリングや発達、特別支援教育に関する諸理論に照らしつつ、その実態や意味について理解を深めるとともに、演習を通して教育相談活動の中での実際的な活用方法を学ぶ。				
学習の到達目標	教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、学校現場における配慮や支援を必要とする児童生徒の実態を把握し、カウンセリングや発達、特別支援教育に関する諸理論に照らしつつ、その実態や意味について理解し、教育相談活動の中での実際的な活用方法を理解することができる。				
授業の内容	1	オリエンテーション（佐藤・熊谷・久保）			
	2	教育相談と適応支援（佐藤熊谷）			
	3	教育相談や適応支援のためのカウンセリング（理論）（佐藤熊谷）			
	4	教育相談や適応支援のためのカウンセリング（実践）（佐藤熊谷）			
	5	適応と不適応のあいだ（佐藤熊谷）			
	6	教育相談と特別支援教育（熊谷）			
	7	教育相談と特別支援教育の支援のあり方（理論）（熊谷）			
	8	教育相談と特別支援教育の支援のあり方（実践）（熊谷）			
	9	スクールカウンセラーとの学内連携や学外連携（久保）			
	10	学校で活用する家族療法・短期療法：理論（久保）			
	11	学校で活用する家族療法・短期療法：技法（久保）			
	12	ロールプレイによる事例検討①：リフレクションの有効活用（久保）			
	13	ロールプレイによる事例検討②：オルタナティブ・ストーリーの共同構築（久保）			
	14	ロールプレイによる事例検討③：ミドル・リーダーによる後進育成を企図して（久保）			
	15	まとめ（佐藤・熊谷・久保）			
教科書・参考書等	授業の中で随時紹介していく。				
評価の観点・方法	<p>【観点】配慮や支援を必要とする児童生徒の実態を把握できているか。カウンセリングや発達、特別支援教育に関する諸理論に照らしつつ、その実態や意味について理解し、教育相談活動の中での実際的な活用方法を理解できているか。</p> <p>【方法】上記について、授業時間内の課題達成状況やレポート内容を用いて、段階別達成度を評価する。</p>				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B）</p> <p>教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、学校現場における配慮や支援を必要とする児童生徒の実態を把握しており、カウンセリングや発達、特別支援教育に関する諸理論に照らしつつ、その実態や意味について理解し、教育相談活動の中での実際的な活用方法がある程度示すことができる。</p>
S	<p>教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、学校現場における配慮や支援を必要とする児童生徒の実態を明確に示すことができ、かつカウンセリングや発達、特別支援教育に関する諸理論に照らしつつ、その実態や意味について理解し、教育相談活動の中での実際的な活用方法を明確に示すことができる。</p>
A	<p>教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、学校現場における配慮や支援を必要とする児童生徒の実態を示すことができ、かつカウンセリングや発達、特別支援教育に関する諸理論に照らしつつ、その実態や意味について理解し、教育相談活動の中での実際的な活用方法を示すことができる。</p>
B	<p>教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、学校現場における配慮や支援を必要とする児童生徒の実態を把握しており、カウンセリングや発達、特別支援教育に関する諸理論に照らしつつ、その実態や意味について理解し、教育相談活動の中での実際的な活用方法がある程度示すことができる。</p>
C	<p>教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、学校現場における配慮や支援を必要とする児童生徒の実態を把握しており、かつカウンセリングや発達、特別支援教育に関する諸理論に照らしつつ、その実態や意味について理解し、教育相談活動の中での実際的な活用方法を理解している。</p>
D	<p>教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、学校現場における配慮や支援を必要とする児童生徒の実態を把握しておらず、またカウンセリングや発達、特別支援教育に関する諸理論に照らしつつ、その実態や意味について理解した上で教育相談活動の中での実際的な活用方法を理解していない。</p>
講義時間外に必要な学修時間の目安	<p>【予習】 毎回の授業前に、前回授業時に紹介した参考資料等を読んでおく（45分）</p> <p>【復習】 毎回の授業後は、授業の際に用いた資料や教材により得られた知識や気づきを確認する。学んだことについてさらに調べ学習を行い、自分の考えを深める（45分）</p>

専門高度化基盤科目（共通5領域科目）

授業科目名	子どもの生活と行動・実態把握論（特別支援）		講義・演習		
科目区分	選択必修	授業形態	複数（オムニバス）	単位数	2単位
担当教員名	◎熊谷亮、久保順也				
授業の目的	教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、特別支援学校を中心とした学校現場における配慮や支援を必要とする児童生徒の実態を把握する。				
授業の概要	教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、特別支援学校を中心とした学校現場における配慮や支援を必要とする児童生徒の実態を把握するために、カウンセリングや発達、特別支援教育に関する諸理論に照らしつつ、その実態や意味について理解を深めるとともに、演習を通して教育相談活動の中での実際的な活用方法を学ぶ。				
学習の到達目標	教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、特別支援学校を中心とした学校現場における配慮や支援を必要とする児童生徒の実態を把握し、カウンセリングや発達、特別支援教育に関する諸理論に照らしつつ、その実態や意味について理解し、教育相談活動の中での実際的な活用方法を理解することができる。				
授業の内容	1	オリエンテーション（熊谷・久保）			
	2	特別支援学校における教育相談と適応支援（熊谷）			
	3	特別支援学校における教育相談や適応支援のためのカウンセリング（理論）（熊谷）			
	4	特別支援学校における教育相談や適応支援のためのカウンセリング（実践）（熊谷）			
	5	適応と不適応のあいだ（熊谷）			
	6	教育相談と特別支援教育（熊谷）			
	7	教育相談と特別支援教育の支援のあり方（理論）（熊谷）			
	8	教育相談と特別支援教育の支援のあり方（実践）（熊谷）			
	9	スクールカウンセラーとの学内連携や学外連携（久保）			
	10	学校で活用する家族療法・短期療法：理論（久保）			
	11	学校で活用する家族療法・短期療法：技法（久保）			
	12	ロールプレイによる事例検討①：リフレクションの有効活用（久保）			
	13	ロールプレイによる事例検討②：オルタナティブ・ストーリーの共同構築（久保）			
	14	ロールプレイによる事例検討③：ミドル・リーダーによる後進育成を企図して（久保）			
	15	まとめ（熊谷・久保）			
教科書・参考書等	授業の中で随時紹介していく。				
評価の観点・方法	<p>【観点】配慮や支援を必要とする児童生徒の実態を把握できているか。カウンセリングや発達、特別支援教育に関する諸理論に照らしつつ、その実態や意味について理解し、教育相談活動の中での実際的な活用方法を理解することができるか。</p> <p>【方法】上記について、授業時間内の課題達成状況やレポート内容を用いて、段階別達成度を評価する。</p>				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B）</p> <p>教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、特別支援学校を中心とした学校現場における配慮や支援を必要とする児童生徒の実態を把握しており、カウンセリングや発達、特別支援教育に関する諸理論に照らしつつ、その実態や意味について理解し、教育相談活動の中での実際的な活用方法がある程度示すことができる。</p>
S	<p>教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、特別支援学校を中心とした学校現場における配慮や支援を必要とする児童生徒の実態を明確に示すことができ、かつカウンセリングや発達、特別支援教育に関する諸理論に照らしつつ、その実態や意味について理解し、教育相談活動の中での実際的な活用方法を明確に示すことができる。</p>
A	<p>教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、特別支援学校を中心とした学校現場における配慮や支援を必要とする児童生徒の実態を示すことができ、かつカウンセリングや発達、特別支援教育に関する諸理論に照らしつつ、その実態や意味について理解し、教育相談活動の中での実際的な活用方法を示すことができる。</p>
B	<p>教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、特別支援学校を中心とした学校現場における配慮や支援を必要とする児童生徒の実態を把握しており、カウンセリングや発達、特別支援教育に関する諸理論に照らしつつ、その実態や意味について理解し、教育相談活動の中での実際的な活用方法がある程度示すことができる。</p>
C	<p>教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、特別支援学校を中心とした学校現場における配慮や支援を必要とする児童生徒の実態を把握しており、かつカウンセリングや発達、特別支援教育に関する諸理論に照らしつつ、その実態や意味について理解し、教育相談活動の中での実際的な活用方法を理解している。</p>
D	<p>教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、特別支援学校を中心とした学校現場における配慮や支援を必要とする児童生徒の実態を把握しておらず、またカウンセリングや発達、特別支援教育に関する諸理論に照らしつつ、その実態や意味について理解した上で教育相談活動の中での実際的な活用方法を理解していない。</p>
講義時間外に必要な学修時間の目安	<p>【予習】 毎回の授業前に、前回授業時に紹介した参考資料等を読んでおく（45分）</p> <p>【復習】 毎回の授業後は、授業の際に用いた資料や教材により得られた知識や気づきを確認する。学んだことについてさらに調べ学習を行い、自分の考えを深める（45分）</p>

専門高度化基盤科目（共通5領域科目）

授業科目名	子どもの生活と行動・実態分析論		講義・演習		
科目区分	選択必修	授業形態	複数（オムニバス）	単位数	2単位
担当教員名	◎久保順也、熊谷亮				
授業の目的	教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、配慮や支援を必要とする児童生徒の実態の背景要因やメカニズム等について分析や評価、検討の方法論について理論的に学ぶとともに、演習を通して学校生活全体を通じた指導内容・指導方法と児童生徒の適応との関係や支援方法について、体験的学習を行う。				
授業の概要	「子どもの生活と行動・実態把握論」で学修した資料や知識等を土台としつつ、教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、配慮や支援を必要とする児童生徒の実態の背景要因やメカニズム等について分析や評価、検討の方法論について理論的に学ぶとともに、演習を通して学校生活全体を通じた指導内容・指導方法と児童生徒の適応との関係や支援方法について、体験的学習を行う。				
学習の到達目標	教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、配慮や支援を必要とする児童生徒の実態の背景要因やメカニズム等について理解し、学校生活全体を通じた指導内容・指導方法と児童生徒の適応との関係や支援方法について理解することができる。				
授業の内容	1	オリエンテーション（久保・熊谷）			
	2	教育相談と適応支援の実態分析（久保）			
	3	教育相談や適応支援のためのカウンセリングの実態（久保）			
	4	教育相談や適応支援のためのカウンセリングの課題（実践）（久保）			
	5	適応支援についての演習（久保）			
	6	教育相談と特別支援教育の実態分析（熊谷）			
	7	教育相談と特別支援教育の支援の理論（理論）（熊谷）			
	8	教育相談と特別支援教育の支援の課題（熊谷）			
	9	特別支援教育についての演習（熊谷）			
	10	家族療法・短期療法の事例発表と分析①：不登校の事例（久保）			
	11	家族療法・短期療法の事例発表と分析②：機関間連携の事例（久保）			
	12	ロールプレイによる発表と分析①：リフレクションの有効活用（久保）			
	13	ロールプレイによる発表と分析②：オルタナティブ・ストーリーの共同構築（久保）			
	14	ロールプレイによる発表と分析③：ミドル・リーダーによる後進育成を企図して（久保）			
	15	まとめ（久保・熊谷）			
教科書・参考書等	授業の中で随時紹介していく。				
評価の観点・方法	<p>【観点】 配慮や支援を必要とする児童生徒の実態の背景要因やメカニズム等を理解しているか。学校生活全体を通じた指導内容・指導方法と児童生徒の適応との関係や支援方法について理解しているか。</p> <p>【方法】 上記について、授業時間内の課題達成状況やレポート内容を用いて、段階別達成度を評価する。</p>				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・ 基準（評価B）</p> <p>教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、配慮や支援を必要とする児童生徒の実態の背景要因やメカニズム等について理解しており、かつ学校生活全体を通した指導内容・指導方法と児童生徒の適応との関係や支援方法についてある程度示すことができる。</p>
S	<p>教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、配慮や支援を必要とする児童生徒の実態の背景要因やメカニズム等について明確に示すことができ、かつ学校生活全体を通した指導内容・指導方法と児童生徒の適応との関係や支援方法について明確に示すことができる。</p>
A	<p>教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、配慮や支援を必要とする児童生徒の実態の背景要因やメカニズム等について示すことができ、かつ学校生活全体を通した指導内容・指導方法と児童生徒の適応との関係や支援方法について示すことができる。</p>
B	<p>教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、配慮や支援を必要とする児童生徒の実態の背景要因やメカニズム等について理解しており、かつ学校生活全体を通した指導内容・指導方法と児童生徒の適応との関係や支援方法についてある程度示すことができる。</p>
C	<p>教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、配慮や支援を必要とする児童生徒の実態の背景要因やメカニズム等について理解しており、かつ学校生活全体を通した指導内容・指導方法と児童生徒の適応との関係や支援方法について理解している。</p>
D	<p>教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、配慮や支援を必要とする児童生徒の実態の背景要因やメカニズム等について理解できておらず、また学校生活全体を通した指導内容・指導方法と児童生徒の適応との関係や支援方法について理解していない。</p>
講義時間外に必要な学修時間の目安	<p>【予習】 毎回の授業前に、前回授業時に紹介した参考資料等を読んでおく（45分）</p> <p>【復習】 毎回の授業後は、授業の際に用いた資料や教材により得られた知識や気づきを確認する。学んだことについてさらに調べ学習を行い、自分の考えを深める（45分）</p>

専門高度化基盤科目（共通5領域科目）

授業科目名	子どもの生活と行動・実態分析論（特別支援）		講義・演習		
科目区分	選択必修	授業形態	複数（オムニバス）	単位数	2単位
担当教員名	◎久保順也、熊谷亮				
授業の目的	教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、特別支援学校における配慮や支援を必要とする児童生徒の実態の背景要因やメカニズム等について分析や評価、検討の方法論について理論的に学ぶとともに、演習を通して学校生活全体を通じた指導内容・指導方法と児童生徒の適応との関係や支援方法について、体験的学習を行う。				
授業の概要	「子どもの生活と行動・実態把握論」で学修した資料や知識等を土台としつつ、教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、特別支援学校における配慮や支援を必要とする児童生徒の実態の背景要因やメカニズム等について分析や評価、検討の方法論について理論的に学ぶとともに、演習を通して学校生活全体を通じた指導内容・指導方法と児童生徒の適応との関係や支援方法について、体験的学習を行う。				
学習の到達目標	教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、特別支援学校における配慮や支援を必要とする児童生徒の実態の背景要因やメカニズム等について理解し、学校生活全体を通じた指導内容・指導方法と児童生徒の適応との関係や支援方法について理解することができる。				
授業の内容	1	オリエンテーション（久保・熊谷）			
	2	教育相談と適応支援の実態分析（久保）			
	3	教育相談や適応支援のためのカウンセリングの実態（久保）			
	4	教育相談や適応支援のためのカウンセリングの課題（実践）（久保）			
	5	適応支援についての演習（久保）			
	6	教育相談と特別支援教育の実態分析（熊谷）			
	7	教育相談と特別支援教育の支援の理論（理論）（熊谷）			
	8	教育相談と特別支援教育の支援の課題（熊谷）			
	9	特別支援教育についての演習（熊谷）			
	10	家族療法・短期療法の事例発表と分析①：不登校の事例（久保）			
	11	家族療法・短期療法の事例発表と分析②：機関間連携の事例（久保）			
	12	ロールプレイによる発表と分析①：リフレクションの有効活用（久保）			
	13	ロールプレイによる発表と分析②：オルタナティブ・ストーリーの共同構築（久保）			
	14	ロールプレイによる発表と分析③：ミドル・リーダーによる後進育成を企図して（久保）			
	15	まとめ（久保・熊谷）			
教科書・参考書等	授業の中で随時紹介していく。				
評価の観点・方法	<p>【観点】配慮や支援を必要とする児童生徒の実態の背景要因やメカニズム等を理解しているか。学校生活全体を通じた指導内容・指導方法と児童生徒の適応との関係や支援方法について理解しているか。</p> <p>【方法】上記について、授業時間内の課題達成状況やレポート内容を用いて、段階別達成度を評価する。</p>				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B）</p> <p>教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、特別支援学校における配慮や支援を必要とする児童生徒の実態の背景要因やメカニズム等について理解しており、かつ学校生活全体を通した指導内容・指導方法と児童生徒の適応との関係や支援方法についてある程度示すことができる。</p>
S	<p>教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、特別支援学校における配慮や支援を必要とする児童生徒の実態の背景要因やメカニズム等について明確に示すことができ、かつ学校生活全体を通した指導内容・指導方法と児童生徒の適応との関係や支援方法について明確に示すことができる。</p>
A	<p>教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、特別支援学校における配慮や支援を必要とする児童生徒の実態の背景要因やメカニズム等について示すことができ、かつ学校生活全体を通した指導内容・指導方法と児童生徒の適応との関係や支援方法について示すことができる。</p>
B	<p>教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、特別支援学校における配慮や支援を必要とする児童生徒の実態の背景要因やメカニズム等について理解しており、かつ学校生活全体を通した指導内容・指導方法と児童生徒の適応との関係や支援方法についてある程度示すことができる。</p>
C	<p>教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、特別支援学校における配慮や支援を必要とする児童生徒の実態の背景要因やメカニズム等について理解しており、かつ学校生活全体を通した指導内容・指導方法と児童生徒の適応との関係や支援方法について理解している。</p>
D	<p>教育相談（適応支援領域・特別支援教育領域）の観点から、特別支援学校における配慮や支援を必要とする児童生徒の実態の背景要因やメカニズム等について理解できておらず、また学校生活全体を通した指導内容・指導方法と児童生徒の適応との関係や支援方法について理解していない。</p>
講義時間外に必要な学修時間の目安	<p>【予習】 毎回の授業前に、前回授業時に紹介した参考資料等を読んでおく（45分）</p> <p>【復習】 毎回の授業後は、授業の際に用いた資料や教材により得られた知識や気づきを確認する。学んだことについてさらに調べ学習を行い、自分の考えを深める（45分）</p>

専門高度化基盤科目（共通5領域科目）

授業科目名	特別支援教育と学校・学級経営			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（オムニバス）	単位数	2単位
担当教員名	◎菅井裕行・三科聡子・野崎義和				
授業の目的	特別支援教育にかかわる教育制度、教育法規を前提とした、特別支援教育の組織的運営について概観する。特別支援学校と通常学校、それぞれにおける実践の質的向上のための方途を種々の事例を通じて学ぶ。また、地域における特別支援学校のセンター的役割やコンサルテーション活動・交流・共同学習の進め方を検討する。				
授業の概要	配慮を必要とする児童生徒を含めた学級経営や学校運営の状況についての具体的実践例を踏まえて理論的考察を行うとともに、ユニバーサルデザインの視点を踏まえた授業展開や生徒指導等についてケーススタディを行う。				
学習の到達目標	①通常学校における特別支援学級・通級指導教室の運営、特別支援教育コーディネーターと校内委員会の役割、通常学級における合理的配慮や就学の支援について、具体的内容を策定・実施できる。②特別支援教育にかかわる学校内の組織運営、研修・研究体制の整備・運用と学級における支援方法の具体を解説できる。				
授業の内容	1	オリエンテーション 近年の配慮を必要とする子どもをめぐる状況について（菅井）			
	2	共生社会をめざしたインクルーシブ教育についての基礎的理解（菅井）			
	3	合理的配慮と学校教育の基本的概念理解（菅井）			
	4	特別支援学校における合理的配慮の実践に関する事例検討（1）（視覚障害を中心に）（三科）			
	5	特別支援学校における合理的配慮の実践に関する事例検討（2）（知的障害・聴覚障害を中心に）（鳩原）			
	6	特別支援学校における合理的配慮の実践に関する事例検討（3）（発達障害を中心に）（野崎）			
	7	幼稚園・小・中・高等学校における特別支援教育に関わる今日課題（三科）			
	8	幼稚園・小・中・高等学校における特別支援教育に関わる学校経営と協働（鳩原）			
	9	幼稚園・小・中・高等学校における特別支援教育に関わる学校経営の事例検討（1）（コーディネーターの機能）（三科）			
	10	幼稚園・小・中・高等学校等における特別支援教育に関わる学校経営の事例検討（2）（校内連携）（鳩原）			
	11	インクルージョン教育で求められる学校形態と経営方法（三科）			
	12	医療・心理・福祉の専門職との連携（菅井）			
	13	インクルーシブ教育実践に向けた課題に関するラウンドテーブルの企画・実践（1）（連携をめぐって）（三科）			
	14	インクルーシブ教育実践に向けた課題に関するラウンドテーブルの企画・実践（2）（合理的配慮をめぐって）（武井）			
	15	全体の振り返りとプレゼンテーション（菅井）			
教科書・参考書等	<教科書>履修者の関心に基づき、その都度提示する。<参考書>国立特別支援教育総合研究所（2015）『特別支援教育の基礎・基本 新訂版』ジアース教育新社				
評価の観点・方法	【観点】特別支援教育にかかわる教育制度、教育法規を前提とした、特別支援教育の組織的運営についての理解状況により評価する。特別支援学校と通常学校、それぞれにおける実践の質的向上のための方途、地域における特別支援学校のセンター的役割やコンサルテーション活動・交流・共同学習の進め方が身についているかどうかを判断基準とする。【方法】レポートとディスカッション、ラウンドテーブルの企画・実施の状況により総合的に評価する。				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B）</p> <p>特別支援教育にかかわる教育制度、教育法規を前提とした、特別支援教育の組織的運営、特別支援学校と通常学校それぞれにおける実践の質的向上のための方途、地域における特別支援学校のセンター的役割やコンサルテーション活動・交流・共同学習の進め方について十分に理解し、得られた知見を整理した形で示すことができる。</p>
S	特別支援教育にかかわる教育制度、教育法規を前提とした、特別支援教育の組織的運営、特別支援学校と通常学校それぞれにおける実践の質的向上のための方途、地域における特別支援学校のセンター的役割やコンサルテーション活動・交流・共同学習の進め方を明確に示すことができる。
A	特別支援教育にかかわる教育制度、教育法規を前提とした、特別支援教育の組織的運営、特別支援学校と通常学校それぞれにおける実践の質的向上のための方途、地域における特別支援学校のセンター的役割やコンサルテーション活動・交流・共同学習の進め方について得られた知見を、整理した形で示すとともに、具体的な実践の見通しを示すことができる。
B	特別支援教育にかかわる教育制度、教育法規を前提とした、特別支援教育の組織的運営、特別支援学校と通常学校それぞれにおける実践の質的向上のための方途、地域における特別支援学校のセンター的役割やコンサルテーション活動・交流・共同学習の進め方について十分に理解し、得られた知見を整理した形で示すことができる。
C	特別支援教育にかかわる教育制度、教育法規を前提とした、特別支援教育の組織的運営、特別支援学校と通常学校それぞれにおける実践の質的向上のための方途、地域における特別支援学校のセンター的役割やコンサルテーション活動・交流・共同学習の進め方について、得られた知見を示すことができる。
D	特別支援教育にかかわる教育制度、教育法規を前提とした、特別支援教育の組織的運営、特別支援学校と通常学校それぞれにおける実践の質的向上のための方途、地域における特別支援学校のセンター的役割やコンサルテーション活動・交流・共同学習の進め方について得られた知見を示すことができていない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	<p>【予習】毎回の授業前に、前回授業時まで配布する資料をもとに、授業のテーマについて調べておく（45分）</p> <p>【復習】毎回の授業後には、授業の際に用いた資料や教材により得られた知識や気づきを確認する。学んだことについてさらに調べ学習を行い、自分の考えを深める（45分）</p>

専門高度化基盤科目（共通5領域科目）

授業科目名	特別支援教育と学校・学級経営（特別支援）			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（オムニバス）	単位数	2単位
担当教員名	◎菅井裕行・三科聡子・野崎義和				
授業の目的	特別支援教育にかかわる教育制度、教育法規を前提とした、特別支援教育の組織的運営について概観する。特別支援学校と通常学校、それぞれにおける実践の質的向上のための方途を種々の事例を通じて学ぶ。また、地域における特別支援学校のセンター的役割やコンサルテーション活動・交流・共同学習の進め方を検討する。				
授業の概要	配慮を必要とする児童生徒を含めた学級経営や学校運営の状況についての具体的実践例を踏まえて理論的考察を行うとともに、ユニバーサルデザインの視点を踏まえた授業展開や生徒指導等についてケーススタディを行う。				
学習の到達目標	①通常学校における特別支援学級・通級指導教室の運営、特別支援教育コーディネーターと校内委員会の役割、通常学級における合理的配慮や就学の支援について、具体的内容を策定・実施できる。②特別支援教育にかかわる学校内の組織運営、研修・研究体制の整備・運用と学級における支援方法の具体を解説できる。。				
授業の内容	1	オリエンテーション 近年の配慮を必要とする子どもをめぐる状況について（菅井）			
	2	共生社会をめざしたインクルーシブ教育についての基礎的理解（菅井）			
	3	合理的配慮と学校教育の基本的概念理解（菅井）			
	4	特別支援学校における合理的配慮の実践に関する事例検討（1）（視覚障害を中心に）（三科）			
	5	特別支援学校における合理的配慮の実践に関する事例検討（2）（知的障害・聴覚障害を中心に）（鳩原）			
	6	特別支援学校における合理的配慮の実践に関する事例検討（3）（発達障害を中心に）（野崎）			
	7	幼稚園・小・中・高等学校における特別支援教育に関わる今日課題（三科）			
	8	幼稚園・小・中・高等学校における特別支援教育に関わる学校経営と協働（鳩原）			
	9	幼稚園・小・中・高等学校における特別支援教育に関わる学校経営の事例検討（1）（コーディネーターの機能）（三科）			
	10	幼稚園・小・中・高等学校等における特別支援教育に関わる学校経営の事例検討（2）（校内連携）（鳩原）			
	11	インクルージョン教育で求められる学校形態と経営方法（三科）			
	12	医療・心理・福祉の専門職との連携（菅井）			
	13	インクルーシブ教育実践に向けた課題に関するラウンドテーブルの企画・実践（1）（連携をめぐって）			
	14	インクルーシブ教育実践に向けた課題に関するラウンドテーブルの企画・実践（2）（合理的配慮をめぐって）			
	15	全体の振り返りとプレゼンテーション（菅井）			
教科書・参考書等	<教科書>履修者の関心にに基づき、その都度提示する。<参考書>国立特別支援教育総合研究所（2015）『特別支援教育の基礎・基本 新訂版』ジアース教育新社				
評価の観点・方法	【観点】特別支援教育にかかわる教育制度、教育法規を前提とした、特別支援教育の組織的運営についての理解状況により評価する。特別支援学校と通常学校、それぞれにおける実践の質的向上のための方途、地域における特別支援学校のセンター的役割やコンサルテーション活動・交流・共同学習の進め方が身についているかどうかを判断基準とする。【方法】レポートとディスカッション、ラウンドテーブルの企画・実施の状況により総合的に評価する。				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B）</p> <p>特別支援教育にかかわる教育制度、教育法規を前提とした、特別支援教育の組織的運営、特別支援学校と通常学校それぞれにおける実践の質的向上のための方途、地域における特別支援学校のセンター的役割やコンサルテーション活動・交流・共同学習の進め方について十分に理解し、得られた知見を整理した形で示すことができる。</p>
S	特別支援教育にかかわる教育制度、教育法規を前提とした、特別支援教育の組織的運営、特別支援学校と通常学校それぞれにおける実践の質的向上のための方途、地域における特別支援学校のセンター的役割やコンサルテーション活動・交流・共同学習の進め方を明確に示すことができる。
A	特別支援教育にかかわる教育制度、教育法規を前提とした、特別支援教育の組織的運営、特別支援学校と通常学校それぞれにおける実践の質的向上のための方途、地域における特別支援学校のセンター的役割やコンサルテーション活動・交流・共同学習の進め方について得られた知見を、整理した形で示すとともに、具体的な実践の見通しを示すことができる。
B	特別支援教育にかかわる教育制度、教育法規を前提とした、特別支援教育の組織的運営、特別支援学校と通常学校それぞれにおける実践の質的向上のための方途、地域における特別支援学校のセンター的役割やコンサルテーション活動・交流・共同学習の進め方について十分に理解し、得られた知見を整理した形で示すことができる。
C	特別支援教育にかかわる教育制度、教育法規を前提とした、特別支援教育の組織的運営、特別支援学校と通常学校それぞれにおける実践の質的向上のための方途、地域における特別支援学校のセンター的役割やコンサルテーション活動・交流・共同学習の進め方について、得られた知見を示すことができる。
D	特別支援教育にかかわる教育制度、教育法規を前提とした、特別支援教育の組織的運営、特別支援学校と通常学校それぞれにおける実践の質的向上のための方途、地域における特別支援学校のセンター的役割やコンサルテーション活動・交流・共同学習の進め方について得られた知見を示すことができていない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	<p>【予習】毎回の授業前に、前回授業時まで配布する資料をもとに、授業のテーマについて調べておく（45分）</p> <p>【復習】毎回の授業後には、授業の際に用いた資料や教材により得られた知識や気づきを確認する。学んだことについてさらに調べ学習を行い、自分の考えを深める（45分）</p>

専門高度化基盤科目（共通5領域科目）

授業科目名	安心・安全な学級・学校づくり（基礎）			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	◎齋藤百合、市瀬智紀、久保順也、佐々木孝徳、高橋亜紀子、本図愛実				
授業の目的	子どもたちが安心して安全に過ごすことができる、学級・学年・学校の経営について、多様な観点から捉え直し、実現方法を検討する。クラスルーム：pcvvimz				
授業の概要	学年・学校経営の基礎的事項及び技術について事例とともに学ぶ。望ましい集団づくり、いじめ未然防止と対応、外国籍の児童生徒を含む、インクルーシブな学級づくり、不登校への対応、安全の確保、危機管理について考察する。クラスルーム：mxbi7qg				
学習の到達目標	子どもたちが安心して安全に過ごすことができる、望ましい学級・学年・学校経営を行うための基本的知識とスキルを身につける。				
授業の内容	1	ガイダンス／望ましい集団づくり（本図・佐々木・齋藤）			
	2	学校教育目標の実現と組織マネジメント（本図）			
	3	学級経営の基礎理論①／危機管理のためのリーダーシップ（本図・佐々木・齋藤）			
	4	いじめ防止とインクルーシブ教育の接合点（久保）			
	5	外国人児童生徒等の理解（市瀬・高橋）			
	6	外国人児童生徒等の指導方法（市瀬・高橋）			
	7	外国人児童生徒等の指導と関係機関（市瀬・高橋）			
	8	生徒指導提要の理解と展開①／学校安全の基礎（本図・佐々木・齋藤）			
	9	生徒指導提要の理解と展開②／人材育成（本図・佐々木・齋藤）			
	10	特別な支援を要する児童生徒の指導方法と関係機関（本図・佐々木・齋藤）			
	11	学校経営の基礎理論②／同僚性を高める手立て（本図・佐々木・齋藤）			
	12	危機管理（本図・佐々木・齋藤）			
	13	学校事故の事例研究（本図）			
	14	学級経営の実現に向けて／いじめ防止の事例検討（本図・佐々木・齋藤）			
	15	安心・安全な学級・学校づくり まとめ（本図・佐々木・齋藤）			
教科書・参考書等	仙台市教育委員会（2019）『不登校対策ハンドブック』（仙台市教育センターホームページからPDF版入手可能）／本図愛実他編（2021）『グローバル時代のホールスクール・マネジメント』ジダイ社／文部科学省総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課（2019）『外国人児童生徒受入れの手引き』／ロバート・グリーンリーフ（2016）『サーバントであれ』、ジェームズ・ハンター（2012）『サーバント・リーダー』／文部科学省『生徒指導提要』				
評価の観点・方法	各回に課す小レポート（50%），最終レポート（成果物）（50%）				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B）</p> <p>子どもたちが安心して安全に過ごすことができる、望ましい学級・学年・学校経営を行うための基本的知識を習得している。</p>
S	<p>全ての子どもたちが安心して安全に過ごすことができる、学級・学年・学校経営について、多面的・多角的な観点からの考察が可視的に展開されている。</p>
A	<p>全ての子どもたちが安心して安全に過ごすことができる、望ましい学級・学年・学校経営を行うための基本的知識を習得し、スキル向上の具体的方法が検討されている。</p>
B	<p>子どもたちが安心して安全に過ごすことができる、望ましい学級・学年・学校経営を行うための基本的知識を習得している。</p>
C	<p>学級・学年・学校経営を行うための基本的知識を理解している。</p>
D	<p>望ましい学級・学年・学校経営を行うための基本的知識の習得が十分ではない。</p>
講義時間外に必要な学修時間の目安	150分

専門高度化基盤科目（共通5領域科目）

授業科目名	安心・安全な学級・学校づくり（応用）			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	◎本図愛実、市瀬智紀、佐々木孝徳、齋藤百合、高橋亜紀子、田端健人				
授業の目的	社会的要請に応える、安心・安全な学校について、学校グランドデザインを基にその実現方法について多角的に検討する。				
授業の概要	学力と評価に関わる歴史や政策ならびに国際的な教育課題解決に関わる動向を基に、学校マネジメントの現状と課題を考察し、全ての子どもの学ぶ意欲を高め、学力向上を導く学校グランドデザイン／単元計画・指導案を作成する。クラスルーム：ikeim4n				
学習の到達目標	勤務校等の実態をふまえ、全ての子どもの学力向上を導くという点から、学校マネジメントの現状と課題ならびに改善点を考察し、学校グランドデザイン／単元計画・指導案を作成する。				
授業の内容	1	ガイダンス・各教科の見方・考え方（佐々木・本図・全員）			
	2	学力調査結果の分析と理解（田端）			
	3	グランドデザインと学校づくり（佐々木・齋藤・本図）			
	4	学力向上を導く学校づくりとは（佐々木・齋藤・本図）			
	5	より配慮が必要な子どもの理解と支援（外国語を話す子ども）（高橋）			
	6	より配慮が必要な子どもの理解（児童相談所）（佐々木・齋藤・本図）			
	7	より配慮が必要な子どもの理解を踏まえた支援方法（児童相談所）（佐々木・齋藤・本図）			
	8	全ての子どものための学校づくり（佐々木・齋藤・本図）			
	9	学力向上を導く校内研究の進め方（佐々木・齋藤・本図）			
	10	校内共同研究の分析とデザイン（佐々木・齋藤・本図）			
	11	校内共同研究の分析と新しい学びの可能性（佐々木・齋藤・本図）			
	12	学力論のまとめ（佐々木・齋藤・本図）			
	13	全ての子どもの成長に関する国際動向（市瀬）			
	14	単元計画・指導案の作成（佐々木・齋藤・本図）			
	15	成果物の発表と協議（全員）			
教科書・参考書等	UNESCO (2017) Education for Sustainable Development Goals: Learning Objectives (ISBN 978-92-3-100209-0). ユネスコ (1997) 『学習:秘められた宝 : ユネスコ「21世紀教育国際委員会」報告書』ぎょうせい				
評価の観点・方法	各回に課す小レポート（50%）,最終レポート（50%）				

成績評価

<p>標準的な到達水準</p>	<p>・基準（評価B）</p> <p>学校マネジメントの現状と課題から改善点を考察し、学校グランドデザイン／単元計画・指導案を作成する</p>
<p>S</p>	<p>全ての子どもが学力向上を導くという点から、学校マネジメントの現状と課題ならびに改善点を考察し、実効性の高い学校グランドデザイン／全ての子どもが学ぶ意欲を高める単元計画・指導案の実現方法が展開されようとしている。</p>
<p>A</p>	<p>全ての子どもが学力向上を導くという点から、学校マネジメントの現状と課題ならびに改善点を考察し、実効性の高い学校グランドデザイン／全ての子どもが学ぶ意欲を高める単元計画・指導案を作成している。</p>
<p>B</p>	<p>学校マネジメントの現状と課題ならびに改善点を考察し、学校グランドデザイン／単元計画・指導案を作成している。</p>
<p>C</p>	<p>学校マネジメントの現状と課題ならびに改善点の考察が部分的に行われている。</p>
<p>D</p>	<p>学校マネジメントの現状と課題ならびに改善点の考察が不十分である。</p>
<p>講義時間外に必要な学修時間の目安</p>	<p>120分</p>

専門高度化基盤科目（共通5領域科目）

授業科目名	地域協働と学校づくり			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	◎佐々木孝徳、市瀬智紀、小田隆史、齋藤百合、本図愛実				
授業の目的	学校づくりにおいては地域教育資源を活用しつつ、カリキュラム・マネジメントを行っていくことが重要である。それらを通じた子どもの学びの質の向上と各教員の成長について考え、勤務校等の実態に応じた地域協働学校計画の在り方を考察する。				
授業の概要	組織マネジメントとカリキュラム・マネジメントを土台とし、地域教育資源の活用について、その多元性、多様性を事例とともに考察し、地域協働による学校づくりの在り方について検討する。防災、歴史、地理、国際関係などを取り上げる。これらを基に、見直しの視点を明確にしつつ、探究的な活動を素材とする、効果的な地域協働学校計画作成を目指す。クラスルーム：lwvhjsy				
学習の到達目標	地域教育資源の活用とカリキュラム・マネジメントに関する基本的な知識を習得し、それに基づいた地域協働学校計画を見直し改善する視点（現職）あるいは効果的な授業デザイン（学部新卒生）を提案することができる。				
授業の内容	1	ガイダンス・学校と地域の関係（本図・全員）			
	2	地域教育資源の活用（本図・全員）			
	3	SDGSの考え方と展開（国際）（市瀬・全員）			
	4	SDGSの考え方と展開（国内）（市瀬・全員）			
	5	防災の視点から考える地域協働と学校づくり（事故報告書から）（佐々木・全員）			
	6	防災・歴史・地理の視点から考える地域協働と学校づくり（小田・全員） （集中・5月25日実施予定）			
	7	防災・歴史・地理の視点から考える地域協働と学校づくり（現地学習）（小田・全員） （集中・5月25日実施予定）			
	8	防災・歴史・地理の視点から考える地域協働と学校づくり（現地学習）（小田・全員） （集中・5月25日実施予定）			
	9	防災・歴史・地理の視点から考える地域協働と学校づくり（現地学習）（小田・全員） （集中・5月25日実施予定）			
	10	現地学習振り返り（佐々木・齋藤・本図）			
	11	地域教育資源を活用した探究的な学びの展開（佐々木・齋藤・本図）			
	12	学校の外からの視点・コミュニティスクール（佐々木・齋藤・本図）			
	13	探究的な学びとカリキュラム・マネジメントならびに授業改善（佐々木・齋藤）			
	14	地域協働学校計画の見直し・授業デザインに関する討議（全員）			
	15	地域協働学校計画の見直し・授業デザインに関する発表・討議（全員）			
教科書・参考書等	参考書：仙台市（2023）防災環境都市WEB読本/ ACCU(2021)「変容を捉え、変容につながる評価のカたち」/小田隆史（2023）『学校安全ポケット必携』東京法令出版				
評価の観点・方法	<p>観点：①SDGsの展開を含む地域協働に関する理論的な動向を理解することができたか。②地域教育資源の活用とカリキュラム・マネジメントに関する基本的な知識を習得できたか、③それらを踏まえた地域協働学校計画の見直しの視点を持ち、具体的対応を効果的に提案することができるか</p> <p>方法：テーマごとに課す小レポート（50%）、最終レポート（50%）</p>				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B）</p> <p>SDGsの展開を含む地域協働に関する理論的な動向を理解し、地域教育資源の効果的な活用を含む、地域協働学校計画の見直しの視点をもっている。</p>
S	地域教育資源の効果的な活用を含む地域協働学校計画について、先進的で包括的な提案をすることができる。
A	地域教育資源の効果的な活用を含む地域協働学校計画について、見直しの視点を持ち、実効性の高い提案をすることができる。
B	地域教育資源の効果的な活用を含む地域協働学校計画について、見直しの視点を持ち、具体的な提案をすることができる。
C	SDGsの展開を含む地域協働に関する理論的な動向を理解し、地域教育資源の効果的な活用について知っている。
D	SDGsの展開を含む地域協働に関する理論的な動向、地域教育資源の効果的な活用についての理解が不十分である。
講義時間外に必要な学修時間の目安	120分

専門高度化基盤科目（共通5領域科目）

授業科目名	教師の成長と子どもの発達			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	小塩さとみ, 倉戸テル, 越中康治, 佐々木孝徳, ◎田端健人				
授業の目的	教師の成長にあわせ子どもの発達について理解を深めるとともに、子どもが主体的・対話的な学びを通して発達課題の達成と社会的自立を図ることを促進できる実践的指導力を修得する。				
授業の概要	教師の成長との関連で子どもの発達について学ぶとともに、子どもの認知・非認知スキルを育成する主体的・対話的な学びのあり方を、演習・事例検討を通して発達段階ごとに考える。				
学習の到達目標	(1) 教師の成長と子どもの認知・社会性等の発達について理解する。 (2) 子どもが主体的・対話的な学びを通して発達課題の達成と社会的自立を図ることを促進できる実践的指導力を修得する。				
授業の内容	1	オリエンテーション（全員）			
	2	教師における発達観・指導観の多様性（越中）			
	3	教師の成長と発達観・指導観の変化（越中）			
	4	発達に関する理論の基礎（越中）			
	5	子ども時代の認知の発達の变化（越中）			
	6	子ども時代の道徳性・社会性の発達の变化（越中）			
	7	子どもの認知・非認知スキルの発達と主体的・対話的な学び（田端）			
	8	子どもの道徳性と討議倫理の発達段階（田端）			
	9	子どもの身体表現と非認知スキル（倉戸・小塩・田端）			
	10	音楽によるコミュニケーションとコミュニティ形成（倉戸・小塩・田端）			
	11	子ども主体の対話の国際比較（田端）			
	12	学校現場における指導の実際：幼児期（越中・佐々木）			
	13	学校現場における指導の実際：小学校（田端・佐々木）			
	14	学校現場における指導の実際：中学校・高等学校（田端・佐々木）			
	15	まとめ（全員）			
教科書・参考書等	参考書・参考資料等 無藤隆・中坪史典・西山修編, 2010『発達心理学』ミネルヴァ書房. OECD, 2015, Skills for Social Progress: The Power of Social and Emotional Skills. (OECDホームページからPDF版入手可能) ジョン・ハッティ. 2018『学習に何が最も効果的か』原田信之訳者代表、あいり出版. 田端健人, 2021『子どもの言葉データサイエンス入門』パイディア出版. p4cみやぎ出版企画委員会, 2017『子どもたちの未来を拓く 探究の対話「p4c」』東京書籍.				
評価の観点・方法	【観点】①教師の成長と子どもの認知・社会性等の発達について理解できるか。②子どもが主体的・対話的な学びを通して発達課題の達成と社会的自立を図ることを促進できる実践的指導力を修得できるか。 【方法】講義時に出題する課題、話し合い活動における取り組み状況、および最終レポート課題を総合的に評価する。				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B）</p> <p>教師の成長と子どもの認知・社会性等の発達について理解し，子どもが主体的・対話的な学びを通して発達課題の達成と社会的自立を図ることを促進できる実践的指導力を修得できている。</p>
S	教師の成長と子どもの認知・社会性等の発達について実践的指導において活用可能な水準で十分に理解し，子どもが主体的・対話的な学びを通して発達課題の達成と社会的自立を図ることを促進できる実践的指導力を十分に修得できている。
A	教師の成長と子どもの認知・社会性等の発達について十分に理解し，子どもが主体的・対話的な学びを通して発達課題の達成と社会的自立を図ることを促進できる実践的指導力を十分に修得できている。
B	教師の成長と子どもの認知・社会性等の発達について理解し，子どもが主体的・対話的な学びを通して発達課題の達成と社会的自立を図ることを促進できる実践的指導力を修得できている。
C	教師の成長と子どもの認知・社会性等の発達について考え，子どもが主体的・対話的な学びを通して発達課題の達成と社会的自立を図ることを促進できる実践的指導力について考察することができている。
D	教師の成長と子どもの認知・社会性等の発達について理解できておらず，子どもが主体的・対話的な学びを通して発達課題の達成と社会的自立を図ることを促進できる実践的指導力を修得できていない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	120分

専門高度化基盤科目（学校における実習（基礎実践））

授業科目名	学校課題探究実習Ⅰ			実習	
科目区分	必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	全専任教員				
授業の目的	学生各自の実践研究テーマに即して、学習指導および生活指導をめぐる課題や子どもの実態等を把握し、学校における教育実践の計画を立てる。				
授業の概要	実習校を活用し、授業参観や学校活動への関わりを通じて、各自の実践研究のテーマに関わる教科の教材、指導、子どもの実態などの教育課題の様相を把握し、自らの教育実践の計画を立てる基礎をつくる。				
学習の到達目標	各自の実践研究テーマに関わる学校課題（教科指導、学級づくり、子ども支援等）の実態について把握する状況分析力、自らの教育実践の基礎的な計画を立てる企画力を養う。				
授業の内容	・実習校を活用し、授業参観や学校活動への関わりにより、実践研究テーマに即して、各職種・教科・領域あるいは単元等における学習指導の課題と子どもの実態を把握する（状況分析力を養う）。				
	・教職大学院の教員が、実習校担当教員と連携して指導を行う。				
	・実習記録、授業観察記録等を作成・分析・考察し、課題等に関するレポートを作成し、自らの研究テーマに関する学校課題を明らかにし、解決のための取り組みの見通しを持つ（研究実践の企画力を培う）。				
教科書・参考書等	履修者の関心に基づき、その都度提示する。				
評価の観点・方法	<p>【観点】（1）学校における教科指導、学級づくり、子ども支援等の課題への取り組みが計画的、組織的に行われていることを理解しているか。</p> <p>（2）学校における教育課題がどのように共有され、その解決に向けていかなる改善策が計画され、実施され、評価されているかについて知りえたことを整理し、自らの教育実践等の計画を立てる基礎とすることができているか。【方法】実習校担当教員に所見・意見を求めるとともに、シラバスに示された到達水準に基づき、実習記録、実習の成果や課題等に関するレポート等もふまえて総合的に評価する。</p>				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B）</p> <p>自らの実践研究テーマに関する学校の取組みが計画的、組織的な営みであることを理解し、課題の解決に取り組む方法と成果の見通しを持ち、それを示すことができる。</p>
S	自らの実践研究テーマに関する学校の取組みが計画的、組織的な営みであることを十分に理解したうえで、課題の解決に取り組む具体的な方法と成果の見通しを持ち、それを適切な根拠とともに示すことができる。
A	自らの実践研究テーマに関する学校の取組みが計画的、組織的な営みであることを理解したうえで、課題の解決に取り組む具体的な方法と成果の見通しを持ち、それを根拠とともに示すことができる。
B	自らの実践研究テーマに関する学校の取組みが計画的、組織的な営みであることを理解したうえで、課題の解決に取り組む方法と成果の見通しを持ち、それを示すことができる。
C	自らの実践研究テーマに関する学校の取組みが計画的、組織的な営みであることを理解したうえで、課題の解決に取り組む方法について検討した結果を示すことができる。
D	自らの実践研究テーマに関する学校の取組みが計画的、組織的な営みであることが十分に理解できず、課題の解決に取り組む方法について検討した結果を示すことができない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	毎回、事前・事後にそれぞれ90分

専門高度化基盤科目（学校における実習（基礎実践））

授業科目名	学校課題探究実習Ⅱ			実習	
科目区分	必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	全専任教員				
授業の目的	実践研究テーマに沿って、実習校で計画的な教育実践を試行し、理論系の授業科目で修得した内容等と関連付けながら成果と課題を適切に省察する方法を身につける。				
授業の概要	授業、学級経営、子ども支援等に関わる自己の教育課題を見出し、解決のための具体的な方法を立案、実証する手法を学ぶ。学校課題探究実習Ⅰでの学修成果をもとに、各院生の実践研究テーマに関わる学習指導・支援等の計画を立て、教育実践を行い、成果と課題を省察する。				
学習の到達目標	教育課題（教科指導、学級経営、子ども支援等）の把握に基づいて教育実践を行う企画力・実行力と、その結果を省察し、自らの実践の課題を見出す探究力を身につける。				
授業の内容	・教職大学院の教員が、実習校担当教員と連携して指導を行う。				
	・学校課題探究実習Ⅰでの学修成果をもとに、各自の実践研究テーマに関わる教育課題について、学習指導計画や支援計画を立て、教育実践を行い、その結果を考察し、課題を見出す（研究実践に必要な企画力・実行力・探究力を養う）。				
教科書・参考書等	履修者の関心に基づき、その都度提示する。				
評価の観点・方法	<p>【観点】（1）教育課題とその改善プロセスの把握に基づいて、自らの教育実践を計画し、適切に実施することができるか。</p> <p>（2）自ら行った教育実践の結果について省察し、その課題を見出すことができるか。</p> <p>【方法】実習校担当教員に所見・意見を求めるとともに、シラバスに示された到達水準に基づき、実習記録、実習の成果や課題等に関するレポート等もふまえて総合的に評価する。</p>				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B：標準とされる到達度）</p> <p>自らの実践研究テーマに関する教育課題とその改善過程の把握に基づいた教育実践を計画的に実施し、その成果について省察した結果を示すことができている。</p>
S	自らの実践研究テーマに関する教育課題とその改善過程の把握に基づいた教育実践を計画的に実施し、その成果について客観的に省察した結果に基づき、課題の改善を経て新たな実践を行うことができている。
A	自らの実践研究テーマに関する教育課題とその改善過程の把握に基づいた教育実践を計画的に実施し、その成果について客観的に省察した結果と課題を示すことができている。
B	自らの実践研究テーマに関する教育課題とその改善過程の把握に基づいた計画的な教育実践を実施し、その成果について省察した結果を示すことができている。
C	自らの実践研究テーマに関する教育課題とその改善過程の把握に基づいた教育実践を実施することができる。
D	自らの実践研究テーマに関する教育課題とその改善過程の把握に基づいた教育実践を実施できていない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	毎回、事前・事後にそれぞれ90分

専門高度化探究科目（教科探究科目）

授業科目名	教育における臨床の知			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	◎吉村敏之・金田裕子・越中康治・深澤祐司				
授業の目的	「深い学び」の実現にむけて、児童・生徒の内面世界を理解し、教材の価値を発見し、質の高い授業を創出する、教育における臨床の知を追求する。子どもの心理と教科の論理をつなぐ知とはどのようなものかを知り、その知を身に付ける実践と研究のあり方を探る。				
授業の概要	授業における学習の事実への臨床的研究により、児童・生徒の内面世界の理解を深め、教材の魅力を発見し、「深い学び」の実現にむけた指導のあり方を探る。実際の授業の事例を検討しながら、子どもの学習の質、教師の指導のあり方を省察し、改善する臨床の知を求める。				
学習の到達目標	（１）「深い学び」の実現にむけて、児童・生徒の内面世界を理解し、教材の価値を発見し、質の高い授業を創出する、教育における臨床の知について理解する。 （２）子どもの心理と教科の論理をつなぐ知とはどのようなものかを知り、その知を身に付ける実践と研究のあり方を理解する。				
授業の内容	1	オリエンテーション：「深い学び」とは何か（吉村・金田・越中・深澤）			
	2	「深い学び」が求められる社会的背景（金田）			
	3	「深い学び」を導く理論（金田）			
	4	児童・生徒の内面世界への接近（越中）			
	5	児童・生徒の内面世界の理解（越中）			
	6	授業研究の歴史（１）子どもの事実へのまなざし（吉村）			
	7	授業研究の歴史（２）授業の創造（吉村）			
	8	授業研究の歴史（３）授業の深化（吉村）			
	9	授業研究の現在（１）世界に広がる授業研究（金田）			
	10	授業研究の現在（２）モードシフト（金田）			
	11	授業における子どもの事実の臨床研究（１）観察する（深澤）			
	12	授業における子どもの事実の臨床研究（２）記録する（深澤）			
	13	授業における子どもの事実の臨床研究（３）省察する（深澤）			
	14	「深い学び」を創る臨床の知（１）（吉村・金田・越中・深澤）			
	15	「深い学び」を創る臨床の知（２）（吉村・金田・越中・深澤）			
教科書・参考書等	参考書：『林竹二著作集7 授業の成立』筑摩書房（他は適宜紹介）				
評価の観点・方法	【観点】①「深い学び」の実現にむけて、児童・生徒の内面世界を理解し、教材の価値を発見し、質の高い授業を創出する、教育における臨床の知について理解できたか。②子どもの心理と教科の論理をつなぐ知とはどのようなものかを知り、その知を身に付ける実践と研究のあり方を理解できたか。 【方法】講義時に出題する課題、話し合い活動における取り組み状況、および模擬授業の計画・実施・省察の状況を総合的に評価する。				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・ 基準（評価B）</p> <p>「深い学び」の実現にむけて、児童・生徒の内面世界を理解し、教材の価値を発見し、質の高い授業を創出する、教育における臨床の知について理解し、子どもの心理と教科の論理をつなぐ知とはどのようなものかを知り、その知を身に付ける実践と研究のあり方を理解できている。</p>
S	<p>「深い学び」の実現にむけて、児童・生徒の内面世界を理解し、教材の価値を発見し、質の高い授業を創出する、教育における臨床の知について高い水準で実践に応用できるまでに十分に理解し、子どもの心理と教科の論理をつなぐ知とはどのようなものかを知り、その知を身に付ける実践と研究のあり方を十分に理解できている。</p>
A	<p>「深い学び」の実現にむけて、児童・生徒の内面世界を理解し、教材の価値を発見し、質の高い授業を創出する、教育における臨床の知について十分に理解し、子どもの心理と教科の論理をつなぐ知とはどのようなものかを知り、その知を身に付ける実践と研究のあり方を十分に理解できている。</p>
B	<p>「深い学び」の実現にむけて、児童・生徒の内面世界を理解し、教材の価値を発見し、質の高い授業を創出する、教育における臨床の知について理解し、子どもの心理と教科の論理をつなぐ知とはどのようなものかを知り、その知を身に付ける実践と研究のあり方を理解できている。</p>
C	<p>「深い学び」の実現にむけて、児童・生徒の内面世界を理解し、教材の価値を発見し、質の高い授業を創出する、教育における臨床の知の基礎について理解し、子どもの心理と教科の論理をつなぐ知とはどのようなものかを知り、その知を身に付ける実践と研究のあり方の基本を理解できている。</p>
D	<p>「深い学び」の実現にむけて、児童・生徒の内面世界を理解し、教材の価値を発見し、質の高い授業を創出する、教育における臨床の知について理解できておらず、子どもの心理と教科の論理をつなぐ知とはどのようなものかを知り、その知を身に付ける実践と研究のあり方を理解できていない。</p>
講義時間外に必要な学修時間の目安	120分

専門高度化探究科目（教科探究科目）

授業科目名	教育実践記録と授業分析論			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	◎金田 裕子・吉村 敏之・深澤祐司				
授業の目的	教育実践記録をよみ解き、書く活動によって、授業を省察し、学習を組織できる力を培う。				
授業の概要	本学に蓄積されている教育実践アーカイブを活用し、授業の文書記録と映像記録をもとに、記録に現れた授業に関する典型的な課題を見出す。自身の授業実践の経験を省察する方法論、自身の授業実践の事実と事実から得た知見をエピソード記述として描く方法論を身に付ける。				
学習の到達目標	授業における子どもの事実が記され、事実に基づく教師の省察が示された、教育実践記録をよみ解く。さらに自身の授業について、エピソード記述を行い、省察する。記録をよみ、書くことにより、子どもの学習の道筋をとらえ、教材を追求し、学習集団を組織できる力を培う。				
授業の内容	1	オリエンテーション：エピソード記述とは何か（吉村・金田・深澤）			
	2	エピソード記述の方法（金田）			
	3	文書記録を読む（1）子ども理解（吉村）			
	4	文書記録を読む（2）教材研究（吉村）			
	5	文書記録を読む（3）授業の展開（吉村）			
	6	文書記録による実践の省察：プロセスレコード（金田）			
	7	映像記録をよむ（1）教室の空間（金田）			
	8	映像記録をよむ（2）教室の時間（金田）			
	9	映像記録をよむ（3）教室のコミュニケーション（金田）			
	10	映像記録による実践の省察（金田・深澤・吉村）			
	11	教育実践記録を用いた子ども理解（深澤）			
	12	教育実践記録を用いた教材研究（深澤）			
	13	エピソード記述の交流（1）（吉村・金田・深澤）			
	14	エピソード記述の交流（2）（金田・吉村・深澤）			
	15	エピソード記述の交流（3）（深澤・金田・吉村）			
教科書・参考書等	教科書：特になし、参考書：鯨岡峻『子どもは育てられて育つ』慶応義塾大学出版会				
評価の観点・方法	【観点】①授業記録をよみ解けるか、②記録をもとに授業の省察ができるか、③エピソード記述ができるか【方法】毎回の小レポート、エピソード記述、交流活動の取り組み				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・ 基準（評価B）</p> <p>記録に描かれた授業の事実を具体的にとらえ、授業のすぐれた点を具体的に見出すことができる。記録による省察をふまえ、自分自身の教育実践のエピソードを具体的に描ける。</p>
S	<p>記録に描かれた授業における子どもの学習を具体的にとらえ、教師の指導のすぐれた点を具体的に見出すことができる。記録による省察をふまえ、自分自身の教育実践における子どものエピソードを具体的に描ける。さらに、記録のよみ解き、エピソードの記述において、子どもの伸びを促す要因を省察できる。</p>
A	<p>記録に描かれた授業における子どもの学習を具体的にとらえ、教師の指導のすぐれた点を具体的に見出すことができる。記録による省察をふまえ、自分自身の教育実践における子どものエピソードを具体的に描き、エピソードの意味付けを行うことができる。</p>
B	<p>記録に描かれた授業の事実を具体的にとらえ、授業のすぐれた点を具体的に見出すことができる。記録による省察をふまえ、自分自身の教育実践のエピソードを具体的に描ける。</p>
C	<p>記録に描かれた授業の事実をとらえ、授業のすぐれた点を見出すことができる。記録による省察をふまえ、自分自身の教育実践のエピソードを描ける。</p>
D	<p>記録に描かれた授業の事実をとらえられず、授業のすぐれた点を見出すことができない。自分自身の教育実践のエピソードを描けない。</p>
講義時間外に必要な学修時間の目安	120分

専門高度化探究科目（教科探究科目）

授業科目名	社会変動と学力論			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	◎本田伊克 吉村敏之 宮澤孝子 山田美都雄				
授業の目的	現在と将来の学校教育はいかなる学力を培うべきかを理解し、学校現場での学習指導および教育課程編成に生かす。				
授業の概要	変動の激しい現代日本の社会において、学校教育に求められる課題の変遷と現状について把握するとともに、こうした学校に要請される社会的課題が、学校で育てるべき「学力」の特徴と方向性等について持っている意味について、教育学的に構想するために必要な知見を学ぶ。				
学習の到達目標	現在および将来の学校教育に求められる学力の性格がどのようなものであり、いかに実現していくべきかを、学校の課題と子どもの実態に即して理解できる。				
授業の内容	1	社会の変動の中で学力をいかに問うべきか（本田）			
	2	社会の動向とカリキュラム～「学力」から「資質・能力」へ（本田）			
	3	学力問題の動向（1）国は学力に口出しできるのか～教育法の視点から（宮澤）			
	4	学力問題の動向（2）日本の授業実践の歴史の中で学力はいかに問われてきたか（吉村）			
	5	学力問題の動向（3）学力についてのデータをどう読み解き、どう生かすか（山田）			
	6	学力問題の動向（4）新しい「資質・能力」の社会学的検討（本田）			
	7	変わる学校制度と子どもの教育機会（宮澤・本田・山田・吉村）			
	8	情報化の進展と学力（山田・本田・宮澤・吉村）			
	9	社会の変化と幼児教育・義務教育に求められる学力（本田・宮澤・山田・吉村）			
	10	地域と学校の連携を通じて培われる学力（本田・宮澤・山田・吉村）			
	11	ジェンダーとカリキュラム（宮澤・本田・山田・吉村）			
	12	マイノリティと学力（本田・宮澤・山田・吉村）			
	13	競争から共生を目指す学力とその評価（本田・宮澤・山田・吉村）			
	14	子どもの貧困と学力（本田・宮澤・山田・吉村）			
	15	社会が求める学力と教師の成長・発達（本田・宮澤・山田・吉村）			
教科書・参考書等	酒井朗編著『アクティベート教育学03 現代社会と教育』（ミネルヴァ書房、2021年）（参考書は講義時に適宜紹介する）				
評価の観点・方法	【観点】現在および将来の学力の在り方と実現の仕方について、学校現場や子どもの実態に即して考えることができているか。 【方法】講義時に出题する課題の出来栄え、話し合い活動における寄与度、および最終レポート課題の出来栄えを総合的に評価する。				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・ 基準（評価B）</p> <p>現在および将来の学校教育に求められる学力の性格がどのようなものであり、いかに実現していくべきかについて理解している。</p>
S	<p>現在および将来の学校教育に求められる学力の性格がどのようなものであり、いかに実現していくべきかを、学校の課題と子どもの実態に即して十分に理解したうえで、どのような学力を学校現場で培っていくか提案する準備ができています。</p>
A	<p>現在および将来の学校教育に求められる学力の性格がどのようなものであり、いかに実現していくべきかを、学校の課題と子どもの実態に即して十分に理解できている。</p>
B	<p>現在および将来の学校教育に求められる学力の性格がどのようなものであり、いかに実現していくべきかについて、十分に理解できている。</p>
C	<p>現在および将来の学校教育に求められる学力の性格がどのようなものであり、いかに実現していくべきかについて理解している。</p>
D	<p>現在および将来の学校教育に求められる学力の性格がどのようなものであり、いかに実現していくべきかについて、理解ができていない。</p>
講義時間外に必要な学修時間の目安	120分

専門高度化探究科目（教科探究科目）

授業科目名	クロスカリキュラムの学習と評価			講義	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（オムニバス）	単位数	2単位
担当教員名	◎本田伊克・斉藤千映美・溝田浩二				
授業の目的	クロスカリキュラム型の学習の意義と手法を身につけ、学習指導に活用することができる。				
授業の概要	クロスカリキュラム（教科横断）型学習は、教科学習をこれからの時代に求められる資質・能力の育成に結びつけるための、鍵となる重要な手法である。この授業では教科横断型学習の意義、課題設定・教材開発・授業づくりという一連の流れを、地域の自然環境と循環共生社会に関わる題材を取り上げて学ぶ。				
学習の到達目標	クロスカリキュラム（教科横断）型学習に関する理論的・実践的知見を、学校の課題と子どもの実態に即して理解することができる。				
授業の内容	1	学校におけるクロスカリキュラム学習の背景（本田）			
	2	クロスカリキュラムにおける評価（本田）			
	3	クロスカリキュラムの学習の教育史的展開（本田）			
	4	クロスカリキュラムの学習の現在の課題（本田）			
	5	地域課題の探究とクロスカリキュラム（斉藤）			
	6	身の回りの事象と見方・考え方（演習）（斉藤）			
	7	探求課題の設定と展開（斉藤）			
	8	探求課題の設定（演習）（斉藤）			
	9	探求課題の展開（演習）（斉藤）			
	10	探究学習の設定と展開（講義・演習）（斉藤）			
	11	教科横断的な探究学習（斉藤）			
	12	教科横断的な探究学習の方法（演習）（斉藤）			
	13	教科横断的な探究学習の過程（演習）（斉藤）			
	14	教科横断的な探究活動の方法と過程（講義・演習）（斉藤）			
	15	これからのクロスカリキュラム学習を構想する（まとめ）（本田・斉藤）			
教科書・参考書等	（参考書） ・SDGsで変えるこれからの学び（ぎょうせい）2020年 ・人と自然をつなぐ教育―自然体験教育学入門―（能條 歩著）北海道自然体験活動サポートセンター2020年				
評価の観点・方法	【観点】クロスカリキュラム学習の意義が理解されているか。学校・地域における自然環境と循環共生社会の課題がどのように共有され、クロスカリキュラム学習がその解決に向けてどのように計画され、教材開発が行われ、実施され、評価されているかについて自らの知見として整理し、自らの学習指導等の計画を立て教材開発と実践を行うための基礎とすることができているか。 【方法】授業時間内の課題達成状況、レポートを用いて、段階別達成度を評価し、自己評価・相互評価を踏まえて総合的に評価する。				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B）</p> <p>学校・地域における自然環境と循環共生社会の課題をどのように共有し、クロスカリキュラム学習をその解決に向けてどのように計画し、教材開発を行い、実施し、評価するかについて得られた知見を整理した形で示すことができる。</p>
S	<p>学校・地域における自然環境と循環共生社会の課題をどのように共有し、クロスカリキュラム学習をその解決に向けてどのように計画し、教材開発を行い、実施し、評価するかについて得られた知見を整理した形で示すとともに、自らの学習指導等の計画を立て教材開発と実践を行う見通しを明確に示すことができる。</p>
A	<p>学校・地域における自然環境と循環共生社会の課題をどのように共有し、クロスカリキュラム学習をその解決に向けてどのように計画し、教材開発を行い、実施し、評価するかについて得られた知見を整理した形で示すとともに、自らの学習指導等の計画を立て教材開発と実践を行う見通しを示すことができる。</p>
B	<p>学校・地域における自然環境と循環共生社会の課題をどのように共有し、クロスカリキュラム学習をその解決に向けてどのように計画し、教材開発を行い、実施し、評価するかについて得られた知見を整理した形で示すことができる。</p>
C	<p>学校・地域における自然環境と循環共生社会の課題をどのように共有し、クロスカリキュラム学習をその解決に向けてどのように計画し、教材開発を行い、実施し、評価するかについて得られた知見を示すことができる。</p>
D	<p>学校・地域における自然環境と循環共生社会の課題をどのように共有し、クロスカリキュラム学習をその解決に向けてどのように計画し、教材開発を行い、実施し、評価するかについて得られた知見を示すことができていない。</p>
講義時間外に必要な学修時間の目安	<p>【予習】毎回の授業前に、前回授業時まで配布する資料をもとに、授業のテーマについて調べておく（45分）</p> <p>【復習】毎回の授業後には、授業の際に用いた資料や教材により得られた知識や気づきを確認する。学んだことについてさらに調べ学習を行い、自分の考えを深める（45分）</p>

専門高度化探究科目（教科探究科目）

授業科目名	授業検証と教科内容開発（基礎・国語科）			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	◎児玉忠 中地文 佐野幹 津田智史				
授業の目的	国語科教育の理論と実践とを関連付けながら、教材を開発したり授業を検証したりすることについての基礎的な力を身に付ける				
授業の概要	国語科に焦点を当て、教科の学習成果を検証・評価する学術的な専門知識と、国語科の教科内容の拝見となる学問に関する学術的な専門知識とを、教材として実際的かつ具体的に構成していく活動との関連性について理論的に考察する力を身に付ける。				
学習の到達目標	国語科を基礎付ける教科内容に関する専門知識と関連させながら、国語科教育研究の先行研究の調べ方、読み方、生かし方などを習得することを通して、実際の国語科の授業を検証・評価する。				
授業の内容	1	オリエンテーション			
	2	学習指導要領の変遷(1)			
	3	学習指導要領の変遷(2)			
	4	国語科教育の実践動向の検討（話すこと）			
	5	国語科教育の実践動向の検討（聞くこと）			
	6	国語科教育の実践動向の検討（話し合うこと）			
	7	国語科教育の実践動向の検討（書くこと：論理的文章）			
	8	国語科教育の実践動向の検討（書くこと：創作的文章）			
	9	国語科教育の実践動向の検討（書くこと：実用的文章）			
	10	国語科教育の実践動向の検討（読むこと：詩歌）			
	11	国語科教育の実践動向の検討（読むこと：物語・小説）			
	12	国語科教育の実践動向の検討（読むこと：説明文・評論）			
	13	国語科教育の実践動向の検討（読むこと：古文・漢文）			
	14	国語科教育の実践動向の検討（国語の特質）			
	15	講義のまとめ			
教科書・参考書等	小学校学習指導要領（国語）、中学校学習指導要領（国語）、高等学校学習指導要領（国語）				
評価の観点・方法	<p>【観点】①国語科教育の理論的知見と実践的知見を関連付けることができるか。②国語科の教材の開発や授業の検証を行う基礎的な力が身についているか。</p> <p>【方法】授業中の議論、授業ごとの小レポート、授業の最終レポートなどを総合的に判断して評価する。</p>				

成績評価	
標準的な到達水準	<ul style="list-style-type: none"> ・ 基準（評価B） <p>課題の条件（観点・方法、内容・分量など）を満たしつつ、独自の課題意識でレポートをまとめている。</p>
S	<p>課題の条件（観点・方法、内容・分量など）を満たしつつ、発展的な課題についても独自に取り組んでレポートをまとめている。</p>
A	<p>課題の条件（観点・方法、内容・分量など）を満たしつつ、独自の課題意識と新たな成果でレポートをまとめている。</p>
B	<p>課題の条件（観点・方法、内容・分量など）を満たしつつ、独自の課題意識でレポートをまとめている。</p>
C	<p>課題の条件（観点・方法、内容・分量など）を満たして最終レポートをまとめている。</p>
D	<p>レポートをまとめているものの、課題の条件（観点・方法、内容・分量など）を満たすことができていない。</p>
講義時間外に必要な学修時間の目安	2時間

専門高度化探究科目（教科探究科目）

授業科目名	授業検証と教科内容開発（応用・国語科）			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	◎佐野幹 津田智史 児玉忠 中地文				
授業の目的	国語科教育の理論と実践とを関連付けながら、教材を開発したり授業を検証したりすることについての応用的な力を身に付ける。				
授業の概要	国語科に焦点を当て、教科の学習成果を検証・評価する学術的な専門知識と、国語科の教科内容の拝見となる学問に関する学術的な専門知識とをふまえ、教材として実際的かつ具体的に構成していくことを通して、教科指導力に関する専門性の向上を図る。				
学習の到達目標	国語科を基礎付ける教科内容に関する専門知識と関連させながら、国語科教育研究の先行研究の調べ方、読み方、生かし方などを習得することを通して、実際の国語科の授業を検証・活用したり教材を開発したりする。				
授業の内容	1	オリエンテーション			
	2	授業実践の検証（学習者研究からの単元構想）			
	3	授業実践の検証（教材研究からの授業計画）			
	4	授業実践の検証（授業実践からの授業評価）			
	5	授業成果の活用（学習者の実態や発達特性の把握）			
	6	授業成果の活用（教材開発・教材選択の妥当性）			
	7	授業成果の活用（学習課題・学習過程の有効性）			
	8	授業成果の活用（学習活動・学習形態の適切性）			
	9	授業成果の活用（単元構想・カリキュラム・マネジメント）			
	10	教材開発と授業改善（話すこと聞くこと）			
	11	教材開発と授業改善（書くこと）			
	12	教材開発と授業改善（読むこと：文学的文章）			
	13	教材開発と授業改善（読むこと：説明的文章）			
	14	教材開発と授業改善（言語文化と国語の特質）			
	15	授業のまとめ			
教科書・参考書等	小学校学習指導要領（国語）、中学校学習指導要領（国語）、高等学校学習指導要領				
評価の観点・方法	【観点】国語科の理論的知見と実践的知見を関連付けて新しい知見を生み出せるか。 ②そうした知見を国語科の教材開発・研究や授業づくりに応用することができるか。 【方法】授業中の議論、授業ごとの小レポート、授業の最終レポートなどを総合的に判断して評価する。				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B）</p> <p>課題の条件（観点・方法、内容・分量など）を満たしつつ、独自の課題意識をもってレポートをまとめている。</p>
S	<p>課題の条件（観点・方法、内容・分量など）を満たしつつ、発展的な課題についても独自に取り組んでレポートをまとめている。</p>
A	<p>課題の条件（観点・方法、内容・分量など）を満たしつつ、独自の課題意識と新たな成果をもってレポートをまとめている。</p>
B	<p>課題の条件（観点・方法、内容・分量など）を満たしつつ、独自の課題意識をもってレポートをまとめている。</p>
C	<p>課題の条件（観点・方法、内容・分量など）を満たして最終レポートをまとめている。</p>
D	<p>レポートをまとめているものの、課題の条件（観点・方法、内容・分量など）を満たすことができていない。</p>
講義時間外に必要な学修時間の目安	2時間

専門高度化探究科目（教科探究科目）

授業科目名	授業検証と教科内容開発（基礎・社会科）		講義・演習		
科目区分	選択必修	授業形態	複数（IT・オムニバス）	単位数	2単位
担当教員名	◎吉田剛、西城潔、田中良英、堀田幸義、川崎惣一、石田雅樹、山内明美				
授業の目的	社会科に関わる実践的知見や学術的知識をもとに、実践的・理論的な思考力を高め、教科の内容や方法などを構成するスキルを身に付ける。				
授業の概要	社会科に焦点を当て、教科の学習成果を検証・評価する学術的な専門知識と、当該教科内容の背景となる学問に関する学術的な専門知識を教材として実際的かつ具体的に構成していく活動との関連性について理論的に考察する力を身につける。				
学習の到達目標	社会科に関わる授業検証や学術的な専門知識・概念などをもとにして、理論的な思考を涵養しながら、具体的な教材に関わる内容構成ができるようになることを到達目標とする。				
授業の内容	1	ガイダンスおよび教材開発の方法（吉田剛、西城潔、田中良英、堀田幸義、川崎惣一、石田雅樹、山内明美）			
	2	学習指導要領と小学校社会科の内容構成（吉田剛、西城潔、田中良英、堀田幸義、川崎惣一、石田雅樹、山内明美）			
	3	学習指導要領と中学校社会科・高等学校社会系教科の内容構成（吉田剛、西城潔、田中良英、堀田幸義、川崎惣一、石田雅樹、山内明美）			
	4	小学校社会科の内容構成における課題（吉田剛、西城潔、田中良英、堀田幸義、川崎惣一、石田雅樹、山内明美）			
	5	中学校社会科・高等学校社会系教科の内容構成における課題（吉田剛、西城潔、田中良英、堀田幸義、川崎惣一、石田雅樹、山内明美）			
	6	小学校社会科における教材開発（吉田剛、西城潔、田中良英、堀田幸義、川崎惣一、石田雅樹、山内明美）			
	7	地理的分野の教材開発（吉田剛、西城潔）			
	8	歴史的分野の教材開発（吉田剛、田中良英、堀田幸義）			
	9	公民的分野の教材開発（吉田剛、川崎惣一、石田雅樹、山内明美）			
	10	教材開発の成果の中間報告会（吉田剛、西城潔、田中良英、堀田幸義、川崎惣一、石田雅樹、山内明美）			
	11	教材開発の課題（吉田剛、西城潔、田中良英、堀田幸義、川崎惣一、石田雅樹、山内明美）			
	12	教材開発の改善（吉田剛、西城潔、田中良英、堀田幸義、川崎惣一、石田雅樹、山内明美）			
	13	教材開発の成果の全体検討会（吉田剛、西城潔、田中良英、堀田幸義、川崎惣一、石田雅樹、山内明美）			
	14	教材開発の成果の最終報告会（吉田剛、西城潔、田中良英、堀田幸義、川崎惣一、石田雅樹、山内明美）			
	15	まとめ（吉田剛、西城潔、田中良英、堀田幸義、川崎惣一、石田雅樹、山内明美）			
教科書・参考書等	適宜指示する。参考書：小中高社会系教科の学習指導要領解説ほか				
評価の観点・方法	学修の状況を到達目標に照らして、平常点（学習活動の姿勢）、報告会の発表、レポートなどを総合して評価する。				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B）</p> <p>社会科に関わる授業検証、学術的な専門知識・概念の習得、理論的な思考をもとにした検討・考察、教材に関わる内容構成の理解が充分に行われている。</p>
S	<p>社会科に関わる授業検証、学術的な専門知識・概念の習得、理論的な思考をもとにした検討・考察、教材に関わる内容構成の理解が充分に行われ、自らの課題解決に具体的に活かすことができる。</p>
A	<p>社会科に関わる授業検証、学術的な専門知識・概念の習得、理論的な思考をもとにした検討・考察、教材に関わる内容構成の理解が充分に行われ、自らの課題解決に活かすための展望を持つことができる。</p>
B	<p>社会科に関わる授業検証、学術的な専門知識・概念の習得、理論的な思考をもとにした検討・考察、教材に関わる内容構成の理解が充分に行われている。</p>
C	<p>社会科に関わる授業検証、学術的な専門知識・概念の習得、理論的な思考をもとにした検討・考察、教材に関わる内容構成の理解が概ね行われている。</p>
D	<p>社会科に関わる授業検証、学術的な専門知識・概念の習得、理論的な思考をもとにした検討・考察、教材に関わる内容構成の理解が行えていない。</p>
講義時間外に必要な学修時間の目安	90分

専門高度化探究科目（教科探究科目）

授業科目名	授業検証と教科内容開発（応用・社会科）			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（IT・オムニバス）	単位数	2単位
担当教員名	◎吉田剛、西城潔、田中良英、堀田幸義、川崎惣一、石田雅樹、山内明美				
授業の目的	社会科に関わる実践的知見や学術的知識をもとに、具体的な授業開発を行い模擬授業を通して、省察するスキルを身に付ける				
授業の概要	社会科に焦点を当て、教科の学習成果を検証・評価する学術的な専門知識と関連させながら、当該教科内容の背景となる学問に関する学術的な専門知識を教材として実際的かつ具体的に構成していくことのできる力を身につけることによって、教科指導力に関する専門性の向上を図る。				
学習の到達目標	社会科に関わる授業検証や学術的な専門知識・概念などをもとにして、具体的な教科指導の在り方を検討し、模擬授業を通して実践的に省察できるようになることを到達目標とする。				
授業の内容	1	ガイダンスおよび授業検証の方法（吉田剛、西城潔、田中良英、堀田幸義、川崎惣一、石田雅樹、山内明美）			
	2	小学校社会科における実践の現状と課題（吉田剛、西城潔、田中良英、堀田幸義、川崎惣一、石田雅樹、山内明美）			
	3	小学校社会科の模擬授業による検証（吉田剛、西城潔、田中良英、堀田幸義、川崎惣一、石田雅樹、山内明美）			
	4	中学校・高等学校地理的分野における実践の現状と課題（吉田剛、西城潔）			
	5	中学校・高等学校地理的分野の模擬授業による検証（吉田剛、西城潔）			
	6	中学校・高等学校歴史的分野における実践の現状と課題（吉田剛、田中良英、堀田幸義）			
	7	中学校・高等学校歴史的分野の模擬授業による検証（吉田剛、田中良英、堀田幸義）			
	8	中学校・高等学校公民的分野における実践の現状と課題（吉田剛、川崎惣一、石田雅樹、山内明美）			
	9	中学校・高等学校公民的分野の模擬授業による検証（吉田剛、川崎惣一、石田雅樹、山内明美）			
	10	小学校社会科の模擬授業による改善（吉田剛、西城潔、田中良英、堀田幸義、川崎惣一、石田雅樹、山内明美）			
	11	中学校・高等学校分野別の教科指導の計画と改善（吉田剛、西城潔、田中良英、堀田幸義、川崎惣一、石田雅樹、山内明美）			
	12	中学校・高等学校地理的分野の模擬授業による改善（吉田剛、西城潔）			
	13	中学校・高等学校歴史的分野の模擬授業による改善（吉田剛、田中良英、堀田幸義）			
	14	中学校・高等学校公民的分野の模擬授業による改善（吉田剛、川崎惣一、石田雅樹、山内明美）			
	15	まとめ（吉田剛、西城潔、田中良英、堀田幸義、川崎惣一、石田雅樹、山内明美）			
教科書・参考書等	適宜指示する。参考書：小中高社会系教科の学習指導要領解説ほか				
評価の観点・方法	学修状況について、目標に照らして、平常点（学習活動の姿勢）、報告会の発表、レポートなどを総合して評価する。				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・ 基準（評価B）</p> <p>社会科に関わる授業検証と学術的な専門知識・概念の習得に基づいて、具体的な教科指導のあり方を検討し、模擬授業と意見交換を通じて実践的な省察を充分に行うことができる。</p>
S	社会科に関わる授業検証と学術的な専門知識・概念の習得に基づいて、具体的な教科指導のあり方を検討し、模擬授業と意見交換を通じて実践的な省察を充分に行い、課題解決に具体的に取り組むことができる。
A	社会科に関わる授業検証と学術的な専門知識・概念の習得に基づいて、具体的な教科指導のあり方を検討し、模擬授業と意見交換を通じて実践的な省察を充分に行い、課題解決の展望を持つことができる。
B	社会科に関わる授業検証と学術的な専門知識・概念の習得に基づいて、具体的な教科指導のあり方を検討し、模擬授業と意見交換を通じて実践的な省察を充分に行うことができる。
C	社会科に関わる授業検証と学術的な専門知識・概念の習得に基づいて、具体的な教科指導のあり方を検討し、模擬授業と意見交換を通じて実践的な省察を行うことが概ねできる。
D	社会科に関わる授業検証と学術的な専門知識・概念の習得に基づいて、具体的な教科指導のあり方を検討し、模擬授業と意見交換を通じて実践的な省察を行うことができていない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	90分

専門高度化探究科目（教科探究科目）

授業科目名	授業検証と教科内容開発（基礎・算数、数学科）A		講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（IT・ムニパス）	単位数 2単位
担当教員名	◎市川啓，田谷久雄，鎌田博行，佐藤得志，花園隼人，高瀬幸一			
授業の目的	算数科における学習成果を検証・評価する専門知識と算数科の内容の背景にある数学の専門的知識をもとに授業を理論的に構成・考察し、学校現場において授業改善を図るための資質・能力を身に付ける。			
授業の概要	算数・数学科に関する教科の学習成果を検証・評価する学術的な専門知識と、当該教科内容の背景となる学問に関する学術的な専門知識を教材として実際的かつ具体的に構成していく活動との関連性について理論的に考察する力を身に付け、学校現場において算数・数学の授業改善をするための基礎的な資質・能力を育成する。			
学習の到達目標	算数科における学習指導上の課題を踏まえ、教科内容の背景となる学問体系の基礎を学ぶとともに、数学的活動について議論する。また、教授・学習の理論研究に基づき、学習指導とその評価に関する基礎を身につける。			
授業の内容	1	イントロダクション		
	2	算数科における評価の方法の検討		
	3	算数科における学習指導上の課題		
	4	算数科における「数学的な見方・考え方」についての検討と理解		
	5	算数科の「数と計算」と「図形」領域における教科内容構成		
	6	算数科の「数と計算」と「図形」領域における数学的活動の検討		
	7	算数科の「数と計算」と「図形」領域における学習指導とその評価		
	8	算数科の「図形」と「測定（変化と関係）」領域における教科内容構成		
	9	算数科の「図形」と「測定（変化と関係）」領域における数学的活動の検討		
	10	算数科の「図形」と「測定（変化と関係）」領域における学習指導とその評価		
	11	算数科の「測定（変化と関係）」と「データの活用」領域における教科内容構成		
	12	算数科の「測定（変化と関係）」と「データの活用」領域における数学的活動の検討		
	13	算数科の「測定（変化と関係）」と「データの活用」領域における学習指導とその評価		
	14	算数科におけるカリキュラムマネジメント		
	15	まとめ		
教科書・参考書等	平成29年告示学習指導要領解説算数編（文部科学省）			
評価の観点・方法	【観点】①算数科における学習指導上の課題を踏まえ、学習内容の背景となる学問体系の基礎を理解したか。算数科教育に関する教授・学習の理論研究を踏まえ、学習指導とその評価に関する基礎を理解したか。 【方法】講義時に出題する課題、話し合い活動における取り組み状況、および最終レポートにより総合的に評価する。			

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B）</p> <p>算数科の各領域の背景にある数学の理解と、学習成果を検証・評価する力をもとに、教材や授業を理論的に構成・考察し、算数・数学の授業改善をするための基礎的な資質・能力が身についている。</p>
S	算数科の各領域の背景にある数学の確かな理解と的確に学習成果を検証・評価する力をもとに、算数科の授業を理論的に構成・考察しわかりやすく説明ができ、学校現場で即活用できる算数・数学の授業改善をするための基礎的な資質・能力が身についている。
A	算数科の各領域の背景にある数学の確かな理解と、的確に学習成果を検証・評価する力をもとに、算数科の授業を理論的に構成・考察し、算数・数学の授業改善をするための基礎的な資質・能力が身についている。
B	算数科の各領域の背景にある数学の理解と、学習成果を検証・評価する力をもとに、教材や授業を理論的に構成・考察し、算数・数学の授業改善をするための基礎的な資質・能力が身についている。
C	算数科の各領域の背景にある数学の理解と、学習成果を検証・評価する力をもとに、算数科の授業を理論的に構成・考察し、算数・数学の授業改善をするための最低限度の基礎的な資質・能力が身についている。
D	算数科の各領域の背景にある数学の理解と、学習成果を検証・評価する力をもとに、算数科の授業を理論的に構成・考察し、算数・数学の授業改善をするための最低限度の基礎的な資質・能力が身についていない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	復習・レポート作成等 1. 5時間程度

専門高度化探究科目（教科探究科目）

授業科目名	授業検証と教科内容開発（基礎・算数、数学科）B		講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（オムニバス）	単位数 2単位
担当教員名	◎佐藤得志、市川啓、鎌田博行、田谷久雄、高瀬幸一、花園隼人			
授業の目的	数学科における学習指導上の課題を踏まえ、教科内容の背景となる学問体系の基礎を学ぶとともに、数学的活動について議論する。また、教授・学習の理論研究に基づき、学習指導とその評価に関する基礎を身につける。			
授業の概要	数学科に関する学習成果を検証・評価する学術的な専門知識と、当該教科内容の背景となる学問に関する学術的な専門知識を、教材として実際的かつ具体的に構成していく活動との関連性について考察する力を身につけ、学校現場において数学の授業改善をするための基礎的な資質・能力を育成する。			
学習の到達目標	数学科における学習指導上の課題を踏まえ、教科内容の背景となる学問体系の基礎を身につけ、数学的活動について議論する。また、教授、学習の理論研究に基づき、学習指導とその評価に関する基礎を身につける。			
授業の内容	1	イントロダクション		
	2	数学科における評価の方法の検討		
	3	数学科における学習内容と指導上の課題		
	4	数学科における「数学化」と「数学的に考える」ことの検討と理解		
	5	数学科の「数と式」と「図形（と計量）」領域における教科内容構成		
	6	数学科の「数と式」と「図形（と計量）」領域における数学的活動の検討		
	7	数学科の「数と式」と「図形（と計量）」領域における学習指導とその評価		
	8	数学科の「図形（と計量）」と「関数（微分積分）」領域における教科内容構成		
	9	数学科の「図形（と計量）」と「関数（微分積分）」領域における数学的活動の検討		
	10	数学科の「図形（と計量）」と「関数（微分積分）」領域における学習指導とその評価		
	11	数学科の「関数」と「データの活用」領域における教科内容構成		
	12	数学科の「関数」と「データの活用」領域における数学的活動の検討		
	13	数学科の「関数」と「データの活用」領域における学習指導とその評価		
	14	数学科におけるカリキュラムマネジメントに関する基礎的考察		
	15	まとめ		
教科書・参考書等	中学校学習指導要領（平成29年3月告示、文部科学省）			
評価の観点・方法	学修状況について、目標に照らして、演習への取り組み、数学的活動のレポートをもとに、総合的に評価する。			

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・ 基準（評価B）</p> <p>数学科の各領域の背景にある数学的知識の確かな理解と、的確に学習成果を検証・評価する力をもとに、数学科の授業を理論的に構成・考察し、数学の授業改善をするための基礎的な資質・能力が身についている。</p>
S	数学科の各領域の背景にある数学的知識の確かな理解と、的確に学習成果を検証・評価する力をもとに、数学科の授業を理論的に構成・考察してこれをわかりやすく説明でき、学校現場で即活用できる数学の授業改善をするための基礎的な資質・能力が身についている。
A	数学科の各領域の背景にある数学的知識の確かな理解と、的確に学習成果を検証・評価する力をもとに、数学科の授業を理論的に構成・考察し、数学の授業改善をするための基礎的な資質・能力が身についている。
B	数学科の各領域の背景にある数学的知識の理解と、学習成果を検証・評価する力をもとに、数学科の授業を理論的に構成・考察し、数学の授業改善をするための基礎的な資質・能力が身についている。
C	数学科の各領域の背景にある数学的知識の理解と、学習成果を検証・評価する力をもとに、数学科の授業を理論的に構成・考察し、数学の授業改善をするための最低限度の基礎的な資質・能力が身についている。
D	数学科の各領域の背景にある数学的知識の理解と、学習成果を検証・評価する力をもとに、数学科の授業を理論的に構成・考察し、数学の授業改善をするための最低限度の基礎的な資質・能力が身についていない。□
講義時間外に必要な学修時間の目安	復習・レポート作成等1.5時間程度

専門高度化探究科目（教科探究科目）

授業科目名	授業検証と教科内容開発（応用・算数、数学科）A		講義・演習		
科目区分	選択必修	授業形態	複数（IT・オムニバス）	単位数	2単位
担当教員名	市川啓、田谷久雄、◎鎌田博行、佐藤得志、花園隼人、高瀬幸一				
授業の目的	算数・数学科における教科内容の背景となる学問に関する学術的な専門知識を教材として実際的かつ具体的に構成していくことのできる力を身につけ、学習成果を検証・評価する学術的な専門知識と関連させながら、当該教科の小学校における指導力に関する専門性の向上を図る。				
授業の概要	算数・数学科に焦点を当て、教科の学習成果を検証・評価する学術的な専門知識と関連させながら、当該教科内容の背景となる学問に関する学術的な専門知識を教材として実際的かつ具体的に構成していくことのできる力を身につけることによって、教科指導力に関する専門性の向上を図る。				
学習の到達目標	算数科における学習指導上の課題を踏まえ、教科内容の背景となる学問体系の基礎を十分に理解した上で、教授・学習の理論研究に基づき、質の高い数学的活動を軸にした授業デザインを考察し、授業改善の見通しを得るための考察ができる。				
授業の内容	1	イントロダクション			
	2	算数科の授業実践上の課題の検討			
	3	数学的活動の充実のための課題開発			
	4	算数科の「数と計算」と「図形」領域における数学的活動の構成			
	5	算数科の「数と計算」と「図形」領域における授業デザイン			
	6	算数科の「図形」と「測定（変化と関係）」領域における数学的活動の構成			
	7	算数科の「図形」と「測定（変化と関係）」領域における授業デザイン			
	8	算数科の「測定（変化と関係）」と「データの活用」領域における数学的活動の構成			
	9	算数科の「測定（変化と関係）」と「データの活用」領域における授業デザイン			
	10	算数科における学習の様相の見取り：「個の学習」の分析・考察の方法			
	11	算数科における数学的活動を軸とした授業の分析・考察の方法：教授の視点から			
	12	算数科における数学的活動を軸とした授業の分析・考察の方法：学習の視点から			
	13	授業デザインに基づく授業実践 算数科における評価の方法の検討			
	14	授業実践に基づく事後検討会			
	15	まとめ			
教科書・参考書等	小学校学習指導要領（平成29年3月告示，文部科学省） 小学校学習指導要領解説算数編（平成29年7月，文部科学省） その他、必要に応じて配布、紹介する。				
評価の観点・方法	学修状況について、目標に照らして、数学的活動、授業デザインのレポート、および授業実践をもとに、総合的に評価する。				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B）</p> <p>算数科の領域「A 数と式」「B 図形」「C 測定（変化と関係）」「D データの活用」の幾つかにおける学習指導上の課題を概ね踏まえながら、教科内容の背景となる学問体系の基礎を理解した上で、教授・学習の理論研究を意識し、数学的活動を軸にした授業デザインを考察し、授業改善の見通しを示すことができる。</p>
S	算数科の各領域「A 数と式」「B 図形」「C 測定（変化と関係）」「D データの活用」における学習指導上の課題を的確に踏まえ、教科内容の背景となる学問体系の基礎を十分に理解した上で、教授・学習の理論研究に基づき、質の高い数学的活動を軸にした授業デザインを考察でき、かつ学習結果の検証に基づいた授業改善の見通しを明確に示すことができる。
A	算数科の各領域「A 数と式」「B 図形」「C 測定（変化と関係）」「D データの活用」における学習指導上の課題を踏まえ、教科内容の背景となる学問体系の基礎を十分に理解した上で、教授・学習の理論研究に基づき、質の高い数学的活動を軸にした授業デザインを考察し、授業改善の見通しを示すことができる。
B	算数科の領域「A 数と式」「B 図形」「C 測定（変化と関係）」「D データの活用」の幾つかにおける学習指導上の課題を概ね踏まえながら、教科内容の背景となる学問体系の基礎を理解した上で、教授・学習の理論研究を意識し、数学的活動を軸にした授業デザインを考察し、授業改善の見通しを示すことができる。
C	算数科の領域「A 数と式」「B 図形」「C 測定（変化と関係）」「D データの活用」のある領域における学習指導上の最低限の課題を踏まえながら、教科内容の背景となる学問体系の最低限の基礎を理解した上で、数学的活動を軸にした授業デザインを考察し、授業改善の見通しを示すことができる。
D	算数科における学習指導上の最低限の課題や教科内容の背景となる学問体系の最低限の基礎について理解できず、数学的活動を軸にした授業デザインの考察したり、授業改善の見通しを示したりすることができない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	<p>予習（発表準備含む）：30～90分、</p> <p>復習（レポート作成含む）：30～90分</p>

専門高度化探究科目（教科探究科目）

授業科目名	授業検証と教科内容開発（応用・算数、数学科）B		講義・演習		
科目区分	選択必修	授業形態	複数（IT・オムニバス）	単位数	2単位
担当教員名	市川啓，鎌田博行，佐藤得志，高瀬幸一，◎田谷久雄，花園隼人				
授業の目的	算数・数学科において教科内容の背景となる学問に関する学術的な専門知識を教材として実際的かつ具体的に構成していくことのできる力を身につけ、学習成果を検証・評価する学術的な専門知識と関連させながら、当該教科の中学校・高等学校における教科指導力に関する専門性の向上を図る。				
授業の概要	算数・数学科に焦点を当て、教科の学習成果を検証・評価する学術的な専門知識と関連させながら、当該教科内容の背景となる学問に関する学術的な専門知識を教材として実際的かつ具体的に構成していくことのできる力を身につけることによって、教科指導力に関する専門性の向上を図る。				
学習の到達目標	数学科における学習指導上の課題を踏まえ、教科内容の背景となる学問体系の基礎を十分に理解した上で、教授・学習の理論研究に基づき、質の高い数学的活動を軸にした授業デザインができる。また、学習結果の検証に基づき授業改善ができる。				
授業の内容	1	イントロダクション			
	2	算数科から数学科への接続を捉える視点			
	3	算数科から数学科への円滑な接続を意図した授業改善			
	4	数学科の「数と式」と「図形（と計量）」領域における数学的活動の構成			
	5	数学科の「数と式」と「図形（と計量）」領域における授業デザイン			
	6	数学科の「図形（と計量）」と「関数（微分積分）」領域における数学的活動の構成			
	7	数学科の「図形（と計量）」と「関数（微分積分）」領域における授業デザイン			
	8	数学科の「関数（微分積分）」と「データの活用」領域における数学的活動の構成			
	9	数学科の「関数（微分積分）」と「データの活用」領域における授業デザイン			
	10	学習者の数学的探究の道具としてのICTの活用			
	11	学習者の数学的探究の道具としてのICTの活用を前提とした課題開発			
	12	学習者の数学的探究の道具としてのICTの活用に関心をあてた授業デザイン			
	13	数学科の授業実践			
	14	授業実践に基づく事後研究会			
	15	まとめ			
教科書・参考書等	中学校学習指導要領（平成29年3月告示，文部科学省） 中学校学習指導要領解説数学編（平成29年7月，文部科学省） 高等学校学習指導要領（平成30年3月告示，文部科学省） 高等学校学習指導要領解説数学編理数編（平成30年7月，文部科学省） その他，必要な場合には授業内で追加の参考書・参考資料について述べる。				
評価の観点・方法	学修状況について、目標に照らして、数学的活動，課題開発，授業デザインのレポート，および，授業実践をもとに総合的に評価する。				

成績評価

<p>標準的な到達水準</p>	<p>・基準（評価B） 数学科の領域「A 数と式」「B 図形（と計量）」「C 関数（微分積分）」「D データの活用」、および、ICTの活用の幾つかにおける学習指導上の課題を概ね踏まえながら、教科内容の背景となる学問体系の基礎を理解した上で、教授・学習の理論研究を意識し、数学的活動を軸にした授業デザインを考察し、授業改善の見通しを示すことができる。</p>
<p>S</p>	<p>数学科の領域「A 数と式」「B 図形（と計量）」「C 関数（微分積分）」「D データの活用」、および、ICTの活用における学習指導上の課題を的角に踏まえ、教科内容の背景となる学問体系の基礎を十分に理解した上で、教授・学習の理論研究に基づき、質の高い数学的活動を軸にした授業デザインを考察でき、かつ学習結果の検証に基づいた授業改善の見通しを明確に示すことができる。</p>
<p>A</p>	<p>数学科の領域「A 数と式」「B 図形（と計量）」「C 関数（微分積分）」「D データの活用」、および、ICTの活用における学習指導上の課題を踏まえ、教科内容の背景となる学問体系の基礎を十分に理解した上で、教授・学習の理論研究に基づき、質の高い数学的活動を軸にした授業デザインを考察し、授業改善の見通しを示すことができる。</p>
<p>B</p>	<p>数学科の領域「A 数と式」「B 図形（と計量）」「C 関数（微分積分）」「D データの活用」、および、ICTの活用の幾つかにおける学習指導上の課題を概ね踏まえながら、教科内容の背景となる学問体系の基礎を理解した上で、教授・学習の理論研究を意識し、数学的活動を軸にした授業デザインを考察し、授業改善の見通しを示すことができる。</p>
<p>C</p>	<p>数学科の領域「A 数と式」「B 図形（と計量）」「C 関数（微分積分）」「D データの活用」、および、ICTの活用のある領域における学習指導上の最低限の課題を踏まえながら、教科内容の背景となる学問体系の最低限の基礎を理解した上で、数学的活動を軸にした授業デザインを考察し、授業改善の見通しを示すことができる。</p>
<p>D</p>	<p>数学科における学習指導上の課題や、教科内容の背景となる学問体系の基礎について理解できず、数学的活動を軸にした授業デザインを考察したり、授業改善の見通しを示すことができない。</p>
<p>講義時間外に必要な学修時間の目安</p>	<p>予習（発表準備含む）：30分～1時間、復習（レポート作成含む）：30分～1時間</p>

専門高度化探究科目（教科探究科目）

授業科目名	授業検証と教科内容開発（基礎・理科）A		講義・演習		
科目区分	選択必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	◎渡辺尚、中山慎也、福田善之、内山哲治、西山正吾、猿渡英之、笠井香代子				
授業の目的	理科の学問体系の基礎や学界における新しい考え方などを理解する。また、これらをもとにした質の高い教科指導を学校現場で実践できるような「確かな力」を身につける。				
授業の概要	理科の基本的な概念のうち「エネルギー」と「粒子」に関して、学習指導要領や教科書で扱われている内容の背景となる学問体系の基礎を学ぶとともに、学界における新しい考え方などについて議論する。また、授業の設計・検証を行う力を身につける。				
学習の到達目標	「エネルギー」領域と「粒子」領域における教科内容構成を理解した上で、これらをもとにした質の高い教科指導を学校現場で実践できるような力を獲得する。				
授業の内容	1	オリエンテーション（担当：全教員）			
	2	理科における学習内容と指導上の課題（教科の目標）（担当：中山・渡辺・福田・西山・猿渡）			
	3	理科における学習内容と指導上の課題（理科の内容構成）（担当：中山・渡辺・福田・西山・猿渡）			
	4	理科における学習内容と指導上の課題（学年目標と学年内容の構成の考え方）（担当：中山・渡辺・福田・西山・猿渡）			
	5	「エネルギー」領域における教科内容構成① 電気・磁気（担当：福田）			
	6	「エネルギー」領域における教科内容構成② エネルギー・電子・放射線（担当：福田）			
	7	「エネルギー」領域における教科内容構成③ 熱・運動（担当：西山）			
	8	「エネルギー」領域における教科内容構成④ 波・音・光（担当：西山）			
	9	「エネルギー」領域における授業設計・検証（担当：内山・福田・西山）			
	10	「粒子」領域における教科内容構成① 元素・原子核・イオン・放射能（担当：猿渡）			
	11	「粒子」領域における教科内容構成② 原子・電子・分子（担当：笠井）			
	12	「粒子」領域における教科内容構成③ 物質の変化（担当：猿渡・笠井）			
	13	「粒子」領域における授業設計（担当：猿渡・笠井）			
	14	「粒子」領域における授業検証（担当：猿渡・笠井）			
	15	まとめと振り返り（担当：全教員）			
教科書・参考書等	<p><教科書> 授業中に適宜資料を配付</p> <p><参考書・参考資料等></p> <p>小学校学習指導要領（平成29年3月告示 文部科学省）</p> <p>小学校学習指導要領解説 理科編（平成29年7月 文部科学省）</p> <p>中学校学習指導要領（平成29年3月告示 文部科学省）</p> <p>中学校学習指導要領解説 理科編（平成29年7月 文部科学省）</p> <p>高等学校学習指導要領（平成30年3月告示 文部科学省）</p> <p>高等学校学習指導要領解説 理科編（平成30年7月 文部科学省）</p>				
評価の観点・方法	<p>【観点】</p> <p>「エネルギー」領域や「粒子」領域における教科内容構成が理解できているか。これらをもとにした授業を設計・検証する力が身についているか。</p> <p>【方法】</p> <p>授業時間内の課題達成状況やレポートを用いて段階別達成度を評価した上で、自己評価・相互評価を踏まえて総合的に評価する。</p>				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B）</p> <p>「エネルギー」領域や「粒子」領域における教科内容構成について十分に理解した上で、これらをもとにした質の高い授業を自らが設計し、検証することができる。</p>
S	「エネルギー」領域や「粒子」領域における教科内容構成について十分に理解した上で、これらをもとにした授業を自らが適切に設計・検証し、他者に対して明確に示すことができる。
A	「エネルギー」領域や「粒子」領域における教科内容構成について十分に理解した上で、これらをもとにした授業を自らが設計・検証し、他者に対して整理した形で説明することができる。
B	「エネルギー」領域や「粒子」領域における教科内容構成について十分に理解した上で、これらをもとにした質の高い授業を自らが設計し、検証することができる。
C	「エネルギー」領域や「粒子」領域における教科内容構成について理解した上で、これらをもとにした授業を設計し、検証することが可能である。
D	「エネルギー」領域や「粒子」領域における教科内容構成の理解が不十分である、または、これらをもとにした授業を設計・検証することができない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	<p>【予習】 授業前に配付された資料をもとに、学習内容について調べておく。（40分）</p> <p>【復習】 授業後には、授業の際に用いた資料により得られた知識や問題意識などを確認する。さらに、文献等を用いて学習内容についての理解を深める。（60分）</p>

専門高度化探究科目（教科探究科目）

授業科目名	授業検証と教科内容開発（基礎・理科）B			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	渡辺尚、中山慎也、◎出口竜作、棟方有宗、小林恭士、川村寿郎、高田淑子、菅原敏				
授業の目的	理科の学問体系の基礎や学界における新しい考え方などを理解する。また、これらをもとにした質の高い教科指導を学校現場で実践できるような「確かな力」を身につける。				
授業の概要	理科の基本的な概念のうち「生命」と「地球」に関して、学習指導要領や教科書で扱われている内容の背景となる学問体系の基礎を学ぶとともに、学界における新しい考え方などについて議論する。また、授業の設計・検証を行う力を身につける。				
学習の到達目標	「生命」領域と「地球」領域における教科内容構成を理解した上で、これらをもとにした質の高い教科指導を学校現場で実践できるような力を獲得する。				
授業の内容	1	オリエンテーション（担当：全教員）			
	2	理科における学習内容と指導上の課題（教科の目標）（担当：渡辺・中山）			
	3	理科における学習内容と指導上の課題（理科の内容構成）（担当：中山・渡辺）			
	4	理科における学習内容と指導上の課題（学年目標と学年内容の構成の考え方）（担当：渡辺・中山）			
	5	「生命」領域における教科内容構成① 細胞・生殖（担当：出口）			
	6	「生命」領域における教科内容構成② 動物の分類・体のつくり（担当：棟方）			
	7	「生命」領域における教科内容構成③ 植物の分類・DNA（担当：小林）			
	8	「生命」領域における授業設計（担当：出口・棟方・小林）			
	9	「生命」領域における授業検証（担当：出口・棟方・小林）			
	10	「地球」領域における教科内容構成① 気象情報・大気（担当：菅原）			
	11	「地球」領域における教科内容構成② 太陽・月・星（担当：高田）			
	12	「地球」領域における教科内容構成③ 岩石・鉱物・地層・地球史（担当：川村）			
	13	「地球」領域における授業設計（担当：菅原・高田・川村）			
	14	「地球」領域における授業検証（担当：菅原・高田・川村）			
	15	まとめと振り返り（担当：全教員）			
教科書・参考書等	<p><教科書> 授業中に適宜資料を配付</p> <p><参考書・参考資料等></p> <p>小学校学習指導要領（平成29年3月告示 文部科学省）</p> <p>小学校学習指導要領解説 理科編（平成29年7月 文部科学省）</p> <p>中学校学習指導要領（平成29年3月告示 文部科学省）</p> <p>中学校学習指導要領解説 理科編（平成29年7月 文部科学省）</p> <p>高等学校学習指導要領（平成30年3月告示 文部科学省）</p> <p>高等学校学習指導要領解説 理科編（平成30年7月 文部科学省）</p>				
評価の観点・方法	<p>【観点】</p> <p>「生命」領域や「地球」領域における教科内容構成が理解できているか。これらをもとにした授業を設計・検証する力が身についているか。</p> <p>【方法】</p> <p>授業時間内の課題達成状況やレポートを用いて段階別達成度を評価した上で、自己評価・相互評価を踏まえて総合的に評価する。</p>				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B）</p> <p>「生命」領域や「地球」領域における教科内容構成について十分に理解した上で、これらをもとにした質の高い授業を自らが設計し、検証することができる。</p>
S	「生命」領域や「地球」領域における教科内容構成について十分に理解した上で、これらをもとにした授業を自らが適切に設計・検証し、他者に対して明確に示すことができる。
A	「生命」領域や「地球」領域における教科内容構成について十分に理解した上で、これらをもとにした授業を自らが設計・検証し、他者に対して整理した形で説明することができる。
B	「生命」領域や「地球」領域における教科内容構成について十分に理解した上で、これらをもとにした質の高い授業を自らが設計し、検証することができる。
C	「生命」領域や「地球」領域における教科内容構成について理解した上で、これらをもとにした授業を設計し、検証することが可能である。
D	「生命」領域や「地球」領域における教科内容構成の理解が不十分である、または、これらをもとにした授業を設計・検証することができない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	<p>【予習】 授業前に配付された資料をもとに、学習内容について調べておく。（40分）</p> <p>【復習】 授業後には、授業の際に用いた資料により得られた知識や問題意識などを確認する。さらに、文献等を用いて学習内容についての理解を深める。（60分）</p>

専門高度化探究科目（教科探究科目）

授業科目名	授業検証と教科内容開発（応用・理科）A			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	◎渡辺尚、中山慎也、福田善之、内山哲治、西山正吾、猿渡英之、笠井香代子				
授業の目的	理科の観察・実験を実施するための技能や結果を分析・解釈する力、新しい教材・教具を開発し改良する力を身につけることにより、教科指導力に関する専門性を向上させる。				
授業の概要	理科の基本的な概念のうち「エネルギー」と「粒子」に関して、学習指導要領や教科書で扱われている観察や実験を円滑に実施するための技能、ならびに結果を分析・解釈する力を身につける。また、探究的な学びにつながる新しい教材・教具の開発や改良に取り組む。				
学習の到達目標	「エネルギー」領域と「粒子」領域における観察・実験の指導力を身につけるとともに、指導の際に用いる教材・教具を考案し、作成する。				
授業の内容	1	オリエンテーション（担当：全教員）			
	2	小学校理科における観察・実験と指導上の課題（中山・渡辺・福田・西山・猿渡）			
	3	中学校理科における観察・実験と指導上の課題（渡辺・中山・福田・西山・猿渡）			
	4	高等学校理科における観察・実験と指導上の課題（中山・渡辺・福田・西山・猿渡）			
	5	「エネルギー」領域における観察・実験の指導① 電気・磁気（担当：福田）			
	6	「エネルギー」領域における観察・実験の指導② 電子・放射線（担当：福田）			
	7	「エネルギー」領域における観察・実験の指導④ 熱・運動（担当：西山）			
	8	「エネルギー」領域における観察・実験の指導⑤ 波・音・光（担当：西山）			
	9	「エネルギー」領域における教材・教具の考案・作成（担当：内山・福田・西山）			
	10	「粒子」領域における観察・実験の指導① 原子・元素・イオン（担当：猿渡）			
	11	「粒子」領域における観察・実験の指導② 電子・分子（担当：笠井）			
	12	「粒子」領域における観察・実験の指導③ 物質の反応（担当：猿渡・笠井）			
	13	「粒子」領域における教材・教具の考案（担当：猿渡・笠井）			
	14	「粒子」領域における教材・教具の作成（担当：猿渡・笠井）			
	15	まとめと振り返り（担当：全教員）			
教科書・参考書等	<p><教科書> 授業中に適宜資料を配付</p> <p><参考書・参考資料等></p> <p>小学校学習指導要領（平成29年3月告示 文部科学省）</p> <p>小学校学習指導要領解説 理科編（平成29年7月 文部科学省）</p> <p>中学校学習指導要領（平成29年3月告示 文部科学省）</p> <p>中学校学習指導要領解説 理科編（平成29年7月 文部科学省）</p> <p>高等学校学習指導要領（平成30年3月告示 文部科学省）</p> <p>高等学校学習指導要領解説 理科編（平成30年7月 文部科学省）</p>				
評価の観点・方法	<p>【観点】</p> <p>「エネルギー」領域や「粒子」領域の観察・実験に関する技能や指導力が身につけているか。観察・実験の際に用いる教材・教具を考案し、作成できたか。</p> <p>【方法】</p> <p>授業時間内の課題達成状況、レポートを用いて、段階別達成度を評価し、自己評価・相互評価を踏まえて総合的に評価する。</p>				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・ 基準（評価B）</p> <p>「エネルギー」領域や「粒子」領域の観察・実験に関する十分な技能や指導力を身につけるとともに、観察・実験の際に用いる教材・教具を自らが考案・作成することができる。</p>
S	<p>「エネルギー」領域や「粒子」領域の観察・実験に関する様々な技能や卓越した指導力を身につけるとともに、観察・実験の際に用いる優れた教材・教具を自らが考案・作成し、さらに改良を加えることができる。</p>
A	<p>「エネルギー」領域や「粒子」領域の観察・実験に関する様々な技能や指導力を身につけるとともに、観察・実験の際に用いる適切な教材・教具を自らが考案・作成し、さらに改良を加えることができる。</p>
B	<p>「エネルギー」領域や「粒子」領域の観察・実験に関する十分な技能や指導力を身につけるとともに、観察・実験の際に用いる教材・教具を自らが考案・作成することができる。</p>
C	<p>「エネルギー」領域や「粒子」領域の観察・実験に関する技能や指導力が身につけており、観察・実験の際に用いる教材・教具の考案や作成ができています。</p>
D	<p>「エネルギー」領域や「粒子」領域の観察・実験に関する技能や指導力が身につけていない、または、観察・実験の際に用いる教材・教具の考案や作成ができない。</p>
講義時間外に必要な学修時間の目安	<p>【予習】 授業前に配付された資料をもとに、学習内容について調べておく。（40分）</p> <p>【復習】 授業後には、授業の際に用いた資料により得られた知識や問題意識などを確認する。さらに、観察・実験の技能の向上や開発した教材・教具の改良などに取り組む。（60分）</p>

専門高度化探究科目（教科探究科目）

授業科目名	授業検証と教科内容開発（応用・理科）B		講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（TT）	単位数 2単位
担当教員名	渡辺尚、中山慎也、◎出口竜作、棟方有宗、小林恭士、川村寿郎、高田淑子、菅原敏			
授業の目的	理科の観察・実験を実施するための技能や結果を分析・解釈する力、新しい教材・教具を開発し改良する力を身につけることにより、教科指導力に関する専門性を向上させる。			
授業の概要	理科の基本的な概念のうち「生命」と「地球」に関して、学習指導要領や教科書で扱われている観察や実験を円滑に実施するための技能、ならびに結果を分析・解釈する力を身につける。また、探究的な学びにつながる新しい教材・教具の開発や改良に取り組む。			
学習の到達目標	「生命」領域と「地球」領域における観察・実験の指導力を身につけるとともに、指導の際に用いる教材・教具を考案し、作成する。			
授業の内容	1	オリエンテーション（担当：全教員）		
	2	小学校理科における観察・実験と指導上の課題（渡辺・中山）		
	3	中学校理科における観察・実験と指導上の課題（中山・渡辺）		
	4	高等学校理科における観察・実験と指導上の課題（渡辺・中山）		
	5	「生命」領域における観察・実験の指導① 細胞・生殖（担当：出口）		
	6	「生命」領域における観察・実験の指導② 動物の分類・体のづくり（担当：棟方）		
	7	「生命」領域における観察・実験の指導③ 植物の分類・DNA（担当：小林）		
	8	「生命」領域における教材・教具の考案（担当：出口・棟方・小林）		
	9	「生命」領域における教材・教具の作成（担当：出口・棟方・小林）		
	10	「地球」領域における観察・実験の指導① 気象観測・大気（担当：菅原）		
	11	「地球」領域における観察・実験の指導② 太陽・月・星（担当：高田）		
	12	「地球」領域における観察・実験の指導③ 岩石・鉱物・地層・地球史（担当：川村）		
	13	「地球」領域における教材・教具の考案（担当：菅原・高田・川村）		
	14	「地球」領域における教材・教具の作成（担当：菅原・高田・川村）		
	15	まとめと振り返り（担当：全教員）		
教科書・参考書等	<p><教科書> 授業中に適宜資料を配付</p> <p><参考書・参考資料等></p> <p>小学校学習指導要領（平成29年3月告示 文部科学省）</p> <p>小学校学習指導要領解説 理科編（平成29年7月 文部科学省）</p> <p>中学校学習指導要領（平成29年3月告示 文部科学省）</p> <p>中学校学習指導要領解説 理科編（平成29年7月 文部科学省）</p> <p>高等学校学習指導要領（平成30年3月告示 文部科学省）</p> <p>高等学校学習指導要領解説 理科編（平成30年7月 文部科学省）</p>			
評価の観点・方法	<p>【観点】</p> <p>「生命」領域や「地球」領域の観察・実験に関する技能や指導力が身につけているか。観察・実験の際に用いる教材・教具を考案し、作成できたか。</p> <p>【方法】</p> <p>授業時間内の課題達成状況、レポートを用いて、段階別達成度を評価し、自己評価・相互評価を踏まえて総合的に評価する。</p>			

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B）</p> <p>「生命」領域や「地球」領域の観察・実験に関する十分な技能や指導力を身につけるとともに、観察・実験の際に用いる教材・教具を自らが考案・作成することができる。</p>
S	<p>「生命」領域や「地球」領域の観察・実験に関する様々な技能や卓越した指導力を身につけるとともに、観察・実験の際に用いる優れた教材・教具を自らが考案・作成し、さらに改良を加えることができる。</p>
A	<p>「生命」領域や「地球」領域の観察・実験に関する様々な技能や指導力を身につけるとともに、観察・実験の際に用いる適切な教材・教具を自らが考案・作成し、さらに改良を加えることができる。</p>
B	<p>「生命」領域や「地球」領域の観察・実験に関する十分な技能や指導力を身につけるとともに、観察・実験の際に用いる教材・教具を自らが考案・作成することができる。</p>
C	<p>「生命」領域や「地球」領域の観察・実験に関する技能や指導力が身につけており、観察・実験の際に用いる教材・教具の考案や作成ができています。</p>
D	<p>「生命」領域や「地球」領域の観察・実験に関する技能や指導力が身につけていない、または、観察・実験の際に用いる教材・教具の考案や作成ができない。</p>
講義時間外に必要な学修時間の目安	<p>【予習】 授業前に配付された資料をもとに、学習内容について調べておく。（40分）</p> <p>【復習】 授業後には、授業の際に用いた資料により得られた知識や問題意識などを確認する。さらに、観察・実験の技能の向上や開発した教材・教具の改良などに取り組む。（60分）</p>

専門高度化探究科目（教科探究科目）

授業科目名	授業検証と教科内容開発（基礎・英語科）			講義・演習	
科目区分	教科・領域専門バックグラウンド科目群	授業形態	複数（オムニバス）	単位数	2単位
担当教員名	◎和田あずさ、竹森徹士、鈴木渉				
授業の目的	小・中・高等学校の英語科に焦点を当て、第一に、授業の成果を検証・評価する学術的な専門知識を習得する。第二に、その学術的な専門知識を活用し、教材として実際的かつ具体的に構成していく活動を行う。児童生徒の特性や発達段階に合わせて、小・中・高等学校の外国語科の授業を行うための指導力や英語力を向上させる。				
授業の概要	英語科に焦点を当て、教科の学習成果を検証・評価する学術的な専門知識と、当該教科内容の背景となる学問に関する学術的な専門知識を教材として実際的かつ具体的に構成していく活動との関連性について理論的に考察する力を身につける。				
学習の到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・英語科の授業の成果を検証・評価する知識を身に付けている。 ・児童生徒の特性や発達段階に合わせて、英語科の授業を行うための指導力や英語力を身に付けている。 				
授業の内容	1	オリエンテーション（竹森・和田・鈴木）			
	2	学習指導要領による外国語教育についての基本的な知識・理解1（小学校外国語活動及び外国語科）（和田）			
	3	学習指導要領による外国語教育についての基本的な知識・理解2（中・高等学校外国語科）（小との接続の観点）（和田）			
	4	英語科における実践をめぐる現状と課題1（外国語教育についての知識）（和田）			
	5	英語科における実践をめぐる現状と課題2（第二言語習得についての知識）（和田）			
	6	実践記録の検討と授業づくり1（指導技術についての知識、指導計画）（和田）			
	7	実践記録の検討と授業づくり2（チーム・ティーチング、ICT等の活用、教材研究）（和田）			
	8	実践記録の検討と授業づくり3（学習状況の評価）（竹森）			
	9	授業検証に必要な知識としての英語学（竹森）			
	10	授業検証に必要な知識としての英語文学（絵本、子ども向けの歌や詩等）（竹森）			
	11	授業検証に必要な知識としての第二言語習得に関する基本的な知識（個人差）（竹森）			
	12	授業検証に必要な知識としての英語コミュニケーション（竹森）			
	13	授業検証に必要な知識としての異文化理解（竹森）			
	14	指導案発表（竹森・和田・鈴木）			
	15	模擬授業、まとめ（竹森・和田・鈴木）			
教科書・参考書等	<p>中村典生ら（2022）『コア・カリキュラム対応 小・中学校で英語を教えるための必携テキスト 改訂版』東京書籍</p> <p>小学校学習指導要領（平成29年3月告示，文部科学省）</p> <p>小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編（平成29年3月告示，文部科学省）</p> <p>中学校学習指導要領（平成29年3月告示，文部科学省）</p> <p>中学校学習指導要領解説外国語編（平成29年7月，文部科学省）</p> <p>高等学校学習指導要領（平成30年3月告示，文部科学省）</p> <p>高等学校学習指導要領解説外国語編英語編（平成30年7月，文部科学省）</p>				
評価の観点・方法	<p>【観点】英語科の授業の成果を検証・評価する知識を身に付けているか。児童生徒の特性や発達段階に合わせて英語科の授業を行うための指導力や英語力を身に付けているか。</p> <p>【方法】授業時間内の課題達成状況（30%）、指導案（50%）、模擬授業（20%）</p>				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B）</p> <p>英語科の授業の成果を検証・評価する基本的な知識や児童生徒の特性や発達段階に合わせて英語科の授業を行うための基本的な指導力や英語力を身に付けている。</p>
S	英語科の授業の成果を検証・評価する高度な知識や児童生徒の特性や発達段階に合わせて英語科の授業を行うための高度な指導力や英語力を身に付けている。
A	英語科の授業の成果を検証・評価する適切な知識や児童生徒の特性や発達段階に合わせて英語科の授業を行うための適切な指導力や英語力を身に付けている。
B	英語科の授業の成果を検証・評価する基本的な知識や児童生徒の特性や発達段階に合わせて英語科の授業を行うための基本的な指導力や英語力を身に付けている。
C	英語科の授業の成果を検証・評価する知識や児童生徒の特性や発達段階に合わせて英語科の授業を行うための指導力や英語力の素地を身に付けている。
D	英語科の授業の成果を検証・評価する知識や児童生徒の特性や発達段階に合わせて英語科の授業を行うための指導力や英語力の素地を身につけていない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	<p>【予習】 毎回の授業前に、前回授業時まで指定される教科書の担当部分を読み、ディスカッションのポイントを考えてくる（1時間）</p> <p>【復習】 授業の際に用いた資料や教材により得られた知識や気づきを基に、指導案を作成する。（1時間）</p>

専門高度化探究科目（教科探究科目）

授業科目名	授業検証と教科内容開発（応用・英語科）			講義・演習	
科目区分	教科・領域専門バックグラウンド科目群	授業形態	複数（オムニバス）	単位数	2単位
担当教員名	◎和田あずさ、竹森徹士、鈴木渉				
授業の目的	専門的知識に基づいて授業内容を開発し、実際に自分自身が実践した授業や他者の実践記録等を分析する活動を通して、授業検証を絶えず行い、児童・生徒の現状や学校の特性・特色等に応じた、小・中・高等学校外国語科の授業を実践するための指導力、およびその基礎となる英語力を習得する。				
授業の概要	小・中・高等学校外国語科に焦点を当て、教科の学習成果を検証・評価する学術的な専門知識と関連させながら、当該教科内容の背景となる学問に関する学術的な専門知識を教材として実際的かつ具体的に構成していくことのできる力を身につけることによって、教科指導力に関する専門性の向上を図る。				
学習の到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・専門的知識に基づいて授業内容を開発し、実際に自分自身が実践した授業や他者の実践記録等を分析することができる。 ・児童生徒の現状や学校の特性等に応じた、小・中・高等学校外国語科の授業を実践するための指導力、およびその基礎となる英語力を習得している。 				
授業の内容	1	オリエンテーション（竹森・和田・鈴木）			
	2	授業実践の検証とカリキュラム・マネジメント1（小学校外国語活動及び外国語科）（中高への接続の観点）（和田）			
	3	授業実践の検証とカリキュラム・マネジメント2（中・高等学校外国語科）（和田）			
	4	授業実践の検証と児童・生徒の資質・能力育成1（小学校外国語活動及び外国語科）（中高への接続の観点）（和田）			
	5	授業実践の検証と児童・生徒の資質・能力育成2（中学校外国語科）（和田）			
	6	授業実践の検証と児童・生徒の資質・能力育成3（高等学校外国語科）（和田）			
	7	授業実践の検証と授業設計（和田）			
	8	授業実践の検証と学習評価（竹森）			
	9	英語コミュニケーション領域における教科内容開発と授業改善（竹森）			
	10	英語学領域における教科内容開発と授業改善（竹森）			
	11	英語文学領域における教科内容開発と授業改善（竹森）			
	12	異文化理解領域における教科内容開発と授業改善（竹森）			
	13	第二言語習得領域における教科内容開発と授業改善（竹森）			
	14	指導案発表（竹森・和田・鈴木）			
	15	模擬授業（竹森・和田・鈴木）			
教科書・参考書等	<p>中村典生ら（2022）『コア・カリキュラム対応 小・中学校で英語を教えるための必携テキスト 改訂版』東京書籍 小学校学習指導要領（平成29年3月告示，文部科学省） 小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編（平成29年3月告示，文部科学省） 中学校学習指導要領（平成29年3月告示，文部科学省） 中学校学習指導要領解説外国語編（平成29年7月，文部科学省） 高等学校学習指導要領（平成30年3月告示，文部科学省） 高等学校学習指導要領解説外国語編英語編（平成30年7月，文部科学省）</p>				
評価の観点・方法	<p>【観点】指導案の作成やマイクロティーチングを通して、英語科の授業の成果を検証・評価する知識、児童生徒の特性や発達段階に合わせて英語科の授業を行うための指導力や英語力を身に付けているか。 【方法】授業時間内の課題達成状況（20％）、指導案（50％）、模擬授業（20％）</p>				

成績評価	
標準的な到達水準	<ul style="list-style-type: none"> ・基準（評価B） ・専門的知識に基づいて授業内容を開発し、実際に自分自身が実践した授業や他者の実践記録等を分析する基礎的な力を備えている。 ・児童生徒の現状や学校の特性等に応じた、小・中・高等学校外国語科の授業を実践するための基礎的な指導力や英語力を身に付けている。
S	<ul style="list-style-type: none"> ・専門的知識に基づいて授業内容を開発し、実際に自分自身が実践した授業や他者の実践記録等を正確かつ適切に分析することができる。 ・児童生徒の現状や学校の特性等に応じた、小・中・高等学校外国語科の授業を実践するための高度な指導力や英語力を身に付けている。
A	<ul style="list-style-type: none"> ・専門的知識に基づいて授業内容を開発し、実際に自分自身が実践した授業や他者の実践記録等を分析することができる。 ・児童生徒の現状や学校の特性等に応じた、小・中・高等学校外国語科の授業を実践するための指導力や英語力を身に付けている。
B	<ul style="list-style-type: none"> ・専門的知識に基づいて授業内容を開発し、実際に自分自身が実践した授業や他者の実践記録等を分析する基礎的な力を備えている。 ・児童生徒の現状や学校の特性等に応じた、小・中・高等学校外国語科の授業を実践するための基礎的な指導力や英語力を身に付けている。
C	<ul style="list-style-type: none"> ・専門的知識に基づいて授業内容を開発し、実際に自分自身が実践した授業や他者の実践記録等を分析する素地を身に付けている。 ・児童生徒の現状や学校の特性等に応じた、小・中・高等学校外国語科の授業を実践するための指導力や英語力の素地を身に付けている。
D	<ul style="list-style-type: none"> ・専門的知識に基づいて授業内容を開発し、実際に自分自身が実践した授業や他者の実践記録等を分析する素地を身に付けていない。 ・児童生徒の現状や学校の特性等に応じた、小・中・高等学校外国語科の授業を実践するための指導力や英語力の素地を身に付けていない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	<p>【予習】 毎回の授業前に、前回授業時まで指定される教科書の担当部分を読み、ディスカッションのポイントを考えてくる（1時間）</p> <p>【復習】 授業の際に用いた資料や教材により得られた知識や気づきを基に、指導案を加筆・修正する。（1時間）</p>

専門高度化探究科目（教科探究科目）

授業科目名	授業検証と教科内容開発（基礎・技術科）			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	◎板垣翔大，岡本恭介				
授業の目的	学習指導要領の指導要素「生活や社会を支える技術」に関する授業の設計と評価に関する実践的な知識を獲得し，それに関する専門的な知識及び技能を習得する。				
授業の概要	技術科に焦点を当て，教科の学習成果を検証・評価する学術的な専門知識と，当該教科内容の背景となる学問に関する学術的な専門知識を教材として実際的かつ具体的に構成していく活動との関連性について理論的に考察する力を身につける。				
学習の到達目標	学習指導要領に沿った授業の設計と評価に関する実践的な知識を獲得し，校種間の連携を踏まえた専門的な知識及び技能を習得することができる。				
授業の内容	1	オリエンテーション（担当：板垣）			
	2	学習指導要領における技術科の内容構成と理念（担当：板垣）			
	3	技術科の実践をめぐる現状と課題（1）教科内容の視点から（担当：板垣）			
	4	技術科の実践をめぐる現状と課題（2）指導法の視点から（担当：板垣）			
	5	授業実践レビュー演習（担当：板垣）			
	6	情報の技術における指導の原理・理論基礎（1）（担当：板垣）			
	7	情報の技術における指導の原理・理論基礎（2）（担当：板垣）			
	8	STEAM教育（担当：板垣）			
	9	技術科教育と小学校情報教育との関連（1）（担当：岡本）			
	10	技術科教育と小学校情報教育との関連（2）（担当：岡本）			
	11	技術科教育と小学校情報教育との関連（3）（担当：岡本）			
	12	技術科教育と高等学校情報科との関連（1）（担当：岡本）			
	13	技術科教育と高等学校情報科との関連（2）（担当：岡本）			
	14	技術科教育と高等学校情報科との関連（3）（担当：岡本）			
	15	まとめと振り返り（担当：岡本）			
教科書・参考書等	日本産業技術教育学会・技術教育分科会編：技術科教育概論，九州大学出版会（2018） 中学校学習指導要領（平成29年3月告示，文部科学省） 中学校学習指導要領解説技術・家庭編（平成29年7月，文部科学省）				
評価の観点・方法	【観点】①技術の原理・法則の基礎的な仕組みを説明できるか。②技術の見方・考え方を踏まえた考察ができていないか。③作業について技能の向上が見られるか。 【方法】レポート試験（80%），毎回の授業の最後に提出する小レポート（20%）				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B）</p> <p>レポートの内容に、技術の見方・考え方に沿った考察がされており、かつ技術の原理・法則や技術の基礎的な仕組みが説明されている。さらに、作業についての技能の向上が認められる。</p>
S	<p>レポートの内容に、技術の見方・考え方に沿った具体的な考察がされており、かつ技術の原理・法則や技術の基礎的な仕組みが具体的に説明されていることに加え、実際の学校現場に即した指導の在り方について提案されている。さらに、作業についての技能習熟が認められる。</p>
A	<p>レポートの内容に、技術の見方・考え方に沿った具体的な考察がされており、かつ技術の原理・法則や技術の基礎的な仕組みが具体的に説明されている。さらに、作業についての技能の明確な向上が認められる。</p>
B	<p>レポートの内容に、技術の見方・考え方に沿った考察がされており、かつ技術の原理・法則や技術の基礎的な仕組みが説明されている。さらに、作業についての技能の向上が認められる。</p>
C	<p>レポートの内容に、技術の見方・考え方に沿った考察が不足している、もしくは技術の原理・法則や技術の基礎的な仕組みの説明が不十分である。もしくは、作業についての技能の向上が認められない。</p>
D	<p>レポートの内容に、技術の見方・考え方に沿った考察が書かれていない、もしくは技術の原理・法則や技術の基礎的な仕組みの説明が書かれていない。もしくは、作業や加工についての技能の向上が全く認められない。</p>
講義時間外に必要な学修時間の目安	120分

専門高度化探究科目（教科探究科目）

授業科目名	授業検証と教科内容開発(応用・技術科)			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数(TT)	単位数	2単位
担当教員名	◎板垣翔大, ●●●●				
授業の目的	学習指導要領の指導要素「技術による問題の解決」に関する授業の設計と評価に関する実践的な知識を獲得し、それに関する専門的な知識及び技能を習得する。				
授業の概要	技術科に焦点を当て、教科の学習成果を検証・評価する学術的な専門知識と関連させながら、当該教科内容の背景となる学問に関する学術的な専門知識を教材として実際的かつ具体的に構成していくことのできる力を身につけることによって、教科指導力に関する専門性の向上を図る。				
学習の到達目標	学習指導要領の指導要素「技術による問題の解決」に関する授業の設計と評価に関する実践的な知識を獲得し、それに関する専門的な知識及び技能を習得することができる。				
授業の内容	1	第1回：オリエンテーション（担当：板垣, ●●）			
	2	第2回：学習指導要領の系譜と技術科の教科内容（担当：板垣）			
	3	第3回：技術科における教科内容をめぐる課題（1）材料と加工（担当：板垣）			
	4	第4回：技術科における教科内容をめぐる課題（2）エネルギー変換領域（担当：●●）			
	5	第5回：課題解決に必要な教科内容構成演習（担当：板垣）			
	6	第6回：情報の技術の統合的な問題解決教科内容（1）（情報と材料加工の観点から）（担当：板垣）			
	7	第7回：ネットワークを利用した双方向性のあるコンテンツの発展的な指導方法（担当：板垣）			
	8	第8回：ネットワークを利用した双方向性のあるコンテンツの題材研究（担当：板垣）			
	9	第9回：電気とエネルギー変換における教科内容開発（1）（エネルギー変換の応用的な観点から）（担当：●●）			
	10	第10回：電気とエネルギー変換における教科内容開発（2）（エネルギー変換の応用的な観点から）（担当：●●）			
	11	第11回：制御技術における教科内容開発（1）（ロボット技術の応用的な観点から）（担当：●●）			
	12	第12回：制御技術における教科内容開発（2）（ロボット技術の応用的な観点から）（担当：●●）			
	13	第13回：計測・制御技術の利用における技術の仕組みの発展的な指導方法（担当：●●）			
	14	第14回：計測・制御技術における技術の見方・考え方の確実な捉え方（担当：●●）			
	15	第15回：まとめと振り返り（担当：板垣, ●●）			
教科書・参考書等	日本産業技術教育学会・技術教育分科会編：技術科教育概論，九州大学出版会（2018） 中学校学習指導要領（平成29年3月告示，文部科学省） 中学校学習指導要領解説技術・家庭編（平成29年7月，文部科学省）				
評価の観点・方法	【観点】①技術の見方・考え方に沿った「問題の解決」について考察がされているか。②技術の原理・法則や基本的な仕組みを「問題の解決」と関連付けることができるか。③作業についての技能習熟がされているか。 【方法】レポート試験（80%），毎回の授業の最後に提出する小レポート（20%）				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・ 基準（評価B）</p> <p>レポートの内容に、技術の見方・考え方に沿った「問題の解決」について考察がされており、かつ技術の原理・法則や技術の基礎的な仕組みがどのように「問題の解決」に関係しているのか説明されている。さらに、作業についての技能の向上が認められる。</p>
S	<p>レポートの内容に、技術の見方・考え方に沿った具体的な考察がされており、かつ技術の原理・法則や技術の基礎的な仕組みが具体的に説明されていることに加え、実際の学校現場に即した指導の在り方について提案されている。さらに、作業についての技能習熟が認められる。</p>
A	<p>レポートの内容に、技術の見方・考え方に沿った「問題の解決」について具体的な考察がされており、かつ技術の原理・法則や技術の基礎的な仕組みがどのように「問題の解決」に関係しているのか具体的に説明されている。さらに、作業についての技能の明確な向上が認められる。</p>
B	<p>レポートの内容に、技術の見方・考え方に沿った「問題の解決」について考察がされており、かつ技術の原理・法則や技術の基礎的な仕組みがどのように「問題の解決」に関係しているのか説明されている。さらに、作業についての技能の向上が認められる。</p>
C	<p>レポートの内容に、技術の見方・考え方に沿った「問題の解決」についての考察が不足している、もしくは技術の原理・法則や技術の基礎的な仕組みがどのように「問題の解決」に関係しているのかについて説明が不十分である。もしくは、作業についての技能の向上が認められない。</p>
D	<p>レポートの内容に、技術の見方・考え方に沿った「問題の解決」について考察が書かれていない、もしくは技術の原理・法則や技術の基礎的な仕組みがどのように「問題の解決」に関係しているのかについて説明が書かれていない。もしくは、作業や加工についての技能の向上が全く認められない。</p>
講義時間外に必要な学修時間の目安	120分

専門高度化探究科目（教科探究科目）

授業科目名	授業検証と教科内容開発（基礎・家庭科）			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（オムニバス）	単位数	2単位
担当教員名	前田まどか、亀井文、◎香曾我部琢、菅原正則、西川重和				
授業の目的	家庭科において学習成果を検証・評価するために必要な専門知識と、家庭科の内容・科目の背景となる学問に関する学術的な専門知識を教材とを組み合わせ、具体的にカリキュラムを構成し、新たな教材を開発する資質・能力を身につける。				
授業の概要	本科目では、小・中・高等学校の家庭科学習指導要領において示されている各内容・科目における教科内容の現状と課題に関する知識を習得した上で、これから求められる教材を構成する力と自らの授業実践を理論的に考察する力を育成することを目的とする。具体的には、各領域の専門知識を基にした教材開発を行い、模擬的な授業を通じてその実際の指導も含めて検証を行うことで、理論的な考察力の向上を目指す。				
学習の到達目標	家庭科教育に関する基礎的な知見とスキルを、学校の課題と児童・生徒の実態に即して理解し、授業実践を組み立てることができる。				
授業の内容	1	オリエンテーション（担当：亀井、西川、前田、菅原、香曾我部）			
	2	学習指導要領の変遷（小・中・高等学校学習指導要領の家庭科の変遷）（担当：前田）			
	3	小・中学校学習指導要領の内容の現状と課題（1）（家族・家庭生活）（担当：香曾我部）			
	4	小・中学校学習指導要領の内容の現状と課題（2）（衣食住の生活）（担当：亀井）			
	5	小・中学校学習指導要領の内容の現状と課題（3）（消費生活・環境）（担当：菅原）			
	6	高等学校学習指導要領の各科目の現状と課題（1）（服飾・ファッション・手芸）（担当：西川）			
	7	高等学校学習指導要領の各科目の現状と課題（2）（生活産業・住生活デザイン）（担当：菅原）			
	8	高等学校学習指導要領の各科目の現状と課題（3）（保育・生活と福祉）（担当：香曾我部）			
	9	高等学校学習指導要領の各科目の現状と課題（4）（栄養・食品・公衆衛生・調理）（担当：亀井）			
	10	家庭科における「見方・考え方」の実際と特色（担当：西川、亀井）			
	11	家庭科における「主体的・対話的な深い学び」の実際（担当：菅原、香曾我部）			
	12	カリキュラム・マネジメントの実際（保育・栄養）（担当：香曾我部・亀井）			
	13	カリキュラム・マネジメントの実際（服飾・住生活）（担当：菅原・西川）			
	14	授業研究・教材研究のテーマ設定（担当：：西川、亀井、前田、菅原、香曾我部）			
	15	テーマごとの討論と検討（担当：：西川、亀井、前田、菅原、香曾我部）			
教科書・参考書等	<p>（参考書）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学校学習指導要領（平成29年3月告示，文部科学省） 中学校学習指導要領解説技術・家庭編（平成29年7月，文部科学省） 高等学校学習指導要領（平成30年3月告示，文部科学省） 高等学校学習指導要領解説家庭編（平成30年7月，文部科学省） 				
評価の観点・方法	<p>【観点】家庭科教育において求められる基礎的な知識と技能を理解した上で、さらに、各領域の授業実践の展開に向けて必要とされる知識を習得する。さらに、それらの知識や技能をカリキュラム・マネジメントによって、授業を自ら展開する専門的力量・実践力を習得する。</p> <p>【方法】授業時間内の課題達成状況、レポートを用いて、段階別達成度を評価し、自己評価・相互評価を踏まえて総合的に評価する。（20%）</p>				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B）</p> <p>家庭科教育において求められる基礎的な知識と技能を理解した上で、さらに各領域の授業実践の展開に向けて必要とされる知識を習得している。</p>
S	家庭科教育において求められる基礎的な知識と技能を理解した上で、さらに各領域の授業実践の展開に向けて必要とされる知識と技能を習得している。さらに、それらの知識や技能をカリキュラム・マネジメントによって、授業を自ら展開する専門的力量・実践力を習得している。
A	家庭科教育において求められる基礎的な知識と技能を理解した上で、さらに各領域の授業実践の展開に向けて必要とされる知識を習得している。さらに、それらの知識や技能をカリキュラム・マネジメントによって実践する知識を習得している。
B	家庭科教育において求められる基礎的な知識と技能を理解した上で、さらに各領域の授業実践の展開に向けて必要とされる知識を習得している。
C	家庭科教育において求められる基礎的な知識と技能を理解している。
D	家庭科教育において求められる基礎的な知識と技能を理解していない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	<p>【予習】 毎回の授業前に、前回授業時まで配布する資料をもとに、授業のテーマについて事前に調査する（45分）</p> <p>【復習】 毎回の授業後には、授業の際に用いた資料や教材により得られた知識や気づきを確認する。学んだことについてさらに調べ学習を行い、自分の考えを深める（45分）</p>

専門高度化探究科目（教科探究科目）

授業科目名	授業検証と教科内容開発（応用・家庭科）		講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（オムニバス）	単位数 2単位
担当教員名	亀井文、◎香曾我部琢、菅原正則、西川重和、前田まどか			
授業の目的	家庭科の授業実践を批判的に捉える力を育むと同時に、各内容・科目の背景となる学問に関する国際的な動向、学術的な専門知識を基礎に、他教科や特別活動、総合的な探究の時間と関連付けた教材の開発ができる専門的な資質の向上を図る。			
授業の概要	本科目では、学習指導要領に示された生活産業の各領域において、国際的な動向や他教科、地域資源を活用した教材の開発とその検証を行う過程で、その開発した教材に関する教科指導力の育成と、他教科・他科目との領域融合や地域の教育資源活用などの横断的な学習活動を構成する力の育成を目的とする。具体的には、各科目の専門知識を基にした教材開発を行い、実際の授業とその分析を行うことで教科指導力の向上を目指す。			
学習の到達目標	家庭科教育に関する理論的・実践的知見を、学校の課題と児童・生徒の実態に即して理解することができる。			
授業の内容	1	オリエンテーション（担当：亀井、西川、前田、菅原、香曾我部）		
	2	家庭科における学習支援と指導法（担当：前田）		
	3	授業研究の方法と実際（担当：香曾我部）		
	4	食教育の国際的な動向について（担当：亀井）		
	5	国際的な住居・被服に関する教育の動向について（担当：菅原、西川）		
	6	授業実践記録の批判的読み取り①（小・中学校：衣食住の生活）（担当：亀井）		
	7	授業実践記録の批判的読み取り②（小・中学校：消費生活・環境）（担当：菅原）		
	8	授業実践記録の批判的読み取り③（小・中学校：家族・家族生活）（担当：香曾我部）		
	9	家庭科と総合的な探究、特別活動との横断的な学習について（担当：菅原、亀井）		
	10	小・中・高の家庭科における幼児との交流の方法と理論（担当：香曾我部）		
	11	生活産業の各分野についての理解と考察（担当：西川、菅原）		
	12	授業実践（保育・食品）（担当：亀井、香曾我部）		
	13	授業実践（服飾文化・住居デザイン）（担当：西川、菅原）		
	14	研究成果の発表（担当：菅原、亀井、西川、香曾我部）		
	15	研究成果の報告書作成（担当：西川）		
教科書・参考書等	<p>（参考書）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学校学習指導要領（平成29年3月告示，文部科学省） 中学校学習指導要領解説技術・家庭編（平成29年7月，文部科学省） 高等学校学習指導要領（平成30年3月告示，文部科学省） 高等学校学習指導要領解説家庭編（平成30年7月，文部科学省） 			
評価の観点・方法	<p>【観点】家庭科教育の意義が理解され、各領域の現代的な課題がどのように共有され、家庭科教育においてその問題解決に向けてどのように計画され、教材開発が行われているのか知見を習得する。さらに、その実施と評価について自らの知見としてまとめつつ、新たな教材開発と実践を行う実践力の習得の度合いを評価する。【方法】授業時間内の課題達成状況、レポートを用いて、段階別達成度を評価し、自己評価・相互評価を踏まえて総合的に評価する。</p>			

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・ 基準（評価B）</p> <p>家庭科教育の意義が理解され、各領域の現代的な課題がどのように共有され、家庭科教育においてその問題解決に向けてどのように計画されているのか、その知見を習得している。</p>
S	家庭科教育の意義が理解され、各領域の現代的な課題がどのように共有され、家庭科教育においてその問題解決に向けてどのように計画され、教材開発が行われているのか知見を習得している。さらに、その実施と評価について自らの知見としてまとめつつ、新たな教材開発と実践を行う実践力を身に付けている。
A	家庭科教育の意義が理解され、各領域の現代的な課題がどのように共有され、家庭科教育においてその問題解決に向けてどのように計画され、教材開発が行われているのか知見を習得している。
B	家庭科教育の意義が理解され、各領域の現代的な課題がどのように共有され、家庭科教育においてその問題解決に向けてどのように計画されているのか、その知見を習得している。
C	家庭科教育の意義が理解され、各領域の現代的な課題がどのように共有され、家庭科教育における問題点について、その知見を習得している。
D	家庭科教育の意義が理解され、各領域の現代的な課題がどのように共有されていない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	<p>【予習】 毎回の授業前に、前回授業時までに配布する資料をもとに、授業のテーマについて事前に調査する（45分）</p> <p>【復習】 毎回の授業後には、授業の際に用いた資料や教材により得られた知識や気づきを確認する。学んだことについてさらに調べ学習を行い、自分の考えを深める（45分）</p>

専門高度化探究科目（教科探究科目）

授業科目名	授業検証と 教科内容開発（基礎・音楽科）			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（オムニバス）	単位数	2単位
担当教員名	◎原田博之・日比野裕幸・小塩さとみ・倉戸テル・木下和彦				
授業の目的	音楽科の教科内容の背景となる学術的な専門知識を活用した具体的な授業を構成し、教科指導に活用できる。				
授業の概要	音楽科に焦点を当て、教科の学習成果を検証・評価する学術的な専門知識と関連させながら、当該教科内容の背景となる学問に関する学術的な専門知識を教材として、実際的かつ具体的に構成していくことのできる力を身につけることによって、教科指導力に関する専門性の向上を図る。				
学習の到達目標	音楽科における児童・生徒の発達の課題を検討した上で、歌唱、器楽、創作（音楽づくり）、鑑賞の授業における教材の再検討を行い、それとともなって必要とされる専門的知識を身に付けることを目標とする。				
授業の内容	1	オリエンテーション（原田・日比野・小塩・倉戸・木下）			
	2	学習指導要領の変遷と検討（原田）			
	3	音楽科の実践をめぐる現状と課題（原田）			
	4	小学校における歌唱活動の授業分析と検証（原田・日比野）			
	5	中・高等学校における歌唱活動の授業分析と検証（原田・小塩）			
	6	歌唱指導における専門的知識（原田・倉戸）			
	7	小学校における器楽活動の授業分析と検証（倉戸・原田）			
	8	中・高等学校における器楽活動の授業分析と検証（倉戸・日比野）			
	9	器楽指導における専門的知識（倉戸・日比野）			
	10	小学校における鑑賞の授業分析と検証鑑賞（小塩・日比野）			
	11	中・高等学校における鑑賞指導の授業分析と検証（小塩・日比野）			
	12	鑑賞指導における専門的知識（小塩・日比野）			
	13	音楽づくり・創作活動の授業分析と検証（木下）			
	14	音楽づくり・創作指導における専門的知識（木下）			
	15	総合討論・検討（原田・小塩・日比野・倉戸・木下）			
教科書・参考書等	小学校学習指導要領（平成29年3月告示，文部科学省） 小学校学習指導要領解説 音楽編（平成29年7月 文部科学省） 中学校学習指導要領（平成29年3月告示，文部科学省） 中学校学習指導要領解説 音楽編（平成29年7月 文部科学省） 高等学校学習指導要領（平成30年3月告示，文部科学省） 高等学校学習指導要領解説 芸術（音楽・美術・工芸・書道）編・音楽編・美術編（平成30年7月 文部科学省）				
評価の観点・方法	【評価の観点】 音楽科における児童・生徒の発達の課題を理解しているか。音楽科における教材の検討を客観的視点から行うことができるか。教科内容の背景となる学術的な専門知識を活用した具体的な授業を自ら構成することができるのか。それらを実際の教科指導で十分に活用できるか。 【評価の方法】 授業時間内の課題発表、レポートを用いて、段階別達成度を評価し、自己評価・相互評価を踏まえて総合的に評価する。				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・ 基準（評価B）</p> <p>音楽科における児童・生徒の発達の課題を理解し、音楽科における教材の検討を客観的視点から行い、教科内容の背景となる学術的な専門知識を活用した具体的な授業について十分に理解し、得られた知見を示すことができる。</p>
S	音楽科における児童・生徒の発達の課題を理解し、音楽科における教材の検討を客観的視点から行い、教科内容の背景となる学術的な専門知識を活用した具体的な授業を自ら構成し、教科指導に十分に活用できる。
A	音楽科における児童・生徒の発達の課題を理解し、音楽科における教材の検討を客観的視点から行い、教科内容の背景となる学術的な専門知識を活用した具体的な授業を自ら構成し、教科指導に活用できる。
B	音楽科における児童・生徒の発達の課題を理解し、音楽科における教材の検討を客観的視点から行い、教科内容の背景となる学術的な専門知識を活用した具体的な授業について十分に理解し、得られた知見を示すことができる。
C	音楽科における児童・生徒の発達の課題を理解し、音楽科における教材の検討を客観的視点から行い、教科内容の背景となる学術的な専門知識を活用した具体的な授業について得られた知見を示すことができる。
D	音楽科における児童・生徒の発達の課題を理解し、音楽科における教材の検討を客観的視点から行い、教科内容の背景となる学術的な専門知識を活用した具体的な授業について得られた知見を示すことができない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	<p>【予習】 毎回の授業前（前回授業時）に指示された課題について、準備しておく（45分）</p> <p>【復習】 毎回の授業後には、授業内におけるディスカッション、さらに授業後に調べたことも含めたレポートを提出する（45分）</p>

専門高度化探究科目（教科探究科目）

授業科目名	授業検証と 教科内容開発（応用・音楽科）			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（オムニバス）	単位数	2単位
担当教員名	◎原田博之・日比野裕幸・小塩さとみ・倉戸テル・木下和彦				
授業の目的	音楽科の教科内容の背景となる学術的な専門知識を活用した授業を構成し、それらを理論的に考察できる。				
授業の概要	音楽科に焦点を当て、教科の学習成果を検証・評価する学術的な専門知識と、当該教科内容の背景となる学問に関する学術的な専門知識を教材として実際的かつ具体的に構成していく活動との関連性について理論的に考察する力を身につける。				
学習の到達目標	小学校・中学校・高等学校の音楽科教育の歌唱、器楽、創作（音楽づくり）、鑑賞における現代的課題、実践動向を検討した上で、新たな教材開発とそれに伴って必要とされる技能を習得することを目標とする。				
授業の内容	1	オリエンテーション（原田・日比野・小塩・倉戸・木下）			
	2	小学校の音楽科における教科内容をめぐる課題（原田）			
	3	中学校の音楽科における教科内容をめぐる課題（原田）			
	4	高等学校の音楽科における教科内容をめぐる課題（原田・日比野）			
	5	小・中・高等学校の歌唱活動を通して育成する資質・能力の検討（原田・日比野）			
	6	歌唱指導における教科内容開発とその検討（原田・日比野）			
	7	小・中・高等学校の器楽活動を通して育成する資質・能力の検討（倉戸）			
	8	器楽指導における教科内容開発とその検討（倉戸・日比野）			
	9	小・中・高等学校の鑑賞活動を通して育成する資質・能力の検討（小塩）			
	10	鑑賞指導における教科内容開発とその検討（小塩・原田）			
	11	表現と鑑賞との関連（1）小学校における授業開発と検討（小塩・倉戸・日比野）			
	12	表現と鑑賞との関連（2）中・高等学校における授業開発と検討（小塩・倉戸・日比野）			
	13	音楽づくり・創作の活動を通して育成する資質・能力の検討（木下）			
	14	音楽づくり・創作の活動における教科内容開発とその検討（木下）			
	15	総合討論・検討（原田・日比野・小塩・倉戸・木下）			
教科書・参考書等	小学校学習指導要領（平成29年3月告示，文部科学省） 小学校学習指導要領解説 音楽編（平成29年7月 文部科学省） 中学校学習指導要領（平成29年3月告示，文部科学省） 中学校学習指導要領解説 音楽編（平成29年7月 文部科学省） 高等学校学習指導要領（平成30年3月告示，文部科学省） 高等学校学習指導要領解説 芸術（音楽・美術・工芸・書道）編・音楽編・美術編（平成30年7月 文部科学省）				
評価の観点・方法	【評価の観点】 音楽科における児童・生徒の発達の課題を理解しているか。音楽科における教材の検討を客観的視点から行うことができるか。教科内容の背景となる学術的な専門知識を活用した具体的な授業を自ら構成することができるのか。それらを実際の教科指導で十分に活用できるか。 【評価の方法】 授業時間内の課題発表、レポートを用いて、段階別達成度を評価し、自己評価・相互評価を踏まえて総合的に評価する。				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・ 基準（評価B）</p> <p>小学校・中学校・高等学校の音楽科教育の歌唱、器楽、創作（音楽づくり）、鑑賞における現代的課題、実践動向を検討し、新たな教材開発とそれに伴って必要とされる技能を理解し、構成した授業について理論的に考察できる。</p>
S	<p>小学校・中学校・高等学校の音楽科教育の歌唱、器楽、創作（音楽づくり）、鑑賞における現代的課題、実践動向を自ら検討し、新たな教材開発とそれに伴って必要とされる技能を十分に習得した上で、構成した授業について理論的に考察できる。</p>
A	<p>小学校・中学校・高等学校の音楽科教育の歌唱、器楽、創作（音楽づくり）、鑑賞における現代的課題、実践動向を検討し、新たな教材開発とそれに伴って必要とされる技能を習得した上で、構成した授業について理論的に考察できる。</p>
B	<p>小学校・中学校・高等学校の音楽科教育の歌唱、器楽、創作（音楽づくり）、鑑賞における現代的課題、実践動向を検討し、新たな教材開発とそれに伴って必要とされる技能を理解し、構成した授業について理論的に考察できる。</p>
C	<p>小学校・中学校・高等学校の音楽科教育の歌唱、器楽、創作（音楽づくり）、鑑賞における現代的課題、実践動向を検討し、新たな教材開発とそれに伴って必要とされる技能を理解し、構成した授業について得られた知見を整理して示すことができる。</p>
D	<p>小学校・中学校・高等学校の音楽科教育の歌唱、器楽、創作（音楽づくり）、鑑賞における現代的課題、実践動向を検討し、新たな教材開発とそれに伴って必要とされる技能を理解し、構成した授業について得られた知見を整理して示すことができない。</p>
講義時間外に必要な学修時間の目安	<p>【予習】 毎回の授業前（前回授業時）に指示された課題について、準備しておく（45分）</p> <p>【復習】 毎回の授業後には、授業内におけるディスカッション、さらに授業後に調べたことも含めたレポートを提出する（45分）</p>

専門高度化探究科目（教科探究科目）

授業科目名	授業検証と教科内容開発(基礎・美術科)			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数(TT)	単位数	2単位
担当教員名	◎村上タカシ、安彦文平				
授業の目的	美術科教育の理論と実践とを関連付けながら、教材を開発したり授業を検証したりすることについての基礎的な力を身に付ける				
授業の概要	美術科に焦点を当て、教科の学習成果を検証・評価する学術的な専門知識と、当該教科内容の背景となる学問に関する学術的な専門知識を教材として実際的かつ具体的に構成していく活動との関連性について理論的に考察する力を身につける。				
学習の到達目標	美術科の教育現場における教科と教材にテーマを当て、美術科教育の在り方について検討しながら問題意識を高める。また、教育実践における平面表現の観点から、具体的な授業実践に即しつつさまざまな表現方法を学び、授業を組織する原理と方法を理解する。				
授業の内容	1	ガイダンス			
	2	美術科における教科と教材の解説 —現代の多様な表現—			
	3	美術科における教材の検討① —福祉とアート—			
	4	美術科における教材の検討② —震災とアート1—			
	5	美術科における教材の検討③ —震災とアート2—			
	6	教科専門の考察 —平面表現、材料学—			
	7	教科専門の考察 —平面表現、歴史—			
	8	科専門の考察 —平面表現、鑑賞—			
	9	教科専門の実践 —平面表現、実践①—			
	10	教科専門の実践 —平面表現、実践②—			
	11	教科専門の実践 —平面表現、実践③—			
	12	教科専門の実践 —平面表現、実践④—			
	13	美術科実践についての事例検討① —教育・文化芸術政策—			
	14	美術科実践についての事例検討② —教育につながるアート企画—			
	15	美術科をめぐる今日的課題 —プレゼン・討論とまとめ—			
教科書・参考書等	授業開始時に資料を配付する。必要に応じて参考図書を示す。				
評価の観点・方法	学修状況について、目標に照らして、授業への参加態度や演習時の活動状況、プレゼン・レポート・作品等成果物により評価を行う。				

成績評価	
標準的な到達水準	<ul style="list-style-type: none"> ・ 基準（評価B） <p>課題の条件（知識・技能・造形的な見方）を満たしつつ、自らの課題意識を用いて成果物をまとめている。</p>
S	課題の条件（知識・技能・造形的な見方）を満たしつつ、発展的な課題についても自発的に取り組んで成果物をまとめている。
A	課題の条件（知識・技能・造形的な見方）を満たしつつ、自らの課題意識を応用し新たな成果物をまとめている。
B	課題の条件（知識・技能・造形的な見方）を満たしつつ、自らの課題意識を用いて成果物をまとめている。
C	課題の条件（知識・技能・造形的な見方）を満たして成果物をまとめている。
D	成果物をまとめているものの、課題の条件（知識・技能・造形的な見方）を満たすことができていない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	2時間

専門高度化探究科目（教科探究科目）

授業科目名	授業検証と教科内容開発(応用・美術科)			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数(TT)	単位数	2単位
担当教員名	村上タカシ、◎平垣内清、その他の教員				
授業の目的	美術科のなかでも図画工作科教育における実践研究をもとに目標・内容づくり・教材づくり・学習指導を検討し、カリキュラムづくりと授業づくりに対する問題意識を高める。ここでは特に教育実践における絵画表現と立体表現の観点から、具体的な授業実践に即しつつ、さまざまな表現方法を学び、授業を組織する原理と方法を理解する。				
授業の概要	美術科に焦点を当て、教科の学習成果を検証・評価する学術的な専門知識と関連させながら、当該教科内容の背景となる学問に関する学術的な専門知識を教材として実際的かつ具体的に構成していくことのできる力を身につけることによって、教科指導力に関する専門性の向上を図る。				
学習の到達目標	図画工作科教育の現状を把握し、具体的な授業実践に即しつつ絵画表現と立体表現の観点から、さまざまな表現方法を実践として理解できる。				
授業の内容	1	オリエンテーション（担当：村上、虎尾、平垣内）			
	2	図画工作科における社会との関係性についての課題（担当：村上）			
	3	図画工作科における教科内容をめぐる課題（様々な表現の分析と検討、平面表現）（担当：平垣内）			
	4	平面表現領域における教科内容構成の理解と考察①（絵画表現に関連して）（担当：平垣内）			
	5	平面表現領域における教科内容構成の理解と考察②（版画表現に関連して）（担当：平垣内）			
	6	平面表現領域における教科内容構成の理解と考察③（PC表現に関連して）（担当：平垣内）			
	7	授業実践の検証、実践のための授業設計と実際（担当：平垣内）			
	8	図画工作科における教科内容をめぐる課題（様々な表現の分析と検討、立体表現）（担当：未定）			
	9	立体表現領域における教科内容構成の理解と考察①（材料学について）（担当：未定）			
	10	立体表現領域における教科内容構成の理解と考察②（歴史について）（担当：未定）			
	11	教科内容構成の理解と考察①（担当：村上）			
	12	教科内容構成の理解と考察②（担当：村上）			
	13	授業実践の検証（基礎編）（担当：村上）			
	14	実践のための授業設計と実際（応用編）（担当：村上）			
	15	研究成果の発表（担当：村上、平垣内）			
教科書・参考書等	授業で使用するテキスト等については必要に応じて適宜指示する。小学校学習指導要領（平成29年3月告示，文部科学省）、小学校学習指導要領解説図画工作編（平成29年7月，文部科学省）				
評価の観点・方法	【観点】①図画工作科教育の現状を把握できているか。②絵画表現と立体表現の観点から様々な表現方法を身につけ、具体的な授業実践に生かす準備ができているか。【方法】授業への参加態度や演習時の活動状況、プレゼン・レポート・作品等成果物により評価を行う。				

成績評価	
標準的な到達水準	<ul style="list-style-type: none"> ・ 基準（評価B） <p>図画工作科教育に現状を把握し、具体的な授業実践に即しつつ絵画表現と立体表現の観点から、さまざまな表現方法を実践として理解できる。</p>
S	図画工作科教育に現状を把握し、具体的な授業実践に即しつつ絵画表現と立体表現の観点から、さまざまな表現方法を実践として十分に理解できており、授業提案及び応用展開する準備ができています。
A	図画工作科教育に現状を把握し、具体的な授業実践に即しつつ絵画表現と立体表現の観点から、さまざまな表現方法を実践として十分に理解できており、授業提案ができる。
B	図画工作科教育に現状を把握し、具体的な授業実践に即しつつ絵画表現と立体表現の観点から、さまざまな表現方法を実践として十分に理解できている。
C	図画工作科教育に現状を把握し、具体的な授業実践に即しつつ絵画表現と立体表現の観点から、さまざまな表現方法を実践として理解している。
D	図画工作科教育に現状を把握し、具体的な授業実践に即しつつ絵画表現と立体表現の観点から、さまざまな表現方法を実践として理解ができていない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	120分

専門高度化探究科目（教科探究科目）

授業科目名	授業検証と教科内容開発（基礎・保健体育科）		講義・演習		
科目区分	選択必修	授業形態	複数（オムニバス）	単位数	2単位
担当教員名	◎黒川修行，池田晃一，木下英俊，沼倉学，佐藤亮平				
授業の目的	小学校体育科および中学校・高等学校保健体育科のカリキュラム研究および授業研究を行い、校種間の授業内容の接続について検討する。				
授業の概要	体育科・保健体育科に焦点を当て、教科の学習成果を検証・評価する学術的な専門知識と、当該教科内容の背景となる学問に関する学術的な専門知識を教材として実際的かつ具体的に構成していく活動との関連性について、理論的に考察する力を身につける。※中学校および高等学校における保健体育の内容を扱うので、中学校1種（保健体育）、高等学校1種（保健体育）の教員免許を取得している者を原則として、履修対象とする。履修者のこれまでの背景などを考慮して、授業を展開する。				
学習の到達目標	具体的な実践事例に基づいて、授業の目標，教科内容，教材づくり，学習指導について、理解および説明することができる。また、授業とカリキュラムの関係が説明できる				
授業の内容	1	第1回：オリエンテーション・ガイダンス（担当：黒川，佐藤，池田，木下，沼倉）			
	2	第2回：学習指導要領の変遷（1）（小学校 体育科）（担当：沼倉）			
	3	第3回：学習指導要領の変遷（2）（中学校・高等学校 体育）（担当：佐藤）			
	4	第4回：学習指導要領の変遷（3）（小・中・高 保健）（担当：黒川）			
	5	第5回：保健体育科の現状と課題（1）（幼稚園、小学校体育）（担当：木下）			
	6	第6回：保健体育科の現状と課題（2）（中学校保健体育）（担当：佐藤）			
	7	第7回：保健体育科の現状と課題（3）（高等学校体育・保健体育）（担当：池田）			
	8	第8回：保健体育科の現状と課題（4）（小・中・高 保健）（担当：黒川）			
	9	第9回：カリキュラム概念、およびその研究と方法（体育）（担当：佐藤）			
	10	第10回：カリキュラム概念、およびその研究と方法（保健）（担当：黒川）			
	11	第11回：カリキュラムマネジメントについて（体育）（担当：佐藤）			
	12	第12回：カリキュラムマネジメントについて（保健）（担当：黒川）			
	13	第13回：カリキュラム研究・授業研究・教材研究のテーマづくり（体育）（担当：佐藤）			
	14	第14回：カリキュラム研究・授業研究・教材研究のテーマづくり（保健）（担当：黒川）			
	15	第15回：総合討論・検討（担当：黒川，佐藤，池田，木下，沼倉）			
教科書・参考書等	<テキスト・資料>授業時に適宜資料を配付する。 <参考書>日本教育保健学会編 教師のための教育保健学、2016、東山書房 久保健 著 体育科教育法 講義資料集、2010、創文企画 文部科学省 学習指導要領解説 体育編、保健体育編				
評価の観点・方法	【観点】小学校体育および中学校・高等学校保健体育について学習指導要領の枠組を理解しているか。また、運動文化およびからだを育てるといった観点に立つとともに、子供の健康、発育・発達なども含めた体の仕組みなどについても、理解しているか。 【方法】授業時間内の課題達成状況、レポートや確認テストを用いて、段階別達成度を評価し、自己評価・相互評価を踏まえて総合的に評価する。				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・ 基準（評価B：標準となる到達度）</p> <p>小学校体育および中学校・高等学校保健体育について、現在の学習指導要領の枠組について理解している。体育および保健の授業に関する連関について、理解している。これらのことを踏まえ、各校種における体育・保健体育の授業内容を理解することができる。</p>
S	<p>小学校体育および中学校・高等学校保健体育について、現在の学習指導要領の枠組について現状を明確に理解している。体育および保健の授業に関する連関について、明確に理解し、説明することができる。また、これらのことを踏まえ、各校種における体育および保健体育の授業内容を十分に理解し、その内容について説明することができる。</p>
A	<p>小学校体育および中学校・高等学校保健体育について、現在の学習指導要領の枠組について理解している。体育および保健の授業に関する連関について、理解し、説明できる。これらのことを踏まえ、各校種における体育・保健体育の授業内容を十分に理解することができる。</p>
B	<p>小学校体育および中学校・高等学校保健体育について、現在の学習指導要領の枠組について理解している。体育および保健の授業に関する連関について、理解している。これらのことを踏まえ、各校種における体育・保健体育の授業内容を理解することができる。</p>
C	<p>小学校体育および中学校・高等学校保健体育について、現在の学習指導要領の枠組について理解している。体育および保健の授業に関する連関について、理解している。これらのことを踏まえ、自分の所属している校種における体育および保健体育の授業を理解することができる。</p>
D	<p>小学校体育および中学校・高等学校保健体育について、現在の学習指導要領の枠組について現状を明確に理解しているものの、各校種における体育・保健体育の授業の理解ができない。</p>
講義時間外に必要な学修時間の目安	<p>【予習】 毎回の授業前に、授業時まで配布する資料をもとに、授業のテーマについて調べておく（45分）</p> <p>【復習】 毎回の授業後には、授業の際に用いた資料や教材により得られた知識や気づきを確認する。学んだことについてさらに調べ学習を行い、自分の考えを深める（45分）</p>

専門高度化探究科目（教科探究科目）

授業科目名	授業検証と教科内容開発（応用・保健体育科）			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（オムニバス）	単位数	2単位
担当教員名	◎黒川修行，池田晃一，木下英俊，沼倉学，佐藤亮平				
授業の目的	保健体育科教育におけるすぐれた実践研究をもとに目標・内容づくり・教材づくり・学習指導を検討し，カリキュラムづくりと授業づくりを構築することができる。				
授業の概要	体育科・保健体育科に焦点を当て，教科の学習成果を検証・評価する学術的な専門知識と関連させながら，当該教科内容の背景となる学問に関する学術的な専門知識を教材として実際的かつ具体的に構成していくことのできる力を身につけることによつて，教科指導力に関する専門性の向上を図る。※中学校および高等学校における保健体育の内容を扱うので，中学校1種（保健体育）、高等学校1種（保健体育）の教員免許を取得している者を原則として，履修対象とする。履修者のこれまでの背景などを考慮して，授業を展開する。				
学習の到達目標	保健体育科教育におけるすぐれた実践研究をもとに目標・内容づくり・教材づくり・学習指導を検討し，カリキュラムづくりと授業づくりを構築することができる。				
授業の内容	1	第1回：オリエンテーション・ガイダンス（担当：黒川，佐藤，池田，木下，沼倉）			
	2	第2回：単元学習概念の検討（担当：沼倉）			
	3	第3回：授業研究の目的と方法（体育）（担当：佐藤）			
	4	第4回：授業研究の目的と方法（保健）（担当：黒川）			
	5	第5回：実践記録の批評①（体育）（担当：沼倉，佐藤）			
	6	第6回：実践記録の批評②（保健）（担当：黒川）			
	7	第7回：小学校・中学校・高等学校における体育の接続について（担当：佐藤，木下）			
	8	第8回：運動学領域の理解と考察①-器械運動に関連して-（担当：木下）			
	9	第9回：運動学領域の理解と考察②-球技に関連して-（担当：池田）			
	10	第10回：運動学領域の理解と考察③-ゴール型に関連して-（担当：池田）			
	11	第11回：身体表現教育の理解と考察（担当：沼倉）			
	12	第12回：体育と保健と他の教科との領域融合の検証（担当：黒川）			
	13	第13回：授業実践・研究（体育）（担当：佐藤，沼倉，池田，木下）			
	14	第14回：授業実践・研究（保健）（担当：黒川）			
	15	第15回：授業実践・研究の成果発表（担当：黒川，佐藤，池田，木下，沼倉）			
教科書・参考書等	<テキスト・資料>授業時に適宜資料を配付する。 <参考書>日本教育保健学会編 教師のための教育保健学、2016、東山書房 久保健 著 体育科教育法 講義資料集、2010、創文企画 文部科学省 学習指導要領解説 体育編、保健体育編				
評価の観点・方法	【観点】小学校体育および中学校・高等学校保健体育について学習指導要領の枠組を踏まえて、各単元等について理解しているか。また、これらのことを踏まえ、各校種における体育・保健体育の授業構築をすることができているか。 【方法】授業時間内の課題達成状況、レポートや模擬授業の取組により、段階別達成度を評価し、自己評価・相互評価を踏まえて総合的に評価する。				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B：標準となる到達度）</p> <p>小学校体育および中学校・高等学校保健体育について、現在の学習指導要領の枠組を踏まえて、保健体育領域について理解している。また、これらのことを踏まえ、各校種における体育および保健体育の授業内容を理解し、授業を構成することができる。</p>
S	<p>小学校体育および中学校・高等学校保健体育について、現在の学習指導要領の枠組を踏まえて、体育および保健の両分野における領域とその内容について十分に理解している。体育および保健の授業構成の連関について、明確に理解し、説明することができる。また、これらのことを踏まえ、各校種における体育および保健体育の授業観察ができ、その内容を十分に理解し、授業を構成することができる。</p>
A	<p>小学校体育および中学校・高等学校保健体育について、現在の学習指導要領の枠組を踏まえて、体育および保健の両分野における領域について理解している。体育および保健の授業構成の連関について、明確に理解している。また、これらのことを踏まえ、各校種における体育および保健体育の授業を構成することができる。</p>
B	<p>小学校体育および中学校・高等学校保健体育について、現在の学習指導要領の枠組を踏まえて、保健体育領域について理解している。また、これらのことを踏まえ、各校種における体育および保健体育の授業内容を理解し、授業を構成することができる。</p>
C	<p>小学校体育および中学校・高等学校保健体育について、現在の学習指導要領の枠組を踏まえて、保健体育領域について理解している。また、これらのことを踏まえ、自分の主として所属する校種における体育および保健体育の授業内容を理解し、授業を構成することができる。</p>
D	<p>小学校体育および中学校・高等学校保健体育について、現在の学習指導要領の枠組を踏まえて、保健体育領域について十分に理解できていない。また、校種における体育および保健体育の授業内容の違いを理解できずに、適切に授業を構成することができない。</p>
講義時間外に必要な学修時間の目安	<p>【予習】 毎回の授業前に、授業時まで配布する資料をもとに、授業のテーマについて調べておく（45分）</p> <p>【復習】 毎回の授業後には、授業の際に用いた資料や教材により得られた知識や気づきを確認する。学んだことについてさらに調べ学習を行い、自分の考えを深める（45分）</p>

専門高度化探究科目（特別支援・子ども支援科目）

授業科目名	インクルーシブ教育総論			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（オムニバス）	単位数	2単位
担当教員名	◎永井伸幸・松崎丈・寺本淳志				
授業の目的	「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム」という我が国の教育の目標について理解し、具体的な取り組みについて理解し、実践の具体について計画・立案できる。				
授業の概要	共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進という、現在の日本における教育とめざすべき社会の実現のための、教育現場の具体的な取り組みについての理解と実践力を身につける。				
学習の到達目標	国の施策である共生社会形成に向けたインクルーシブ教育の概要について理解する。障害のある子どもの特別な教育的ニーズや合理的配慮の内容を理解し、実際の教育現場での具体的対応を学び実践的な方策と計画・立案できる。				
授業の内容	1	イントロダクション：参加学生のインクルーシブ教育に関する知識と理解の共有（担当：全員）			
	2	インクルーシブ教育の理念1・障害の定義と障害者観の変遷（担当：松崎）			
	3	インクルーシブ教育の理念2・インクルーシブ教育における特別支援教育（担当：寺本）			
	4	国内外におけるインクルーシブ教育の潮流（担当：松崎）			
	5	特別支援学校の現状と課題（担当：寺本）			
	6	特別支援学級・通級による指導の現状と課題（担当：松崎）			
	7	小中学校等における特別支援教育の現状と課題（担当：永井）			
	8	発達障害等の理解と支援（担当：永井）			
	9	自立活動の実際（担当：寺本）			
	10	個別の教育支援計画と個別の指導計画（担当：寺本）			
	11	事例検討「小学校・中学校における取り組み」（その1）（担当：永井）			
	12	事例検討「小学校・中学校における取り組み」（その2）（担当：松崎）			
	13	事例検討「特別支援学校における取り組み」（担当：永井）			
	14	グループ討議：インクルーシブ教育の推進者としての教員とは：展開（担当：全員）			
	15	グループ討議：インクルーシブ教育の推進者としての教員とは：まとめ（担当：全員）			
教科書・参考書等	<教科書> ・受講生の関心に基づき、実践論文、研究論文を紹介する。 <参考書・参考資料等> ・宮城教育大学特別支援教育講座編（2019）特別支援教育への招待〔改訂版〕。教育出版。				
評価の観点・方法	【観点】インクルーシブ教育の理念の適切な理解に基づいた学級運営や対応を具体的に考えることができる。 【方法】授業時間内の課題達成状況、レポートを用いて、段階別達成度を評価し、自己評価・相互評価を踏まえて総合的に評価する。				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B）</p> <p>インクルーシブ教育の理念を理解している。様々な特性の子どもがともに学ぶための学級運営や授業方法の必要性について示すことができ、それを具体的に示す重要性を理解している。</p>
S	インクルーシブ教育の理念を適切に理解している。様々な特性の子どもがともに学ぶための学級運営や授業方法について具体的に示すことができる。
A	インクルーシブ教育の理念を適切に理解している。様々な特性の子どもがともに学ぶための学級運営や授業方法について一部具体的に示すことができる。
B	インクルーシブ教育の理念を理解している。様々な特性の子どもがともに学ぶための学級運営や授業方法の必要性について示すことができ、それを具体的に示す重要性を理解している。
C	インクルーシブ教育の理念を理解している。様々な特性の子どもがともに学ぶための学級運営や授業方法の必要性について示すことができるだけである。
D	インクルーシブ教育の理念を理解できず、様々な特性の子どもがともに学ぶための学級運営や授業方法について考える事ができない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	<p>【予習】 毎回の授業前に、前回授業時まで配付する資料をもとに、授業のテーマについて調べておく（45分）</p> <p>【復習】 毎回の授業後には、要点の整理を行い、自分の考えを深める（45分）</p>

専門高度化探究科目（特別支援・子ども支援科目）

授業科目名	特別支援教育コーディネーター概論			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（IT・オムニバス）	単位数	2単位
担当教員名	◎菅井裕行・三科聡子・松崎丈				
授業の目的	特別支援教育コーディネーターの役割と意義について学ぶ。				
授業の概要	小学校や中学校，高等学校ならびに特別支援学校における特別支援教育コーディネーターの役割、その活動に必要とされる資質・能力の基礎を身につけるための研修、実践のあり方についての理解を促す。受講者の現任校等の実際の事例を検討するとともに、各種資料も含めたさまざまなケースを取り上げ、コーディネーター業務に直結する具体的・実際的内容の理解を深める。				
学習の到達目標	①対象児童生徒の実態、学級担任や保護者の相談内容・希望など踏まえつつ、学校や地域関係機関等の実情を考慮し、児童生徒の望ましい教育支援・指導にむけた各種調整と相談・支援の具体的内容を策定・実施できる。 ②特別支援教育にかかわる学校内の研修・研究体制の調整と内容の策定・実施ができる。				
授業の内容	1	オリエンテーション・特別支援教育の推進と特別支援教育コーディネーター			
	2	特別支援教育コーディネーターの役割の概要			
	3	小・中・高等学校等における特別支援教育コーディネーターの役割とその実際（菅井ほか）			
	4	小・中・高等学校等における特別支援教育コーディネーターに関する事例的検討（1）（アセスメントとケース会議の持ち方について）（菅井ほか）			
	5	小・中・高等学校等における特別支援教育コーディネーターに関する事例的検討（2）（他機関との連携について）（菅井ほか）			
	6	特別支援学校における特別支援教育コーディネーターの役割とその実際（三科ほか）			
	7	特別支援学校における特別支援教育コーディネーターに関する事例的検討（1）（アセスメントとケース会議の持ち方について）（菅井ほか）			
	8	特別支援学校における特別支援教育コーディネーターに関する事例的検討（2）（他機関との連携について）（菅井ほか）			
	9	特別支援教育コーディネーターと外部機関との連携に関するケーススタディ（1）（情報共有について）（菅井ほか）			
	10	特別支援教育コーディネーターと外部機関との連携に関するケーススタディ（2）（個別の教育支援計画について）（菅井ほか）			
	11	特別支援教育コーディネーターと学級担任等の相談・支援に関するケーススタディ（1）（直接支援・間接支援について）（菅井ほか）			
	12	特別支援教育コーディネーターと学級担任等の相談・支援に関するケーススタディ（2）（パートナーとしての保護者について）（三科ほか）			
	13	特別支援教育コーディネーターと学級担任等の相談・支援に関するケーススタディ（3）（校内連携について）（三科ほか）			
	14	特別支援教育コーディネーターと学級担任等の相談・支援に関するケーススタディ（4）（外部専門家の活用について）（松崎ほか）			
	15	特別支援教育コーディネーターを支える校内体制・管理職の役割（まとめ）			
教科書・参考書等	<教科書>履修者の関心に基づき、その都度提示する。 <参考書>授業の中で随時紹介していく。				
評価の観点・方法	【観点】対象児童生徒および特別支援教育の多面的な理解に基づく、コーディネーター業務の具体的内容を理解しているか。配慮や支援を必要とする児童生徒の基本的理解と保護者・担任等の相談内容を踏まえ、校内体制を調整する方法が身についているか。 【方法】授業時間内の課題達成状況、レポートを用いて、段階別達成度を評価し、自己評価・相互評価を踏まえて総合的に評価する。				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B）</p> <p>コーディネーター業務の具体的内容を理解し、配慮や支援を必要とする幼児児童生徒にかかわる種々の問題（本人・保護者・担任等）解決に向けて、組織としてどのように計画し、校内・外の資源を活用するかについて十分に理解し、得られた知見を整理した形で示すことができる。</p>
S	<p>コーディネーター業務の具体的内容を理解し、配慮や支援を必要とする幼児児童生徒にかかわる種々の問題（本人・保護者・担任等）解決に向けて、組織としてどのように計画し、校内・外の資源を活用するか、その方略を示すとともに、校内体制を調整する方法を明確に示すことができる。</p>
A	<p>コーディネーター業務の具体的内容を理解し、配慮や支援を必要とする幼児児童生徒にかかわる種々の問題（本人・保護者・担任等）解決に向けて、組織としてどのように計画し、校内・外の資源を活用するかについて得られた知見を、整理した形で示すとともに、具体的な実践の見通しを示すことができる。</p>
B	<p>コーディネーター業務の具体的内容を理解し、配慮や支援を必要とする幼児児童生徒にかかわる種々の問題（本人・保護者・担任等）解決に向けて、組織としてどのように計画し、校内・外の資源を活用するかについて十分に理解し、得られた知見を整理した形で示すことができる。</p>
C	<p>コーディネーター業務の具体的内容を理解し、配慮や支援を必要とする幼児児童生徒にかかわる種々の問題（本人・保護者・担任等）解決に向けて、組織としてどのように計画し、校内・外の資源を活用するかについて、得られた知見を示すことができる。</p>
D	<p>コーディネーター業務の具体的内容を理解し、配慮や支援を必要とする幼児児童生徒にかかわる種々の問題（本人・保護者・担任等）解決に向けて、組織としてどのように計画し、校内・外の資源を活用するかについて得られた知見を示すことができていない。</p>
講義時間外に必要な学修時間の目安	<p>【予習】 毎回の授業前に、前回授業時まで配布する資料をもとに、授業のテーマについて調べておく（45分）</p> <p>【復習】 毎回の授業後には、授業の際に用いた資料や教材により得られた知識や気づきを確認する。学んだことについてさらに調べ学習を行い、自分の考えを深める（45分）</p>

専門高度化探究科目（特別支援・子ども支援科目）

授業科目名	支援が必要な子どもと学校教育Ⅰ (知的障害・自閉症スペクトラム障害等)			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（オムニバス）	単位数	2単位
担当教員名	◎熊谷 亮・野崎義和				
授業の目的	知的障害・自閉症スペクトラム障害等の発達障害のある児童生徒の特性理解と支援の手立てについて学ぶ。				
授業の概要	小学校や中学校、高等学校ならびに特別支援学校における知的障害・自閉症スペクトラム障害等の発達障害のある児童生徒を指導・支援するための基盤となる資質・能力を高める。受講者の現任教や実習等の事例を基に検討するとともに、実態把握から具体的な指導・支援へとつなげる実践力を身につける。				
学習の到達目標	①知的障害・自閉症スペクトラム障害等の発達障害のある児童生徒の学習上・生活上の特徴や困難性を理解する。 ②児童生徒の障害の特性や実態を把握し、児童生徒の望ましい教育支援・指導の方法について具体的内容を策定・実施できる。				
授業の内容	1	オリエンテーション/発達障害総論（熊谷・野崎）			
	2	知的障害・自閉症スペクトラム障害等の理解（野崎）			
	3	知的障害・自閉症スペクトラム障害等の支援アプローチ（野崎）			
	4	心理・発達検査等を用いた実態把握の方法論(1)（理論的概説を中心に）（野崎）			
	5	心理・発達検査等を用いた実態把握の方法論(2)（実技・演習を中心に）（野崎）			
	6	心理・発達検査等を用いた実態把握の方法論(3)（事例検討を中心に）（野崎）			
	7	小・中学校における指導・支援の実際（1）（理論的概説を中心に）（熊谷）			
	8	小・中学校における指導・支援の実際（2）（実践・演習を中心に）（熊谷）			
	9	小・中学校における指導・支援の実際（3）（事例検討を中心に）（熊谷）			
	10	学校現場におけるケーススタディ（1）（UDの環境設定について）（熊谷・野崎）			
	11	学校現場におけるケーススタディ（2）（教材・教具の工夫について）（熊谷・野崎）			
	12	家族支援の役割と意義（1）（保護者と同胞の障害受容について）（熊谷・野崎）			
	13	家族支援の役割と意義（2）（保護者と同胞の心理的ケアについて）（熊谷・野崎）			
	14	二次的障害の理解と対応（1）（福祉・医療的な観点から）（熊谷）			
	15	二次的障害の理解と対応（2）（心理・教育的な観点から）（熊谷・野崎）			
教科書・参考書等	<教科書>履修者の関心に基づき、その都度提示する。 <参考書>授業の中で随時紹介していく。				
評価の観点・方法	【観点】対象児童生徒および特別支援教育の多面的な理解に基づく、知的障害・自閉症スペクトラム障害等の指導・支援にかかる具体的内容の理解状況により評価する。配慮や支援を必要とする児童生徒の基本的理解を踏まえ、実態把握および具体的な指導・支援の方法が身についているかどうかを判断基準とする。 【方法】授業時間内の課題達成状況、レポートを用いて、段階別達成度を評価し、自己評価・相互評価を踏まえて総合的に評価する。				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B）</p> <p>知的障害・自閉症スペクトラム障害等の特性を理解し、配慮や支援を必要とする幼児児童生徒にかかわる種々の問題（本人・学校・家庭等）解決に向けて、どのように実態把握を行い、指導・支援を組み立てるか、その方略を示すとともに、学級および個別の指導・支援の方法について十分に理解し、得られた知見を整理した形で示すことができる。</p>
S	<p>知的障害・自閉症スペクトラム障害等の特性を理解し、配慮や支援を必要とする幼児児童生徒にかかわる種々の問題（本人・学校・家庭等）解決に向けて、どのように実態把握を行い、指導・支援を組み立てるか、その方略を示すとともに、学級および個別の指導・支援の方法を明確に示すことができる。</p>
A	<p>知的障害・自閉症スペクトラム障害等の特性を理解し、配慮や支援を必要とする幼児児童生徒にかかわる種々の問題（本人・学校・家庭等）解決に向けて、どのように実態把握を行い、指導・支援を組み立てるか、その方略を示すとともに、学級および個別の指導・支援の方法を整理した形で示すとともに、具体的な実践の見通しを示すことができる。</p>
B	<p>知的障害・自閉症スペクトラム障害等の特性を理解し、配慮や支援を必要とする幼児児童生徒にかかわる種々の問題（本人・学校・家庭等）解決に向けて、どのように実態把握を行い、指導・支援を組み立てるか、その方略を示すとともに、学級および個別の指導・支援の方法について十分に理解し、得られた知見を整理した形で示すことができる。</p>
C	<p>知的障害・自閉症スペクトラム障害等の特性を理解し、配慮や支援を必要とする幼児児童生徒にかかわる種々の問題（本人・学校・家庭等）解決に向けて、どのように実態把握を行い、指導・支援を組み立てるか、その方略を示すとともに、学級および個別の指導・支援の方法について、得られた知見を示すことができる。</p>
D	<p>知的障害・自閉症スペクトラム障害等の特性を理解し、配慮や支援を必要とする幼児児童生徒にかかわる種々の問題（本人・学校・家庭等）解決に向けて、どのように実態把握を行い、指導・支援を組み立てるか、その方略を示すとともに、学級および個別の指導・支援の方法について得られた知見を示すことができていない。</p>
講義時間外に必要な学修時間の目安	<p>【予習】 毎回の授業前に、前回授業時まで配布する資料をもとに、授業のテーマについて調べておく（45分）</p> <p>【復習】 毎回の授業後には、授業の際に用いた資料や教材により得られた知識や気づきを確認する。学んだことについてさらに調べ学習を行い、自分の考えを深める（45分）</p>

専門高度化探究科目（特別支援・子ども支援科目）

授業科目名	支援が必要な子どもと学校教育Ⅱ (感覚障害・運動障害・身体疾患系)			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数(オムニバス)	単位数	2単位
担当教員名	◎永井伸幸・松崎丈・寺本淳志				
授業の目的	様々な学びの場在籍する障害のある子ども達の特性を理解し、その理解に基づいて適切な教育、支援のあり方について理解を深める。				
授業の概要	小学校・中学校・高等学校等の通常学級・特別支援学級・通級指導教室、特別支援学校における視覚障害、聴覚・言語障害、肢体不自由・病弱等のある児童生徒への教育的支援と、各学校等における取り組みの在り方について、具体的実践例を踏まえて理論的考察を行うとともに、教材作成・教材活用についてのケーススタディを行う。				
学習の到達目標	小学校・中学校・高等学校等の通常学級・特別支援学級・通級指導教室、特別支援学校における視覚障害、聴覚・言語障害、肢体不自由・病弱等の児童生徒の障害特性と教育的支援について理論的ならびに実践的に理解する。				
授業の内容	1	オリエンテーション・感覚障害・運動障害・身体疾患系の教育と学校制度(担当:永井・松崎・寺本)			
	2	特別支援学校(視覚障害)・特別支援学級・通級(弱視):障害特性と支援(担当:永井)			
	3	特別支援学校(視覚障害)・特別支援学級・通級(弱視):支援の概要と事例検討(幼児期から小学部期を中心に)(担当:永井)			
	4	特別支援学校(視覚障害)・特別支援学級・通級(弱視):支援の概要と事例検討(中学部期から高等部期を中心に)(担当:永井)			
	5	特別支援学校(視覚障害)・特別支援学級・通級(弱視):支援の概要と事例検討(進路指導・就労および自立支援を中心に)(担当:永井)			
	6	特別支援学校(聴覚障害)・特別支援学級・通級(難聴・言語障害):障害特性と支援(担当:松崎)			
	7	特別支援学校(聴覚障害)・特別支援学級・通級(難聴・言語障害):障害特性と支援:支援の概要と事例検討(幼児期から小学部期を中心に)(担当:松崎)			
	8	特別支援学校(聴覚障害)・特別支援学級・通級(難聴・言語障害):障害特性と支援:支援の概要と事例検討(中学部期から高等部期を中心に)(担当:松崎)			
	9	特別支援学校(聴覚障害)・特別支援学級・通級(難聴・言語障害):障害特性と支援:支援の概要と事例検討(進路指導・就労および自立支援を中心に)(担当:松崎)			
	10	特別支援学校(肢体不自由)・特別支援学級・通級(肢体不自由):障害特性と支援(担当:寺本)			
	11	特別支援学校(肢体不自由)・特別支援学級・通級(肢体不自由):支援の概要と事例検討(担当:寺本)			
	12	特別支援学校(病弱)・特別支援学級・通級(病弱・身体虚弱):障害特性と支援(担当:寺本)			
	13	特別支援学校(病弱)・特別支援学級・通級(病弱・身体虚弱):支援の概要と事例検討(担当:寺本)			
	14	感覚障害・運動障害・身体疾患系の教育と学習指導要領(担当:永井・松崎・寺本)			
	15	感覚障害・運動障害・身体疾患系支援学校等の交流及び共同学習,居住地校交流の実態と事例検討(担当:永井・松崎・寺本)			
教科書・参考書等	<教科書> ・受講生の関心に基づき、実践論文、研究論文を紹介する。 <参考書・参考資料等> ・宮城教育大学特別支援教育講座編(2019)特別支援教育への招待 [改訂版]. 教育出版.				
評価の観点・方法	【観点】各障害領域の子ども達の心理特性、教育の配慮点について理解しているか。教育支援事例の分析を通して具体的な支援方法について考えることができるか。【方法】業時間内の課題達成状況、レポートを用いて、段階別達成度を評価し、自己評価・相互評価を踏まえて総合的に評価する。				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B）</p> <p>様々な障害特性とそれに基づく配慮事項を指摘し、それに対応した教育的支援の方法を示すことができる。</p>
S	様々な障害特性とそれに基づく配慮事項を具体的に指摘し、それに対応した教育的支援の方法を具体的に示すことができる。
A	様々な障害特性とそれに基づく配慮事項を具体的に指摘し、それに対応した教育的支援の方法を示すことができる。
B	様々な障害特性とそれに基づく配慮事項を指摘し、それに対応した教育的支援の方法を示すことができる。
C	様々な障害特性とそれに基づく配慮事項の把握の必要性を指摘し、それに対応した教育的支援の必要性を示すことができる。
D	様々な障害特性とそれに基づく配慮事項の把握の必要性に気づけず、それに対応した教育的支援の必要性を示すことができない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	<p>【予習】 毎回の授業前に、前回授業時まで配付する資料をもとに、授業のテーマについて調べておく（45分）</p> <p>【復習】 毎回の授業後には、内容の整理を行い、自分の考えを深める（45分）</p>

専門高度化探究科目（特別支援・子ども支援科目）

授業科目名	不登校・学校不適應状況と学校教育		講義・演習
科目区分	選択必修	授業形態	複数（オムニバス）
単位数	2単位		
担当教員名	◎久保順也、樋口広思		
授業の目的	小学校・中学校・高等学校・特別支援学校等における不登校・学校不適應状況の実態を理解するとともに、関係専門諸機関・外部専門家との連携等についてケーススタディを通して理解する。		
授業の概要	小学校・中学校・高等学校・特別支援学校等における不登校・学校不適應状況についての具体的実践例を踏まえて理論的考察を行うとともに、各種専門機関との連携・協働等についてのケーススタディを行う。		
学習の到達目標	<p>①小学校・中学校・高等学校・特別支援学校等における不登校・学校不適應状況の実態を理解し、その解消・改善に必要な各種機関や外部専門家の活用に関する具体的内容を策定・実施できる。</p> <p>②小学校・中学校・高等学校・特別支援学校等における不登校・学校不適應状況の発生を予見し、それを回避する具体的方策を策定・実施できる。</p>		
授業の内容	1	オリエンテーション・不登校・学校不適應と特別支援教育（久保、樋口）	
	2	不登校・学校不適應の支援：対象児童生徒の実態と推移（久保）	
	3	不登校・学校不適應の支援：校内支援体制の整備と実態（久保）	
	4	不登校・学校不適應の支援：校内支援体制のケーススタディ（久保）	
	5	不登校・学校不適應の支援：学級担任等教員による対応・支援の実態（久保）	
	6	不登校・学校不適應の支援：学級担任等教員による対応・支援のケーススタディ（樋口）	
	7	不登校・学校不適應の支援：スクールカウンセラー等のチーム学校による対応（樋口）	
	8	不登校・学校不適應の支援：スクールカウンセラー等のチーム学校による対応のケーススタディ（樋口）	
	9	不登校・学校不適應の支援：発達障害等の各種障害群との関連（久保）	
	10	不登校・学校不適應の支援：幼少期の養育・教育環境との関連（久保）	
	11	不登校・学校不適應の支援：幼少期の養育・教育環境についてのケーススタディ（久保）	
	12	不登校・学校不適應の支援：引きこもり等社会生活上の不適應との関連（樋口）	
	13	不登校・学校不適應の支援：引きこもり等社会生活上の不適應についてのケーススタディ（樋口）	
	14	不登校・学校不適應の支援：外部相談機関との連携の実際（1）（発達障害事例）（久保）	
	15	不登校・学校不適應の支援：外部相談機関との連携の実際（2）（引きこもり事例）（樋口）	
教科書・参考書等	授業の中で随時紹介していく。		
評価の観点・方法	<p>①小学校・中学校・高等学校・特別支援学校等における不登校・学校不適應状況の実態を理解し、その解消・改善に必要な各種機関や外部専門家の活用に関する具体的内容を策定・実施できるか。</p> <p>②小学校・中学校・高等学校・特別支援学校等における不登校・学校不適應状況の発生を予見し、それを回避する具体的方策を策定・実施できるか。</p> <p>上記について、授業時間内の課題達成状況やレポート内容を用いて、段階別達成度を評価する。</p>		

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B）</p> <p>小学校・中学校・高等学校・特別支援学校等における不登校・学校不適應状況の実態を理解し、その解消・改善に必要な各種機関や外部専門家の活用に関する具体的内容を理解している。かつ、不登校・学校不適應状況の発生を予見し、それを回避する具体的方策をある程度示すことができる。</p>
S	<p>小学校・中学校・高等学校・特別支援学校等における不登校・学校不適應状況の実態を理解し、その解消・改善に必要な各種機関や外部専門家の活用に関する具体的内容を明確に示すことができる。かつ、不登校・学校不適應状況の発生を予見し、それを回避する具体的方策を明確に示すことができる。</p>
A	<p>小学校・中学校・高等学校・特別支援学校等における不登校・学校不適應状況の実態を理解し、その解消・改善に必要な各種機関や外部専門家の活用に関する具体的内容を示すことができる。かつ、不登校・学校不適應状況の発生を予見し、それを回避する具体的方策を示すことができる。</p>
B	<p>小学校・中学校・高等学校・特別支援学校等における不登校・学校不適應状況の実態を理解し、その解消・改善に必要な各種機関や外部専門家の活用に関する具体的内容を理解している。かつ、不登校・学校不適應状況の発生を予見し、それを回避する具体的方策をある程度示すことができる。</p>
C	<p>小学校・中学校・高等学校・特別支援学校等における不登校・学校不適應状況の実態を理解し、その解消・改善に必要な各種機関や外部専門家の活用に関する具体的内容を理解している。かつ、不登校・学校不適應状況の発生を予見し、それを回避する具体的方策を理解している。</p>
D	<p>小学校・中学校・高等学校・特別支援学校等における不登校・学校不適應状況の実態、その解消・改善に必要な各種機関や外部専門家の活用に関する具体的内容を理解しておらず、また不登校・学校不適應状況の発生を予見し、それを回避する具体的方策を理解していない。</p>
講義時間外に必要な学修時間の目安	<p>【予習】 毎回の授業前に、前回授業時に紹介した参考資料等を読んでおく（45分）</p> <p>【復習】 毎回の授業後は、授業の際に用いた資料や教材により得られた知識や気づきを確認する。学んだことについてさらに調べ学習を行い、自分の考えを深める（45分）</p>

専門高度化探究科目（特別支援・子ども支援科目）

授業科目名	子どもをめぐる社会的諸問題と福祉			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（オムニバス）	単位数	2単位
担当教員名	◎久保順也・三科聡子・松崎丈・川上芳夫				
授業の目的	子どもたちが直面しているさまざまな社会的諸問題の実態を理解するとともに、福祉関係・保健関係等の専門諸機関との連携の必要性と具体的な対応等について、ケーススタディを通して理解する。				
授業の概要	学校内に限定することなく、家庭や地域さらには広く社会において子どもたちが直面している社会的諸問題の実態を分析するとともに、各種専門機関の役割と福祉的施策を含めた対応等についてのケーススタディを行う。				
学習の到達目標	<p>①子どもが育つ家庭・社会環境の現状を理解し、その中で生じる諸問題の実態を理解することができる。</p> <p>②子どもの成長にかかわる学校を含む行政・社会的諸機関の役割と、その連携の重要性を理解し、現実の課題に対応するための具体的な方法を考案・実施ができる資質を養うことができる。</p>				
授業の内容	1	オリエンテーション・社会的視点から見た特別支援教育（三科）			
	2	子どもをめぐる社会的諸問題の実態（三科）			
	3	家庭環境・地域環境と子どもの成長・発達（三科）			
	4	社会環境と子どもの成長・発達（三科）			
	5	障害のある子どもの早期発見（気づき）と早期支援（松崎）			
	6	障害のある子どもの早期発見をめぐる医療と倫理（松崎）			
	7	障害者の保護者に対する支援（松崎）			
	8	障害者のきょうだい・ヤングケアラーに対する支援（松崎）			
	9	スクールソーシャルワークの実際について（川上）			
	10	子ども・若者の貧困とひとり親家庭への福祉施策について（川上）			
	11	ヤングケアラーの支援について（川上）			
	12	被虐待とその支援：実態とその推移（久保）			
	13	子どもの非行と自立支援：実態とその推移（久保）			
	14	子どもの非行と自立支援：政策動向と各種行政機関等における支援（久保）			
	15	子どもの非行と自立支援：機関間連携についてのケーススタディ（久保）			
教科書・参考書等	<p><教科書>履修者の関心に基づき、その都度提示する。</p> <p><参考書>授業の中で随時紹介をする。</p>				
評価の観点・方法	<p>【観点】子どもをめぐる様々な社会的な問題に関する知見を持ち、ケーススタディを通して、社会的諸機関との実際的な連携に関する理解状況により評価をする。</p> <p>【方法】授業時間内のディスカッションや課題達成状況、担当教員が担当分終了ごとに課す評価課題等により、総合的に評価を行う。</p>				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B）</p> <p>子どもをめぐる社会的な問題の実態を知り、社会的諸機関との連携を踏まえながら、個々のケーススタディから課題を見出し、具体的な対応及び支援の見通しを整理することができる。</p>
S	子どもをめぐる社会的な問題の実態を理解し、社会的諸機関との連携を踏まえ、個々のケーススタディを通して得られた知見をもとにしながら、具体的・多角的な対応及び支援を考案する方法を明確に示すことができる。
A	子どもをめぐる社会的な問題の実態を理解し、社会的諸機関との連携を踏まえながら、個々のケーススタディを通して得られた知見をもとに、具体的な対応及び支援の見通しを示すことができる。
B	子どもをめぐる社会的な問題の実態を知り、社会的諸機関との連携を踏まえながら、個々のケーススタディから課題を見出し、具体的な対応及び支援の見通しを整理することができる。
C	子どもをめぐる社会的な問題の実態を知り、社会的諸機関との連携を踏まえながら、個々のケーススタディでの課題を見出し、具体的な対応及び支援の方法の必要性を示すことができる。
D	子どもをめぐる社会的な問題の実態を知り、社会的諸機関との連携を踏まえながら、個々のケーススタディでの課題を見出したうえで、具体的な対応及び支援の方法を必要性を示すことができない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	<p>【予習】毎回の授業前に、前回授業時まで配布する資料等をもとに、授業のテーマについて調べておく（45分）</p> <p>【復習】毎回の授業後には、授業の際に用いた資料や教材により得られた知識や気づきを確認することによって、自分の考えを深める（45分）</p>

専門高度化探究科目（特別支援・子ども支援科目）

授業科目名	特別支援教育とICT			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（オムニバス）	単位数	2単位
担当教員名	◎寺本淳志・永井伸幸・松崎丈				
授業の目的	学校現場における配慮や支援を必要とする児童生徒の示す様々な「つまずき」や「困難」などの適切な対応に有効とされるICTを活用した具体的な指導法、支援内容等に関して理解する。				
授業の概要	配慮を必要とする児童生徒に対する指導・支援における各種ICTの活用状況についての具体的実践例を踏まえて理論的考察を行うとともに、ICT機器の実践的活用、アプリケーション等の教材作成と、添えを用いた教材活用法についてのケーススタディを行う。				
学習の到達目標	①対象児童生徒の実態、学校や地域関係機関等の実情を考慮し、ICTデバイス・アプリを活用した教育支援・指導法を考案・実施できる。②ICT活用にかかわる学校内の研修・研究体制の調整と内容の策定・実施ができる。				
授業の内容	1	オリエンテーション・学校教育とICTの活用（全員）			
	2	知的障害・肢体不自由・病弱への教育支援とICT（1）：ICT活用の意義と実態（寺本）			
	3	知的障害・肢体不自由・病弱への教育支援とICT（2）：指導事例の検討（寺本）			
	4	知的障害・肢体不自由・病弱への教育支援とICT（3）：デバイス・アプリの活用実習1（寺本）			
	5	知的障害・肢体不自由・病弱への教育支援とICT（4）：デバイス・アプリの活用実習2（寺本）			
	6	視覚障害・発達障害への教育支援とICT（1）：ICT活用の意義と実態（永井）			
	7	視覚障害・発達障害への教育支援とICT（2）：指導事例の検討（永井）			
	8	視覚障害・発達障害への教育支援とICT（3）：デバイス・アプリの活用実習1（永井）			
	9	視覚障害・発達障害への教育支援とICT（4）：デバイス・アプリの活用実習2（永井）			
	10	特別支援教育における情報活用能力の育成（永井）			
	11	聴覚障害への教育支援とICT（1）：ICT活用の意義と実態（松崎）			
	12	聴覚障害への教育支援とICT（2）：指導事例の検討（松崎）			
	13	聴覚障害への教育支援とICT（3）：デバイス・アプリの活用実習1（松崎）			
	14	聴覚障害への教育支援とICT（4）：デバイス・アプリの活用実習2（松崎）			
	15	まとめ：学校教育とICTの活用（全員）			
教科書・参考書等	<教科書> ・その時の最新のICT実践文献を紹介する。 <参考書・参考資料等> ・発達障害のある子供たちのためのICT活用ハンドブック（特別支援学級編、通級指導教室編、通常の学級編） https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/1408030.htm				
評価の観点・方法	【観点】ICT活用の利点、ICT機器を選定する上での注意事項を理解しているか。事例の特性に基づいてICT活用のプランを想定することができているか。実際にICT活用環境を設定することができるか。 【方法】授業時間内の課題達成状況、レポートを用いて、段階別達成度を評価し、自己評価・相互評価を踏まえて総合的に評価する。				

成績評価	
標準的な到達水準	・基準（評価B） 事例のニーズに気づき、適切なICT機器の選定ができるとともに、ICT活用環境を想定することができる。
S	事例のニーズを見抜き、適切なICT機器の選定ができるとともに、ICT活用環境を実際に設定することができる。
A	事例のニーズを見抜き、適切なICT機器の選定ができるとともに、ICT活用環境を想定しおおむね実際に設定することができる。
B	事例のニーズに気づき、適切なICT機器の選定ができるとともに、ICT活用環境を想定することができる。
C	事例のニーズにおおむね気づき、適切なICT機器の選定根拠を示すことができるとともに、ICT活用環境をおおむね想定することができる。
D	事例のニーズに気づくことができず、適切なICT機器の選定やICT活用環境の想定ができない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	【予習】 毎回の授業前に、前回授業時までに配布する資料をもとに、授業のテーマについて調べておく（45分） 【復習】 毎回の授業後には、具体的なICT機器の操作などに取り組み、自分の考えを深める（45分）

専門高度化探究科目（学校課題解決マネジメント科目）

授業科目名	地域協働フィールドワーク論			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	◎三谷高史、齊藤千映美、溝田浩二				
授業の目的	地域における多様な教育資源を活用し、課題解決や探究のプロセスを通して子どもを育むための方策を学び、学校現場における学習指導に生かす。				
授業の概要	社会教育活動・自然体験活動・地域活動など、多様な活動の観察や専門機関・関係者の聞き取り調査を含めたフィールドワークを核に授業を展開する。地域と学校のネットワークを通しての人間形成を担い、教師として「社会に開かれた教育課程」を実現できる力の育成をめざす。				
学習の到達目標	フィールドワークを通して効果的に情報収集をおこなうとともに、地域における多様な教育資源を活用した学習を構想することができる。				
授業の内容	1	ガイダンス（全員）			
	2	学校と地域社会の関係史（三谷）			
	3	フィールドワークとは何か（三谷）			
	4	学校外の学びに関するフィールドワーク（三谷）			
	5	地域の教育機関に関するフィールドワーク（三谷）			
	6	地域野外活動の意義と役割（齊藤）			
	7	地域自然体験の場としてのフィールドミュージアム（齊藤）			
	8	地域の自然体験学習に関するフィールドワーク（齊藤）			
	9	地域自然体験学習に関する振り返り（齊藤）			
	10	校庭の教育資源を活用した体験学習（溝田）			
	11	学校ビオトープにおけるフィールドワーク（溝田）			
	12	地域の在来知をつなぐ（溝田）			
	13	地域の在来知に関するフィールドワーク（溝田）			
	14	指導構想の発表と検討（全員）			
	15	まとめ（全員）			
教科書・参考書等	参考書：文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説・総則編』『同（中学校）』 参考書：佐藤郁哉『フィールドワーク増補版：書を持って街へ出よう』新曜社、2006. その他、授業の中で紹介する。				
評価の観点・方法	【観点】①フィールドワークを通して効果的な情報収集ができていないか。②フィールドワークで学んだ成果を学習指導の構想に生かすことができていないか。 【方法】フィールドワークに関する小レポート、学習指導計画に関するレポートと発表を総合的に評価する。				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B）</p> <p>フィールドワークを通して効果的に情報を収集し、その成果を生かした学習指導を構想することができる。</p>
S	フィールドワークを通して効果的に情報を収集し、その体験から深く学ぶとともに、その成果を生かした先進的な学習指導を構想することができる。
A	フィールドワークを通して効果的に情報を収集し、その体験から深く学ぶとともに、その成果を生かした学習指導を構想することができる。
B	フィールドワークを通して効果的に情報を収集し、その成果を生かした学習指導を構想することができる。
C	フィールドワークを通して情報を収集し、その成果を生かした学習指導を構想することができる。
D	フィールドワークにおける情報収集が不十分であり、その成果を学習指導に生かすことができない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	120分

専門高度化探究科目（学校課題解決マネジメント科目）

授業科目名	リーガルマインドによる学校づくり		講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（TT）	単位数 2単位
担当教員名	◎齋藤百合、本図愛実、佐々木孝徳、宮澤孝子、前田正、笹村恵司			
授業の目的	リーガルマインドに基づく学校経営の在り方について、具体的な事例とともに考察する。			
授業の概要	教育法の体系の下に学校教育活動がどのように展開されるべきか、教員の職務や服務、学校事故等への対応、コンプライアンス等のテーマについて判例となった事例の分析も交え、具体的な事例を用いながら検討する。いじめ防止対策推進法についても取り上げる。リーガルマインドに基づく学校づくりを各学校においてどのように実現していくか課題の克服について討議する。クラスルーム:osfhw3r			
学習の到達目標	教育に関わる法令・判例について基礎的な知識を習得し、それらを用いた、より適切な教育活動を展開していく方法について考察できる。			
授業の内容	1	教育法の体系と学校（本図）		
	2	法的根拠と運用上の留意点（学校安全）（本図・佐々木・齋藤）		
	3	法的根拠と運用上の留意点（保護者対応）（本図・佐々木・齋藤）		
	4	法的根拠と運用上の留意点（いじめ未然防止）（本図・佐々木・齋藤）		
	5	法的根拠と運用上の留意点（危機管理）（本図・佐々木・齋藤）		
	6	教育課程管理（前田）		
	7	教員の職務とコンプライアンス（笹村）		
	8	学校事故等の法令・判例分析（災害・危機管理）（笹村）		
	9	学校事故等の法令・判例分析（いじめ・不登校）（笹村）		
	10	学校事故等の法令・判例分析（ハラスメント）（笹村）		
	11	人事管理（前田）		
	12	子供の権利と学習権の保障（宮澤）		
	13	教師のための教育条件整備（宮澤）		
	14	学校管理規則の運用（本図・佐々木・齋藤）		
	15	リーガルマインドの実現にむけて（本図・佐々木・宮澤・齋藤）		
教科書・参考書等	教科書：宮城教育大学教職大学院(2015)「ますます信頼される教員に スクールコンプライアンスについて学ぼう」(全34頁)、(2016)「ますます信頼される教員に シリーズ2 学校危機管理について学ぼう」(全46頁)（大学ホームページにPDF版掲載） 参考書：宮城県（2022）『宮城県 必携教育関係法規』（第一法規）			
評価の観点・方法	【観点】①教育に関わる法令・判例について基礎的な知識を習得している。②それらを用いた、より適切な教育活動を展開していく方法について考察できる。 【方法】小レポート（50%）、最終レポート（50%）			

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・ 基準（評価B）</p> <p>教育に関わる法令・判例について基礎的な知識を習得し、それらを用いた、より適切な教育活動を展開していく方法について考察できる。</p>
S	教育に関わる法令・判例について十分な知識を習得し、それらを用いた、より適切な教育活動を展開していく方法について考察し学校への適用に発展させている。
A	教育に関わる法令・判例について十分な知識を習得し、それらを用いた、より適切な教育活動を展開していく方法について考察できる。
B	教育に関わる法令・判例について基礎的な知識を習得し、それらを用いた、より適切な教育活動を展開していく方法について考察できる。□
C	教育に関わる法令・判例について基礎的な知識を習得している。
D	教育に関わる法令・判例について、知識の習得が不十分である。
講義時間外に必要な学修時間の目安	120分

専門高度化探究科目（学校課題解決マネジメント科目）

授業科目名	学校安全と防災教育			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	◎本図愛実、市瀬智紀、小田隆史、齋藤百合、佐々木孝徳、菅原敏、林田由那、原新太郎				
授業の目的	学校安全や防災教育についての知見を広げ、各校の学校安全計画および学校安全マニュアルを見直しを通して、学校における防災教育・安全管理の指導力と専門性の向上を目指す。				
授業の概要	地域の災害履歴の調査等を通じて、学校と地域の防災のあり方について省察する。地域防災や安全管理の先進事例や専門機関の取組を、学校安全マニュアル等の見直しに活かし、PDCAに基づく学校と地域が協働する学校防災について考察する。 クラスルーム：yabwrs5				
学習の到達目標	災害を多面的に捉え、安全教育計画と学校安全マニュアルを見直し、提案することができる。				
授業の内容	第1回：ガイダンス（齋藤百）				
	第2回：災害安全の基礎理解（小田）				
	第3回：学校防災を巡る近年の動き（小田）				
	第4回：第3次学校安全の推進に関する計画（小田）				
	第5回：地域の災害リスク検討ワークショップ（小田）				
	第6回：特別支援教育における防災教育（市瀬 GS）				
	第7回：学校安全計画・マニュアルのはざま（本図） 特別支援の視点からの学校安全（原）				
	第8回：気象変動・気象防災（菅原敏）				
	第9回：地域とともに行う防災（林田）				
	第10回：避難訓練 防災グッズ（林田）				
	第11回：様々な体験型防災アプリケーション 防災研修の持ち方（佐々木 齋藤）				
	第12回：防災研修の実際 災害対応シュミレーション・展開（佐々木 齋藤）				
	第13回：災害対応シュミレーション・振り返り（佐々木 齋藤）				
	第14回：まとめ① 勤務校の安全教育計画とマニュアルの見直し（本図）				
	第15回：まとめ② 勤務校の安全教育計画とマニュアル見直しの共有（本図）				
教科書・参考書等	小田隆史（監修）佐々木克敬（編集）『学校安全ポケット必携』2023 東京法令出版				
評価の観点・方法	【観点】学校の立地及び周辺環境からハザードを捉え、それを組織の安全管理に反映するための情報収集の方法、専門家との連携の事例や課題を理解しているか。学校安全に関する計画、実施、評価について経験したことを自らの知見として整理し、安全管理及び防災学習指導等の計画を立てる基礎とすることができているか。 【方法】授業時間内の課題達成状況、レポートを用いて、段階別達成度を評価し、自己評価・相互評価を踏まえて総合的に評価する。				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B）</p> <p>学校における安全管理と防災教育の現状を理解し、地域や学校の諸課題の解決に向けて、組織として安全教育計画、学校安全マニュアルの見直しを実施する。</p>
S	<p>学校における安全管理と防災教育の現状を理解し、地域や学校の諸課題の解決に向けて、組織として安全教育計画、学校安全マニュアルの見直しを実施し、評価についても検討する。さらに、実践を行う見通しを明確に示すことができる。</p>
A	<p>学校における安全管理と防災教育の現状を理解し、地域や学校の諸課題の解決に向けて、組織として安全教育計画、学校安全マニュアルの見直しを実施し、評価についても検討する。</p>
B	<p>学校における安全管理と防災教育の現状を理解し、地域や学校の諸課題の解決に向けて、組織として安全教育計画、学校安全マニュアルの見直しを実施する。</p>
C	<p>学校における安全管理と防災教育の現状を一定程度理解し、地域や学校の諸課題の解決に向けて、安全教育計画、学校安全マニュアルの見直しを実施する。</p>
D	<p>学校における安全管理と防災教育の現状の理解が十分ではなく、地域や学校の諸課題の解決に向けて、安全教育計画、学校安全マニュアルの見直しができている。</p>
準備学修の内容と必要な学修時間（目安）	<p>【復習】</p> <p>毎回の授業後には、授業の際に用いた資料や教材により得られた知識や気づきを確認する。学んだことについてさらに調べ学習を行い、自分の考えを深める（60分）</p>

専門高度化探究科目（学校課題解決マネジメント科目）

授業科目名	情報リテラシーとICT			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	◎平真木夫・菅原弘一・岡本恭介				
授業の目的	教育の情報化に関する基礎的な知識と実践				
授業の概要	情報化が進展している今日的な社会状況の中で、自らの目的にふさわしい情報を適切に選択し、発信できる力を子どもに育成するとともに、ICTを効果的に活用してカリキュラム、授業実践、学校運営等を効率的に行っていくことのできる知見と方法を学ぶ。				
学習の到達目標	教育の情報化に関する手引きの内容を踏まえた授業設計と模擬授業を通じた実践力を習得することができる。教育DXの実態を理解し、実践に繋げることができる。				
授業の内容	1	オリエンテーション、教育DXとは（担当：平）			
	2	教育的効果を図る尺度の理解とICT1：質問紙作成に必要な統計学（担当：平）			
	3	教育的効果を図る尺度の利用とICT2：心理学的尺度の実際（担当：平）			
	4	教育的効果を図る尺度の理解とICT3：重回帰分析（担当：平）			
	5	教育的効果を図る尺度の理解とICT4：テキストマイニング（担当：平）			
	6	教育の情報化を踏まえた授業設計1：授業設計の理論（担当：岡本）			
	7	教育の情報化を踏まえた授業設計2：情報システムの利用（担当：岡本）			
	8	教育の情報化を踏まえた授業設計3：プログラミングの基礎（担当：岡本）			
	9	教育の情報化を踏まえた授業設計4：プログラミングの活用（担当：岡本）			
	10	教育の情報化を踏まえた授業設計5：応用課題（担当：岡本）			
	11	教育の情報化に関する手引きと教科・校務でのICT活用（担当：菅原）			
	12	情報活用能力の育成と組織的なカリキュラム・マネジメント（担当：菅原）			
	13	情報活用能力の育成を意図した模擬授業開発1：国語と社会科（担当：菅原）			
	14	情報活用能力の育成を意図した模擬授業開発2：算数・数学と理科（担当：菅原）			
	15	情報活用能力の育成を意図した模擬授業開発3：外国語・英語と体育（担当：菅原）			
教科書・参考書等	日経BP「基礎から学ぶICTリテラシー」（仮称）ISBN978-4-296-10557-1、文部科学省「教育の情報化に関する手引」（令和元年12月） https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/mext_00117.html				
評価の観点・方法	担当教員の評価を総合的に勘案し、本授業の成績の評価を行う。 菅原担当分：毎時間の実技演習の出来映え80%、グループディスカッションの内容20% 岡本担当分：毎時間の実技演習の出来映え80%、グループディスカッションの内容20% 平担当分：協同学習の内容60%、感想レポートの内容40% 信太担当分：模擬授業の指導案30%、授業の出来栄え70%				

成績評価	
標準的な到達水準	<ul style="list-style-type: none"> ・ 基準（評価B） ICTを活用した授業設計ができること
S	各自の研究テーマに合わせ、教科の特性を考慮してICTを活用した完成度の高い授業設計ができる。
A	ICTを活用した完成度の高い授業設計ができる。
B	ICTを活用した授業設計ができる。
C	ICTを利用できる。
D	ICTを利用できない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	120分

専門高度化探究科目（学校課題解決マネジメント科目）

授業科目名	グローバル教育課題の探究			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	◎市瀬智紀、高橋亜紀子、田端健人、佐藤哲也、原新太郎、本図愛実				
授業の目的	国際的な視点から教育課題を理論的に捉え直し、国内外の学校・教育活動・研修を観察し、課題解決に関わる手がかりを得る。これらを通し、各自の研究テーマに即した、グローバルな教育課題の解決にむけた見通しを立てることができるようになる。				
授業の概要	SDGsなど国際社会全体の持続可能な到達目標を見据え、日本の学校教育を検討する。公正の普遍的価値を理解し、インクルーシブ教育、グローバルシチズンシップ、外国籍の児童生徒を含む指導、資質能力の理解、オルタナティブ教育、社会的経済的階層、幼年期の教育方法の多様性と可能性といった視点などを踏まえ、フィールドワークを行い、批判的検討を加え、課題解決の方策を検討する。クラスルーム：gymxvab				
学習の到達目標	①学校教育を国際的な教育運動の視点からとらえられる。②国際的な議論の中で学力と非認知能力についてとらえなおすことができる。③グローバルな課題とローカルな課題を結びつけることができる。④それらの知見を幼年期から学齢期への教育実践に反映する方策について考えることができる。				
授業の内容	1	SDGsの推進からみた教育課題（市瀬）			
	2	教育課題の視点1 グローバルシチズンシップ（市瀬）			
	3	教育課題の視点2 学習の可視化に関する国際的な動き（田端）			
	4	教育課題の視点3 外国人児童生徒等への学習支援（高橋）			
	5	教育課題の視点4 特別な支援に対する組織的対応（原・本図）			
	6	教育課題の視点5 公正と社会的経済的階層（原、本図）			
	7	教育課題の視点6 就学前教育・保育の課題と展望（佐藤）			
	8	教育課題の視点6 幼児期から児童期への育ちと学びの連続性（佐藤）			
	9	視点1についてフィールドワーク（全員）			
	10	視点2についてフィールドワーク（全員）			
	11	視点3についてフィールドワーク（全員）			
	12	視点4についてフィールドワーク（全員）			
	13	視点5についてフィールドワーク（全員）			
	14	視点6についてフィールドワーク（全員）			
	15	まとめ（全員）			
教科書・参考書等	公益社団法人日本語教育学会（2020）『外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修のための「モデルプログラム」ガイドブック』 ジョン・ハッティ（2022）『スクールリーダーのための教育効果を高めるマインドフレーム』（北大路書房）				
評価の観点・方法	【観点】①学校教育におけるグローバルな課題とローカルな課題を結びつけることができるか、②それらをいかに実現していくべきか考察できるか。 【方法】各回に課す小レポート（50%）、最終レポート（50%）				

成績評価	
標準的な到達水準	<ul style="list-style-type: none"> ・ 基準（評価B） <p>学校教育におけるグローバルな課題とローカルな課題を結びつけることができ、それをいかに実現していくべきかについて、十分に理解できている。</p>
S	学校教育におけるグローバルな課題とローカルな課題を結びつけることができ、各自の研究テーマに即して、グローバルな教育課題の解決にむけた具体的な研究を行っている。
A	学校教育におけるグローバルな課題とローカルな課題を結びつけることができ、各自の研究テーマに即して、グローバルな教育課題の解決にむけた見通しを立てることができている。
B	学校教育におけるグローバルな課題とローカルな課題を結びつけることができ、それをいかに実現していくべきかについて、十分に理解できている。
C	学校教育におけるグローバルな課題とローカルな課題を結びつけることができている。
D	学校教育におけるグローバルな課題とローカルな課題を結びつけることが不十分である。
講義時間外に必要な学修時間の目安	120分

専門高度化探究科目（学校課題解決マネジメント科目）

授業科目名	幼年期の教育と幼保小連携・接続			講義・演習	
科目区分	選択必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	佐藤哲也、◎飯島典子、越中康治、香曾我部琢				
授業の目的	就学前教育・保育（保育所、幼稚園、認定こども園）と小学校教育との連携・接続に関する理論的、実践的理解を図ると共に、実践展開に必要な職能を養っていく。				
授業の概要	就学前教育・保育（保育所、幼稚園、認定こども園）と小学校教育との連携と接続に関して理論と実践の双方から検討する。歴史的・社会的背景、国や都道府県・市町村の取り組み、学校園におけるアプローチカリキュラムやスタートカリキュラムの策定、実践展開と評価、今後の課題について多角的に考察を進めていく。				
学習の到達目標	幼保小連携連携・接続の理論と実践について理解するとともに、実践を構想・展開・評価するための職能を開発する。				
授業の内容	1	幼保小連携・接続の背景 1：幼児期の生活と育ちの社会・文化的課題（飯島）			
	2	幼保小連携・接続の背景 2：小1プロブレムと学力問題（香曾我部）			
	3	幼保小連携・接続の理論 1：幼年期の教育における生活と学びの連続性（飯島）			
	4	幼保小連携・接続の理論 2：幼児期から児童期への発達特性（越中）			
	5	幼保小連携・接続の理論 3：スタートカリキュラムの策定と評価（飯島）			
	6	幼保小連携・接続の理論 4：アプローチカリキュラムの策定と評価（飯島）			
	7	保小連携・接続の背景を探る 1：少子社会日本の現状（佐藤）			
	8	保小連携・接続の背景を探る 2：子どもの育ちをめぐる課題（1）（佐藤）			
	9	保小連携・接続の背景を探る 3：子どもの育ちをめぐる課題（2）（佐藤）			
	10	保小連携・接続の実践理論 1：子ども観と教育観の変容（佐藤）			
	11	保小連携・接続の実践理論 2：いわゆる“非認知能力”について（佐藤）			
	12	保小連携・接続の実践 1：仙台市の取り組み（佐藤）			
	13	保小連携・接続の実践 2：宮城県内での取り組み（佐藤）			
	14	保小連携・接続の実践 2：山形県内での取り組み（香曾我部）			
		15	まとめ（全員）		
教科書・参考書等	必要に応じてプリント等を配付する。				
評価の観点・方法	<p>【観点】①学校現場の現状に即して、幼保小連携・接続の現状と課題について理解し、課題解決に結び付く見通しと知見を示すことができるか。 ②保育・教育現場において、幼保小連携・接続プログラムやカリキュラムを作成する知見を得ることができたか。</p> <p>【方法】講義時に出題する課題および話し合い活動における取り組み状況を総合的に評価する。</p>				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B）</p> <p>幼小連携・接続に関するこれまでの成果や課題を理解して、今後実践を展開していくための視点や方法をめぐる問題意識を持っている。</p>
S	幼小連携・接続に関するこれまでの成果や課題を理解して、今後実践を展開していくための視点や方法を具体的に示すとともに、その成果を検証するための知見を得ている。
A	幼小連携・接続に関するこれまでの成果や課題を理解して、今後実践を展開していくための視点や方法を具体的に示すことができる。
B	幼小連携・接続に関するこれまでの成果や課題を理解して、今後実践を展開していくための視点や方法をめぐる問題意識を持っている。
C	幼小連携・接続に関するこれまでの成果や課題を理解している。
D	幼小連携・接続に関するこれまでの成果や課題についての理解が深まらず、実践を展開していくための方法論を示すことができない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	現職教員においては、自校園における保幼小連携・接続についての実践を収集・評価して授業で報告するための準備を要する（3時間）。ストレート・マスターにおいては、インターネット等を通じて幼保小接続期のカリキュラムや実践事例を収集してその成果と課題を考察する作業が求められる（3時間）。

専門高度化深化科目（学校における実習（臨床実践））

授業科目名	学校課題解決実習			実習	
科目区分	必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	全専任教員				
授業の目的	自ら立案・実施した教育実践の成果を分析し、各自の取り組む課題を明確にするとともに、教育的な意義や可能性について、他者との協働活動を通して考察する。さらに、現職教員学生は、ミドルスクールリーダー教員として、他の教員と組織的に研究を運営する力を身につける。				
授業の概要	自ら立案・実施した教育実践の成果を分析し、各自の取り組む課題を明確にし改善の取り組みを行う。実習校において優れた教育実践に学び、自らの実践の課題について省察し次年度の研究計画に繋げる。				
学習の到達目標	<p>（ストレートマスター）自ら立案・実施した教育実践の成果を分析し、対話を通じて各自の取り組む課題を明確にする探究力を身につける。</p> <p>（現職教員学生）これまでの自らの教育実践の成果と課題について、対話と分析・改善等を通じて探究を行うとともに、教師等との協働を活かして研究運営に取り組み、ミドルリーダー教員としての力量と自覚を高める。</p>				
授業の内容	<p>・教職大学院の教員が、現職教員学生の勤務校あるいは実習校担当教員と連携して指導を行う。</p> <p>（ストレートマスター）実習校において得られた知見や自らの実践等の省察を行い、課題を改善する試みや対話を通じて、新たな探究の課題とその解決のための研究方法を明確にする。</p> <p>（現職教員学生）自ら培ってきた教育実践の力量をふまえ、実習校における教師らとの対話等を通じて、自らの教育実践の課題を明確にする。さらに、教師らとの協働による研究への取り組みを通じて、教師の学びを支える組織のあり方を学び、その担い手となる準備をする（探究力を高める）。</p>				
教科書・参考書等	履修者の関心に基づき、その都度提示する。				
評価の観点と方法	<p>【観点】（ストレートマスター）①学校課題探究実習を通じて得られた知見を分析・解釈することができているか。②児童・生徒の実態に応じて、教育実践を計画・実践・分析・解釈・改善する手法を身に付けているか。③教師らとの対話や協働を通じて実践研究の質を深化させることができているか。</p> <p>（現職教員学生）①自分の研究テーマの方向性と妥当性を実践上の課題に応え得るかという観点から省察できているか。児童・生徒の実態に応じて研究を推進するより効果的な手法を、現場での学びから身に付けているか。②教師らとの対話や協働を通じて実践研究の質を高めることができているか。</p> <p>【方法】実習校担当教員に所見・意見を求めるとともに、シラバスに示された到達水準に基づき、実習記録、実習の成果や課題等に関するレポート等もふまえて総合的に評価する。</p>				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B：標準とされる到達度）</p> <p>自身の実践研究テーマの方向性と妥当性を、教育現場や児童・生徒の実態に応じて適切に分析し、教育実践の改善を効果的に推進する手法を身に付け、それを活用して研究を深化させることができる。</p>
S	自身の実践研究テーマの方向性と妥当性を、教育現場や児童・生徒の実態に応じて適切に分析し、教育実践の改善をより効果的に推進する手法を十分に身に付け、活用することができるうえ、その知見を教育現場で他の教師と共有し協同で研究に取り組むことを通じて後進の教師の力量形成を支援する準備ができています。
A	自身の実践研究テーマの方向性と妥当性を、教育現場や児童・生徒の実態に応じて適切に分析し、教育実践の改善をより効果的に推進する手法を十分に身に付け、それを活用して研究を深化させることができるうえ、その知見を教育現場で他の教師と共有し研究の質を高めていくことができる。
B	自身の実践研究テーマの方向性と妥当性を、教育現場や児童・生徒の実態に応じて適切に分析し、教育実践の改善を効果的に推進する手法を身に付け、それを活用して研究を深化させることができる。
C	自身の実践研究テーマの方向性と妥当性を、教育現場や児童・生徒の実態に応じて分析し、教育実践を改善する手法を身に付け、それを活用して研究を行うことができる。
D	自身の実践研究テーマの方向性と妥当性を、教育現場や児童・生徒の実態に応じて分析できず、教育実践を改善する手法を身に付け、それを活用して研究を行うことができていない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	毎回、事前・事後にそれぞれ90分

専門高度化深化科目（学校における実習（臨床実践））

授業科目名	学校課題解決実習（特別支援）			実習	
科目区分	必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	菅井裕行・植木田潤・永井伸幸				
授業の目的	自ら立案・実施した教育実践の成果を分析し、各自の取り組む課題を明確にするとともに、教育的な意義や可能性について、他者との協働活動を通して考察する。さらに、現職教員学生は、ミドルスクールリーダー教員として、他の教員と組織的に研究を運営する力を身につける。				
授業の概要	自ら立案・実施した教育実践の成果を分析し、各自の取り組む課題を明確にし改善の取り組みを行う。実習校において優れた教育実践に学び、自らの実践の課題について省察し次年度の研究計画に繋げる。				
学習の到達目標	<p>（ストレートマスター）自ら立案・実施した特別支援領域に関わる教育実践の成果を分析し、各自の取り組む課題を明確にする探究力を身につける。</p> <p>（現職教員学生）特別支援領域に関わる自らの教育実践についてこれまでの自らの教育実践の成果と課題について、対話と分析・改善等を通じて探究を行うとともに、教師等との協働を活かして研究運営に取り組み、ミドルリーダー教員としての力量と自覚を高める。</p>				
授業の内容	<p>・教職大学院の教員が、現職教員学生の勤務校あるいは実習校担当教員と連携して指導を行う。</p> <p>（ストレートマスター）実習校において得られた知見や自らの実践等の省察を行い、課題を改善する試みや対話を通じて、新たな探究の課題とその解決のための研究方法を明確にする。</p> <p>（現職教員学生）自ら培ってきた教育実践の力量をふまえ、実習校における教師らとの対話等を通じて、自らの教育実践の課題を明確にする。さらに、教師らとの協働による研究への取り組みを通じて、教師の学びを支える組織のあり方を学び、その担い手となる準備をする。</p>				
教科書・参考書等	<p><教科書> 履修者の関心に基づき、その都度提示する。</p> <p><参考書>適宜、紹介する。</p>				
評価の観点・方法	<p>【観点】（ストレートマスター）①学校課題探究実習を通じて得られた知見を分析・解釈することができるか。②児童・生徒の実態に応じて、教育実践を計画・実践・分析・解釈・改善する手法を身に付けているか。③教師らとの対話や協働を通じて実践研究の質を深化させることができるか。</p> <p>（現職教員学生）①自分の研究テーマの方向性と妥当性を実践上の課題に応え得るかという観点から省察できているか。児童・生徒の実態に応じて研究を推進するより効果的な手法を、現場での学びから身に付けているか。②教師らとの対話や協働を通じて実践研究の質を高めることができるか。</p> <p>【方法】実習校担当教員に所見・意見を求めるとともに、シラバスに示された到達水準に基づき、実習記録、実習の成果や課題等に関するレポート等もふまえて総合的に評価する。</p>				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B：標準とされる到達度）</p> <p>自身の実践研究テーマの方向性と妥当性を、教育現場や児童・生徒の実態に応じて適切に分析し、教育実践の改善を効果的に推進する手法を身に付け、それを活用して研究を深化させることができる。</p>
S	自身の実践研究テーマの方向性と妥当性を、教育現場や児童・生徒の実態に応じて適切に分析し、教育実践の改善をより効果的に推進する手法を十分に身に付け、活用することができるうえ、その知見を教育現場で他の教師と共有し協同で研究に取り組むことを通じて後進の教師の力量形成を支援する準備ができています。
A	自身の実践研究テーマの方向性と妥当性を、教育現場や児童・生徒の実態に応じて適切に分析し、教育実践の改善をより効果的に推進する手法を十分に身に付け、それを活用して研究を深化させることができるうえ、その知見を教育現場で他の教師と共有し研究の質を高めていくことができる。
B	自身の実践研究テーマの方向性と妥当性を、教育現場や児童・生徒の実態に応じて適切に分析し、教育実践の改善を効果的に推進する手法を身に付け、それを活用して研究を深化させることができる。
C	自身の実践研究テーマの方向性と妥当性を、教育現場や児童・生徒の実態に応じて分析し、教育実践を改善する手法を身に付け、それを活用して研究を行うことができる。
D	自身の実践研究テーマの方向性と妥当性を、教育現場や児童・生徒の実態に応じて分析できず、教育実践を改善する手法を身に付け、それを活用して研究を行うことができていない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	毎回、事前・事後にそれぞれ90分

専門高度化深化科目（学校における実習（臨床実践））

授業科目名	臨床教育開発実習			実習	
科目区分	必修	授業形態	複数（TT）	単位数	4単位
担当教員名	全専任教員				
授業の目的	これまでの「学校における実習」及び「理論系」・「融合系」科目で修得した内容等と関連づけながら、自ら立案・実施した教育実践の分析を通して得られた知見と課題に基づき、学校・地域の教育課題を視野に入れた教育実践をデザインし、指導力を深化させる。さらに、現職教員学生は、ミドルスクールリーダー教員として、他の教員との協働による学校・地域の「臨床」に即した実践と研究を進める資質・能力を身に付ける。				
授業の概要	自ら立案・実施した教育実践の分析を通して得られた知見と課題に基づき、学校・地域の教育課題を視野に入れた教育実践をデザインし、指導力を深化させる。「臨床教育総合演習A・B」と連動しながら、大学と勤務校あるいは実習校とを往還することで、教科専門、教科教育専門、教職専門、実務家教員のチーム・ティーチングを通じた学修により、学校・地域の「臨床」に即した実践と研究を進める。				
学習の到達目標	<p>（ストレートマスター）教育実践力をさらに高めるとともに、学校・地域の教育課題解決のために必要な教材研究・授業・指導支援等の研究開発力を身につける。</p> <p>（現職教員学生）自らの教育実践の分析を通して得られた知見と課題に基づき、学校・地域の教育課題解決のための研究開発力を高める。</p>				
授業の内容	<p>・教職大学院の教員が、現職教員学生の勤務校あるいは実習校担当教員と連携して指導を行う。</p> <p>臨床教育総合演習A・Bと連動しながら、大学と実習校（あるいは勤務校）を往還し、教科専門、教科教育専門、教職専門、実務家教員のチーム・ティーチングを通じた学修により、学校・地域の「臨床」に根ざした実践と研究に取り組む。</p>				
教科書・参考書等	履修者の関心に基づき、その都度提示する。				
評価の観点・方法	<p>【観点】①自分の教育課題に関するこれまでの成果を現場の実態に即して十分に検証できているか。②学校の教育課題との関連を意識したうえで、自ら指導支援計画や解決策を企画・立案し、提案することができるか。③自ら企画・立案した計画や解決策に関する成果を学校や地域に還元する手法を実現できているか。</p> <p>【方法】実習校担当教員に所見・意見を求めるとともに、シラバスに示された到達水準に基づき、実習記録、実習の成果や課題等に関するレポート等もふまえて総合的に評価する。</p>				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B：標準とされる到達度）</p> <p>自分の実践研究テーマに関するこれまでの成果を教育現場の実態に即して検証した結果をもとに、教育課題解決の方法を入念に企画・立案し、適切な根拠を持って示すことができる。</p>
S	自分の実践研究テーマに関するこれまでの成果を教育現場の実態に即して検証した結果を適切に示すことができ、それをもとにした教育課題解決のための方法を入念に企画・立案し、その概要を、学校や地域において具体的に実現するプロセスと合わせて、適切な根拠とともに示すことができる。
A	自分の実践研究テーマに関するこれまでの成果を教育現場の実態に即して検証した結果を適切に示すことができ、それをもとにした教育課題解決のための計画を入念に企画・立案し、その概要を学校や地域への外部公開も意識しながら適切な根拠を持って示すことができる。
B	自分の実践研究テーマに関するこれまでの成果を教育現場の実態に即して検証した結果をもとに、教育課題解決のための計画を入念に企画・立案し、適切な根拠を持って示すことができる。
C	自分の実践研究テーマに関するこれまでの成果を教育現場の実態に即して検証した結果をもとに、教育課題解決の方法を企画・立案しその概要を示すことができる。
D	自分の実践研究テーマに関するこれまでの成果を教育現場の実態に即して検証した結果を示せず、教育課題解決の方法を企画・立案するに至っていない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	毎回、事前・事後にそれぞれ90分。

専門高度化深化科目（学校における実習（臨床実践））

授業科目名	臨床教育開発実習（特別支援）			実習	
科目区分	必修	授業形態	複数（TT）	単位数	4単位
担当教員名	全専任教員				
授業の目的	これまでの「学校における実習」及び「理論系」・「融合系」科目で修得した内容等と関連づけながら、自ら立案・実施した教育実践の分析を通して得られた知見と課題に基づき、学校・地域の教育課題を視野に入れた特別支援教育の教育実践をデザインし、指導力を深化させる。さらに、現職教員学生は、ミドルスクールリーダー教員として、他の教員との協働による学校・地域の「臨床」に即した実践と研究を進める資質・能力を身に付ける。				
授業の概要	自ら立案・実施した教育実践の分析を通して得られた知見と課題に基づき、学校・地域の教育課題を視野に入れた教育実践をデザインし、指導力を深化させる。「臨床教育総合演習A・B」と連動しながら、大学と勤務校あるいは実習校とを往還することで各領域の特別支援領域教員のチーム・ティーチングを通じた学修により、学校・地域の「臨床」に即した実践と研究を進める。				
学習の到達目標	<p>（ストレートマスター）</p> <p>特別支援教育に関する教育実践力をさらに高めるとともに、特別な教育・発達ニーズを有する子どもに関わる教育課題解決のために必要な教材研究・授業・指導支援等の研究開発力を身につける。</p> <p>（現職教員学生）特別支援領域に関する自らの教育実践の分析を通して得られた知見と課題に基づき、学校・地域の教育課題解決のための研究開発力を高める。</p>				
授業の内容	<p>・教職大学院の教員が、現職教員学生の勤務校あるいは実習校担当教員と連携して指導を行う。</p> <p>臨床教育総合演習A・Bと連動しながら、大学と実習校（あるいは勤務校）を往還し、各領域の特別支援領域教員のチーム・ティーチングを通じた学修により、学校現場の「臨床」に根ざした実践と研究に取り組む。</p>				
教科書・参考書等	<p><教科書> 履修者の関心に基づき、その都度提示する。</p> <p><参考書>適宜、紹介する。</p>				
評価の観点・方法	<p>【観点】①自分の教育課題に関するこれまでの成果を現場の実態に即して十分に検証できているか。②学校の教育課題との関連を意識したうえで、自ら指導支援計画や解決策を企画・立案し、提案することができるか。③自ら企画・立案した計画や解決策に関する成果を学校や地域に還元する手法を実現できているか。</p> <p>【方法】実習校担当教員に所見・意見を求めるとともに、シラバスに示された到達水準に基づき、実習記録、実習の成果や課題等に関するレポート等もふまえて総合的に評価する。</p>				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準B</p> <p>自分の実践研究テーマに関するこれまでの成果を教育現場の実態に即して検証した結果をもとに、教育課題解決の方法を入念に企画・立案し、適切な根拠を持って示すことができる。</p>
S	<p>自分の実践研究テーマに関するこれまでの成果を教育現場の実態に即して検証した結果を適切に示すことができ、それをもとにした教育課題解決のための方法を入念に企画・立案し、その概要を、学校や地域において具体的に実現するプロセスと合わせて、適切な根拠とともに示すことができる。</p>
A	<p>自分の実践研究テーマに関するこれまでの成果を教育現場の実態に即して検証した結果を適切に示すことができ、それをもとにした教育課題解決のための計画を入念に企画・立案し、その概要を学校や地域への外部公開も意識しながら適切な根拠を持って示すことができる。</p>
B	<p>自分の実践研究テーマに関するこれまでの成果を教育現場の実態に即して検証した結果をもとに、教育課題解決のための計画を入念に企画・立案し、適切な根拠を持って示すことができる。</p>
C	<p>自分の実践研究テーマに関するこれまでの成果を教育現場の実態に即して検証した結果をもとに、教育課題解決の方法を企画・立案しその概要を示すことができる。</p>
D	<p>自分の実践研究テーマに関するこれまでの成果を教育現場の実態に即して検証した結果を示せず、教育課題解決の方法を企画・立案するに至っていない。</p>
講義時間外に必要な学修時間の目安	<p>毎回、事前・事後にそれぞれ90分。</p>

専門高度化深化科目（実践的指導力融合科目）

授業科目名	実態把握と実践適応論			演習	
科目区分	必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	全専任教員				
授業の目的	実践研究テーマに関する実態把握と実践適応				
授業の概要	各種の教育課題の解決との関連に配慮しつつ、必要な理論的知見を獲得しながら、自己の実践研究テーマに関する課題の「把握」を行う。そして、課題の把握を通じて得た知見・方法の実践への「適応」を行うための準備を行う。教育科学専門領域、教科教育専門領域、教科専門領域、特別支援教育専門領域および実務家教員の指導のもとに以上の過程について総合的に考察を行い、「実践適応と評価・分析論」での学修に結びつけていく。				
学習の到達目標	各種の教育課題との関わりで自身の実践研究テーマを明確化し、テーマに関わる実態を適切に把握することができる。				
授業の内容	1	オリエンテーション			
	2	各種教育課題・教育実践における実態把握について（1）：実態の記述			
	3	各種教育課題・教育実践における実態把握について（2）：実態の理解			
	4	各種教育課題・教育実践における実態把握について（3）：実態の概要			
	5	各種教育課題・教育実践における適応について（1）：実態把握をどう生かすか			
	6	各種教育課題・教育実践における適応について（2）：背景要因の考察をふまえて			
	7	各種教育課題・教育実践における適応について（3）：背景要因の理解をふまえて			
	8	各種教育課題・教育実践における適応について（4）：問題発生の構造をふまえて			
	9	各種教育課題・教育実践における適応について（5）：問題発生の構造理解をふまえて			
	10	院生の実践研究テーマ発表と相互批評（1）テーマの紹介・共有			
	11	院生の実践研究テーマ発表と相互批評（2）実態把握に用いる方法論の共有			
	12	院生の実践研究テーマ発表と相互批評（3）教育実践への適応結果の紹介・共有			
	13	院生の実践研究テーマ発表と相互批評（4）実態把握・適応プロセスの検討			
	14	総括討論と実態把握・適応のポイントの意識化			
	15	各種教育課題・教育実践における実態把握・適応をどう行うべきか			
教科書・参考書等	受講者の関心に基づき、その都度提示する。				
評価の観点・方法	<p>【観点】実践研究論文の作成に関わる研究テーマの把握が理論と実践の往還性を意識しながら行われ、実践での適応を行う準備がされているか。その過程を整理し、実践研究論文（1年次中間）にまとめることができるか。</p> <p>【方法】資料収集・分析等のプロセス、実践研究論文（1年次中間）およびその発表により、評価する。</p>				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B：標準とされる到達度）</p> <p>学校課題探究実習Ⅰの成果や勤務校におけるこれまでの実践の振り返り，先行研究検討や各種研究・実践活動の成果の確認が十分にできており，研究テーマを明確にし，実践研究論文（1年次中間）の作成と発表ができる。</p>
S	<p>学校課題探究実習Ⅰの成果や勤務校におけるこれまでの実践の振り返り，先行研究検討や各種研究・実践活動の成果の確認が十分にできており，研究テーマが明確になっていることに加えて，実践への適応につながる考察も十分である。さらに，実践研究論文（1年次中間）の作成と発表において，内容と形式面で効果的に学修成果を伝える工夫がみられる。</p>
A	<p>学校課題探究実習Ⅰの成果や勤務校におけるこれまでの実践の振り返り，先行研究検討や各種研究・実践活動の成果の確認が十分にできており，研究テーマが明確になっていることに加えて実践への適応につながる考察にまで至っている。さらに，実践研究論文（1年次中間）の作成と発表において，内容と形式面で効果的に学修成果を伝える工夫がみられる。</p>
B	<p>学校課題探究実習Ⅰの成果や勤務校におけるこれまでの実践の振り返り，先行研究検討や各種研究・実践活動の成果の確認が十分にできており，研究テーマを明確にし，実践研究論文（1年次中間）の作成と発表ができる。</p>
C	<p>学校課題探究実習Ⅰの成果や勤務校におけるこれまでの実践の振り返り，ならびに先行研究検討や各種研究・実践活動の成果を通して研究テーマを明確にし，実践研究論文（1年次中間）の作成と発表ができる。</p>
D	<p>学校課題探究実習Ⅰの成果や勤務校におけるこれまでの実践の振り返り，あるいは先行研究検討や各種研究・実践活動の成果の確認が不十分であり，研究テーマが明確になっておらず，実践研究論文（1年次中間）の作成と発表に至らない。</p>
講義時間外に必要な学修時間の目安	120～180分

専門高度化深化科目（実践的指導力融合科目）

授業科目名	実践適応と評価・分析論			演習	
科目区分	必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	全専任教員				
授業の目的	実践研究テーマに関する知見の適応と評価・分析				
授業の概要	自己の実践研究テーマに即した把握および適応（実践）の一連のプロセスを発展させ、中間的な成果と課題について、教育科学専門領域、教科教育領域、教科専門領域、特別支援教育専門領域および実務家教員の知見を踏まえて評価・分析し、その結果を1年次最終報告としての実践研究論文にまとめる。				
学習の到達目標	各自の実践研究テーマに関して得た理論的知見を教育実践に適応し、成果と課題を評価・分析することができる。				
授業の内容	1	オリエンテーション			
	2	各種教育課題・教育実践の実態把握結果の教育実践への適応			
	3	教育課程・指導支援計画等への適応（1）仮説的段階			
	4	教育課程・指導支援計画等への適応（2）評価の段階			
	5	教育課程・指導支援計画等への適応（3）分析の段階			
	6	教育課程・指導支援計画等への適応（4）仮説と課題の再設定の段階			
	7	院生の実践研究テーマ発表と相互批評（1）適応・分析結果の提示			
	8	院生の実践研究テーマ発表と相互批評（2）適応・分析結果の検討			
	9	院生の実践研究テーマ発表と相互批評（3）適応・分析結果の修正			
	10	院生の実践研究テーマ発表と相互批評（4）新しい課題の把握と共有			
	11	総括討論と実践適応結果の評価・分析のポイント			
	12	各種教育課題の解明および教育課程・指導支援計画等の構造化（1）省察			
	13	各種教育課題の解明および教育課程・指導支援計画等の構造化（2）中間的まとめに向けて			
	14	研究成果の中間的総括（1）実践研究論文（1年次最終）の構成・作成方法（全員）			
	15	研究成果の中間的総括（2）実践研究論文（1年次最終）の作成と検討			
教科書・参考書等	大学院生の関心にに基づき、その都度提示する。				
評価の観点・方法	<p>【観点】自身の実践研究テーマに関わって把握された課題に関する理論的・実践的知見を実践において適応し、その結果を学校現場の現状と課題に即しつつ分析・評価を行い、理論的・実践的な裏付けのもとに整理し、実践研究論文（1年次最終）にまとめることができるか。</p> <p>【方法】資料収集・分析等のプロセス、実践研究論文（1年次最終）の内容およびその発表により、評価する。</p>				

成績評価	
標準的な到達基準	<p>・ 基準（評価B：標準とされる到達度）</p> <p>1年次「学校における実習」の成果や勤務する学校で行った実践の省察，ならびに先行研究検討や各種研究・実践活動の成果の考察が十分にできており，実践研究テーマに関わる実践と研究の評価と分析が適切に実施され，実践研究論文（1年次最終）の作成と発表ができる。</p>
S	<p>1年次の「学校における実習」の成果や勤務する学校で行った実践の省察，ならびに先行研究検討や各種研究・実践活動の成果の考察が十分にできており，実践研究テーマに関わる実践と研究の評価と分析が適切に実施されているだけでなく，2年次におけるさらなる分析の見通しも十分である。また，実践研究論文（1年次最終）の作成と発表について，内容と形式面で学修成果を効果的に伝える工夫がみられる。</p>
A	<p>1年次の「学校における実習」の成果や勤務する学校で行った実践の省察，ならびに先行研究検討や各種研究・実践活動の成果の考察が十分にできており，実践研究テーマに関わる実践と研究の評価と分析が適切に実施されているだけでなく，2年次におけるさらなる分析の見通しを得るまでに至っている。また，実践研究論文（1年次最終）の作成と発表について，内容と形式面で学修成果を効果的に伝える工夫がみられる。</p>
B	<p>1年次の「学校における実習」の成果や勤務する学校で行った実践の省察，ならびに先行研究検討や各種研究・実践活動の成果の考察が十分にできており，実践研究テーマに関わる実践と研究の評価と分析が適切に実施され，実践研究論文（1年次最終）の作成と発表ができる。</p>
C	<p>1年次の「学校における実習」の成果や勤務する学校で行った実践の省察，ならびに先行研究検討や各種研究・実践活動の成果を通して，実践研究テーマに関わる実践と研究の評価と分析を行い，実践研究論文（1年次最終）の作成と発表ができる。</p>
D	<p>1年次の「学校における実習」の成果や勤務する学校で行った実践の省察，先行研究検討や各種研究・実践活動の成果の考察が不十分であり，実践研究テーマに関わる実践と研究の評価と分析ができておらず，実践研究論文（1年次最終）の作成と発表に至らない。</p>
講義時間外に必要な学修時間の目安	120～180分

専門高度化深化科目（実践的指導力融合科目）

授業科目名	臨床教育総合演習 A			演習	
科目区分	必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	全専任教員				
授業の目的	<把握－適応（実践）－評価－分析>のプロセスの省察と改善・開発への動機付け				
授業の概要	自己の実践研究テーマに関する教育課題の把握および適応（実践）、評価および分析をより深め、明らかになった成果と課題について、教育科学専門領域、教科教育・特別支援教育専門領域、教科専門領域教員および実務家教員の知見を踏まえて総合的に考察を行い、取組みの改善に向けた見通しをもち、2年次中間報告としての実践研究論文にまとめる。				
学習の到達目標	実態把握から分析までのプロセスを通じて、各種教育課題への実践的取り組みにおける児童生徒や学校の実態および変容の記録を集積し、教育課程・指導支援計画等の編成とその検証のプロセスに進むための分析を行い、その結果についての中間的な総括を示すことができる。				
授業の内容	1	より深い課題の把握をどのように行うか			
	2	各種教育課題・教育実践におけるより深い実態把握（1）見通しを立てる			
	3	各種教育課題・教育実践におけるより深い実態把握（2）何を新たに把握するべきか			
	4	各種教育課題・教育実践におけるより深い実態分析（1）背景要因の精緻な分析			
	5	各種教育課題・教育実践におけるより深い実態分析（2）背景要因の精緻な理解			
	6	各種教育課題・教育実践におけるより深い実態分析（3）問題構造の精緻な分析			
	7	各種教育課題・教育実践におけるより深い実態分析（4）問題構造の精緻な理解			
	8	院生の実践研究テーマ発表と相互批評（1）より深い実態把握の提示と共有			
	9	院生の実践研究テーマ発表と相互批評（2）より深い実態把握の前提・方法論の検討			
	10	院生の実践研究テーマ発表と相互批評（3）より深い実態把握に向けた示唆			
	11	院生の実践研究テーマ発表と相互批評（4）より深い実態分析の提示と共有			
	12	院生の実践研究テーマ発表と相互批評（5）より深い実践分析の方法論の検討			
	13	院生の実践研究テーマ発表と相互批評（6）より深い実践分析に向けた示唆			
	14	各種教育課題・教育実践におけるより深い実態分析（5）成果発表と総括をどうするか			
	15	各種教育課題・教育実践におけるより深い実態分析（6）2年次中間まとめに向けて			
教科書・参考書等	当該大学院生の関心に基づき、その都度提示する。				
評価の観点と方法	【観点】各種教育課題のより深い実態把握・分析が、実践およびその記録の集積に基づき、教育課程・指導支援プラン等の編成と検証に生かせるかたちで行われているか。その過程を省察し、整理することができているか。 【方法】実践研究論文（2年次中間）の内容と発表、そこに至る過程での学修状況により、評価する。				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B：標準とされる到達度）</p> <p>各種教育課題や児童生徒の実態のより深い把握・分析が、適切に理論化され、臨床教育開発実習A等の成果と関連付けて十分に検証されたうえで、一定のフォーマットのもとに集積し、実践研究論文（2年次中間）にまとめ、発表できる。</p>
S	<p>各種教育課題や児童生徒の実態のより深い把握・分析が、適切に理論化され、臨床教育開発実習A等の成果と関連付けて十分に検証されていることに加えて、教育実践の検証・改善段階につながる考察が十分にできている。さらに、実践研究論文（2年次中間）の作成と発表において、内容と形式面で効果的に学修成果を伝える工夫がみられる。</p>
A	<p>各種教育課題や児童生徒の実態のより深い把握・分析が、適切に理論化され、臨床教育開発実習A等の成果と関連付けて十分に検証されていることに加えて、教育実践の検証・改善段階につながる考察にまで至っている。さらに、実践研究論文（2年次中間）の作成と発表において、内容と形式面で効果的に学修成果を伝える工夫がみられる。</p>
B	<p>各種教育課題や児童生徒の実態のより深い把握・分析が、適切に理論化され、臨床教育開発実習A等の成果と関連付けて十分に検証されたうえで、一定のフォーマットのもとに集積し、実践研究論文（2年次中間）にまとめ、発表できる。</p>
C	<p>各種教育課題や児童生徒の実態のより深い把握・分析が、理論化され、臨床教育開発実習A等の成果と関連付けて検証されたうえで、一定のフォーマットのもとに集積し、実践研究論文（2年次中間）にまとめ、発表できる。</p>
D	<p>各種教育課題の把握・分析や臨床教育開発実習A等の成果の確認が不十分であり、一定のフォーマットのもとに集積されておらず、実践研究論文（2年次中間）の作成と発表に至らない。</p>
講義時間外に必要な学修時間の目安	120～180分

専門高度化深化科目（実践的指導力融合科目）

授業科目名	臨床教育総合演習 A（特別支援）		演習		
科目区分	必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	全専任教員				
授業の目的	＜把握－適応（実践）－評価－分析＞のプロセスの省察と改善・開発への動機付け				
授業の概要	自己の実践研究テーマに関する教育課題の把握および適応（実践）、評価および分析をより深め、明らかになった成果と課題について、教育科学専門領域、特別支援教育専門領域、教科教育・専門領域教員および実務家教員の知見を踏まえて総合的に考察を行い、取り組みの改善に向けた見通しをもち、その成果を2年次中間報告としての実践研究論文にまとめる。				
学習の到達目標	実態把握から分析までのプロセスを通じて、各種教育課題への実践的取り組みにおける児童生徒や学校の実態および変容の記録を集積し、教育課程・指導支援計画等の編成とその検証のプロセスに進むための分析を行い、その結果についての中間的な総括を示すことができる。				
授業の内容	1	より深い課題の把握をどのように行うか			
	2	各種教育課題・教育実践におけるより深い実態把握（1）見通しを立てる			
	3	各種教育課題・教育実践におけるより深い実態把握（2）何を新たに把握すべきか			
	4	各種教育課題・教育実践におけるより深い実態分析（1）背景要因の精緻な分析			
	5	各種教育課題・教育実践におけるより深い実態分析（2）背景要因の精緻な理解			
	6	各種教育課題・教育実践におけるより深い実態分析（3）問題構造の精緻な分析			
	7	各種教育課題・教育実践におけるより深い実態分析（4）問題構造の精緻な理解			
	8	院生の実践研究テーマ発表と相互批評（1）より深い実態把握の提示と共有			
	9	院生の実践研究テーマ発表と相互批評（2）より深い実態把握の前提・方法論の検討			
	10	院生の実践研究テーマ発表と相互批評（3）より深い実態把握に向けた示唆			
	11	院生の実践研究テーマ発表と相互批評（4）より深い実態分析の提示と共有			
	12	院生の実践研究テーマ発表と相互批評（5）より深い実践分析の方法論の検討			
	13	院生の実践研究テーマ発表と相互批評（6）より深い実践分析に向けた示唆			
	14	各種教育課題・教育実践におけるより深い実態分析（5）成果発表と総括をどうするか			
	15	各種教育課題・教育実践におけるより深い実態分析（6）2年次中間まとめに向けて			
教科書・参考書等	当該大学院生の関心に基づき、その都度提示する。				
評価の観点と方法	【観点】各種教育課題のより深い実態把握・分析が、実践およびその記録の集積に基づき、教育課程・指導支援計画等の編成と検証に生かせるかたちで行われているか。その過程を省察し、整理することができているか。【方法】実践研究論文（2年次中間）の内容と発表、そこに至る過程での学修状況により、評価する。				

成績評価	
標準的な到達水準	<ul style="list-style-type: none"> ・基準（評価B：標準とされる到達基準） <p>各種教育課題や児童生徒の実態のより深い把握・分析が、適切に理論化され、臨床教育開発実習A等の成果と関連付けて十分に検証されたうえで、一定のフォーマットのもとに集積し、実践研究論文（2年次中間）にまとめ、発表できる。</p>
S	各種教育課題や児童生徒の実態のより深い把握・分析が、適切に理論化され、臨床教育開発実習A等の成果と関連付けて十分に検証されていることに加えて、教育実践の検証・改善段階につながる考察が十分にできている。さらに、実践研究論文（2年次中間）の作成と発表において、内容と形式面で効果的に学修成果を伝える工夫がみられる。
A	各種教育課題や児童生徒のより深い実態の把握・分析が、適切に理論化され、臨床教育開発実習A等の成果と関連付けて十分に検証されていることに加えて、教育実践の検証・改善段階につながる考察にまで至っている。さらに、実践研究論文（2年次中間）の作成と発表において、内容と形式面で効果的に学修成果を伝える工夫がみられる。
B	各種教育課題や児童生徒の実態のより深い把握・分析が、適切に理論化され、臨床教育開発実習A等の成果と関連付けて十分に検証されたうえで、一定のフォーマットのもとに集積し、実践研究論文（2年次中間）にまとめ、発表できる。
C	各種教育課題や児童生徒の実態のより深い把握・分析が、理論化され、臨床教育開発実習A等の成果と関連付けて検証されたうえで、一定のフォーマットのもとに集積し、実践研究論文（2年次中間）にまとめ、発表できる。
D	各種教育課題の把握・分析および臨床教育開発実習A等の成果の確認が不十分であり、一定のフォーマットのもとに集積されておらず、実践研究論文（2年次中間）の作成と発表に至らない。
講義時間外に必要な学修時間の目安	120～180分

専門高度化深化科目（実践的指導力融合科目）

授業科目名	臨床教育総合演習B			演習	
科目区分	必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	全専任教員				
授業の目的	実践研究プロセスの総括と開発				
授業の概要	把握－適応（実践）－評価－分析の一連のプロセスを総括し、その延長線上に、各種の教育課題の解決に向けた新たな試みとして教育課程・指導支援法等の「開発」の活動を行い、その成果を最終的な実践研究論文としてまとめる。				
学習の到達目標	各自の実践研究テーマに関わる課題に対する把握－適応－評価－分析のプロセスを検証し、課題の解決方法を見出だし、新しい教育実践を構想・開発することができる。				
授業の内容	1	各種教育課題・教育実践のより深い実態分析結果の適応			
	2	教育課程・指導支援計画等への適応（1）仮説の再設定			
	3	教育課程・指導支援計画等への適応（2）再設定した仮説の検討			
	4	教育課程・指導支援計画等への適応（3）省察			
	5	教育課程・指導支援計画等への適応（4）仮説の補強			
	6	院生の実践研究テーマ発表と相互批評（1）より深い実態把握・分析結果の共有			
	7	院生の実践研究テーマ発表と相互批評（2）より深い実態把握・分析結果の検討			
	8	院生の実践研究テーマ発表と相互批評（3）再設定した仮説の提示とその検討			
	9	院生の実践研究テーマ発表と相互批評（4）再設定した仮説の補強と確定			
	10	各種教育課題・教育実践の総合的考察（1）成果の総括			
	11	各種教育課題・教育実践の省察（2）教育課程・指導支援計画等の開発			
	12	各種教育課題・教育実践の省察（3）まとめに向けた知見の整理・構造化			
	13	研究成果の総括（1）実践研究論文（最終）の構成と作成方法			
	14	研究成果の総括（2）実践研究論文（最終）の作成			
	15	研究成果の総括（3）実践研究論文（最終）の確定			
教科書・参考書等	当該大学院生の関心に基づき、その都度提示する。				
評価の観点と方法	【観点】各種教育課題に関する実態把握から分析のプロセスを検証し、検証結果をもとに教育課程・指導支援計画等を開発し、提案することができる。実践研究テーマに関する一連のプロセスを示す成果の集積とさらなる課題について整理し、示すことができる。 【方法】2年次最終実践研究論文の内容・発表と、その過程を評価する。				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B：標準とされる到達度）</p> <p>各種教育課題や児童生徒の実態の把握・適応・分析が、臨床教育開発実習B等の成果と関連づけて十分に検証され、教育課程・指導支援計画等として具体的な提案がなされ、現場で検証可能なかたちになっている。一定のフォーマットのもとにこれまでの学修成果が総括的に集積され、その成果を実践研究論文（2年次最終）にまとめ、発表できる。</p>
S	<p>各種教育課題や児童生徒の実態の把握・適応・分析が、臨床教育開発実習B等の成果と関連づけて十分に検証され、教育課程・指導支援計画等として具体的な提案がなされ、現場で検証され改善されるだけでなく、地域等の教育課題解決に向けた提案ができるかたちになっている。一定のフォーマットのもとにこれまでの学修成果が総括的に集積され、実践研究論文（2年次最終）にまとめ、発表する際にも、学習の成果を効果的に示す工夫がなされている。</p>
A	<p>各種教育課題や児童生徒の実態の把握・適応・分析が、臨床教育開発実習B等の成果と関連づけて十分に検証され、教育課程・指導支援計画等として具体的な提案がなされ、現場で検証され改善されることが可能なかたちになっている。一定のフォーマットのもとにこれまでの学修成果が総括的に集積され、実践研究論文（2年次最終）にまとめ、発表する際にも、学習の成果を効果的に示す工夫がなされている。</p>
B	<p>各種教育課題や児童生徒の実態の把握・適応・分析が、臨床教育開発実習B等の成果と関連づけて十分に検証され、教育課程・指導支援計画等として具体的な提案がなされ、現場で検証可能なかたちになっている。一定のフォーマットのもとにこれまでの学修成果が総括的に集積され、その成果を実践研究論文（2年次最終）にまとめ、発表できる。</p>
C	<p>各種教育課題や児童生徒の実態の把握・適応・分析が、臨床教育開発実習B等の成果と関連づけて検証され、教育課程・指導支援計画等として具体的な提案がなされている。一定のフォーマットのもとにこれまでの学修成果が総括的に集積され、その成果を実践研究論文（2年次最終）にまとめ、発表できる。</p>
D	<p>各種教育課題や児童生徒の実態の把握・適応・分析のプロセスが臨床教育開発実習B等の成果と関連づけて検証されておらず、教育課程・指導支援計画等に結実していない。これまでの学修成果が一定のフォーマットのもとに集積されておらず、実践研究論文（2年次最終）の作成と発表に至らない。</p>
講義時間外に必要な学修時間の目安	120～180分

専門高度化深化科目（実践的指導力融合科目）

授業科目名	臨床教育総合演習B（特別支援）		演習		
科目区分	必修	授業形態	複数（TT）	単位数	2単位
担当教員名	全専任教員				
授業の目的	実践研究プロセスの総括と開発				
授業の概要	把握－適応（実践）－評価－分析の一連のプロセスを総括し、その延長線上に、各種の教育課題の解決に向けた新たな試みとして教育課程・指導支援計画等の「開発」の活動を行い、その成果を最終的な実践研究論文としてまとめる。				
学習の到達目標	各自の実践研究テーマに関わる課題に対する把握－適応－評価－分析のプロセスを検証し、課題の解決方法を見出し、新しい教育実践を構想・開発することができる。				
授業の内容	1	各種教育課題・教育実践のより深い実態分析結果の適応			
	2	教育課程・指導支援計画等への適応（1）仮説の再設定			
	3	教育課程・指導支援計画等への適応（2）再設定した仮説の検討			
	4	教育課程・指導支援計画等への適応（3）省察			
	5	教育課程・指導支援計画等への適応（4）仮説の補強			
	6	院生の実践研究テーマ発表と相互批評（1）より深い実態把握・分析結果の共有			
	7	院生の実践研究テーマ発表と相互批評（2）より深い実態把握・分析結果の検討			
	8	院生の実践研究テーマ発表と相互批評（3）再設定した仮説の提示とその検討			
	9	院生の実践研究テーマ発表と相互批評（4）再設定した仮説の補強と確定			
	10	各種教育課題・教育実践の総合的考察（1）成果の総括			
	11	各種教育課題・教育実践の省察（2）教育課程・指導支援計画等の開発			
	12	各種教育課題・教育実践の省察（3）まとめに向けた知見の整理・構造化			
	13	研究成果の総括（1）実践研究論文（最終）の構成と作成方法			
	14	研究成果の総括（2）実践研究論文（最終）の作成			
	15	研究成果の総括（3）実践研究論文（最終）の確定			
教科書・参考書等	当該大学院生の関心に基づき、その都度提示する。				
評価の観点と方法	<p>【観点】各種教育課題に関する実態把握から分析のプロセスを検証し、検証結果をもとに教育課程・指導支援計画等を開発し、提案することができる。実践研究テーマに関する一連のプロセスを示す成果の集積とさらなる課題について整理し、示すことができる。</p> <p>【方法】2年次最終実践研究論文の内容・発表と、その過程を評価する。</p>				

成績評価	
標準的な到達水準	<p>・基準（評価B：標準とされる到達基準）</p> <p>各種教育課題や児童生徒の実態の把握・適応・分析が、臨床教育開発実習B等の成果と関連づけて十分に検証され、教育課程・指導支援計画等として具体的な提案がなされ、現場で検証可能なかたちになっている。一定のフォーマットのもとにこれまでの学修成果が総括的に集積され、その成果を実践研究論文（2年次最終）にまとめ、発表できる。</p>
S	<p>各種教育課題や児童生徒の実態の把握・適応・分析が、臨床教育開発実習B等の成果と関連づけて十分に検証され、教育課程・指導支援計画等として具体的な提案がなされ、現場で検証され改善されるだけでなく、地域等の教育課題解決に向けた提案ができるかたちになっている。一定のフォーマットのもとにこれまでの学修成果が総括的に集積され、実践研究論文（2年次最終）にまとめ、発表する際にも、学習の成果を効果的に示す工夫がなされている。</p>
A	<p>各種教育課題や児童生徒の実態の把握・適応・分析が、臨床教育開発実習B等の成果と関連づけて十分に検証され、教育課程・指導支援計画等として具体的な提案がなされ、現場で検証され改善されることが可能なかたちになっている。一定のフォーマットのもとにこれまでの学修成果が総括的に集積され、実践研究論文（2年次最終）にまとめ、発表する際にも、学習の成果を効果的に示す工夫がなされている。</p>
B	<p>各種教育課題や児童生徒の実態の把握・適応・分析が、臨床教育開発実習B等の成果と関連づけて十分に検証され、教育課程・指導支援計画等として具体的な提案がなされ、現場で検証可能なかたちになっている。一定のフォーマットのもとにこれまでの学修成果が総括的に集積され、その成果を実践研究論文（2年次最終）にまとめ、発表できる。</p>
C	<p>各種教育課題や児童生徒の実態の把握・適応・分析が、臨床教育開発実習B等の成果と関連づけて検証され、教育課程・指導支援計画等として具体的な提案がなされている。一定のフォーマットのもとにこれまでの学修成果が総括的に集積され、その成果を実践研究論文（2年次最終）にまとめ、発表できる。</p>
D	<p>各種教育課題や児童生徒の実態の把握・適応・分析のプロセスが臨床教育開発実習B等の成果と関連づけて検証されておらず、教育課程・指導支援計画等に結実していない。これまでの学修成果が一定のフォーマットのもとに集積されておらず、実践研究論文（2年次中間）の作成と発表に至らない。</p>
講義時間外に必要な学修時間の目安	120～180分